

鶴松遺跡 II

(日本電信電話公社山科無線中継所)
(建設に伴う発掘調査報告書)

1987.2

静岡県袋井市教育委員会

鶴松遺跡 II

(日本電信電話公社山科無線中継所)
建設に伴う発掘調査報告書

1987.2

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和57年2月22日～57年3月31日に実施した静岡県袋井市小山字古深田387—1番地他に位置する鶴松（つるまつ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は鶴松遺跡Ⅱ次調査と便宜的に呼称することとしたが、第Ⅰ次調査は昭和47年に遺跡内の道路拡張に伴う発掘調査として川井正一氏らにより実施され、この後、昭和58年には第Ⅲ次調査として松井一明氏により中部電力地下ケーブル埋設工事に伴い道路部分が調査されている。第Ⅰ次調査、第Ⅲ次調査の概要についてはそれぞれの報告が詳しいので参照されたい。
3. 今回の調査は、日本電信電話公社を委託者とし袋井市長を受託者とし袋井市教育委員会を調査主体として実施された。
4. 発掘調査は、永井義博（袋井市教育委員会）を発掘担当者として静岡県教育委員会文化課の指導を得て行われた。
5. 本報告書の執筆、編集は永井義博が担当した。
6. 出土品整理、報告書作成にあたり寺田義昭、山本宏司、大庭京子、白井洋子、早川保子、寺田妙子、内山笑子、鈴木栄子の各氏の協力を得た。
7. 本書に使用した図版は永井義博、鈴木敏則氏の図を早川保子がトレースし、写真撮影はすべて永井義博が行った。
8. 題字は山田恵子氏（社会教育課）にお願いした。
9. 調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 経 過 報 告	1
第2章 調 査 体 制	1
第3章 遺 跡 環 境	2
第4章 遺 構 概 説	4
(a) 第1グリットの遺構	4
(b) 第2グリットの遺構	4
(c) 第3・4グリットの遺構	6
(d) 第5グリットの遺構	7
第5章 遺 物 概 説	8
第6章 結 語	42

挿 図 目 次

第1図 鶴松遺跡位置図……………	3	第14図 出土土器拓影(2)……………	29
第2図 グリット設定図……………	3	第15図 出土土器拓影(3)……………	30
第3図 遺構実測図……………	5	第16図 出土土器拓影(4)……………	31
第4図 出土土器実測図(1)……………	9	第17図 出土土器拓影(5)……………	32
第5図 出土土器実測図(2)……………	11	第18図 第I次調査出土土器実測図(1)……………	39
第6図 出土土器実測図(3)……………	13	第19図 第I次調査出土土器実測図(2)……………	40
第7図 出土土器実測図(4)……………	16	第20図 第I次調査出土土器実測図(3)……………	41
第8図 出土土器実測図(5)……………	17	第21図 袋井市山下遺跡出土土器……………	47
第9図 出土土器実測図(6)……………	19	第22図 太田川周辺の縄文時代生産領域……………	53
第10図 出土土器実測図(7)……………	20	第23図 古磐田海を囲む縄文時代遺跡の出土土器量……………	53
第11図 出土土器実測図(8)……………	21	第24図 磐田市馬坂遺跡出土土器実測図……………	55
第12図 出土土器実測図(9)……………	23	第25図 後期弥生土器一覧表……………	57
第13図 出土土器拓影(1)……………	28		

図 版 目 次

図版1 (A) 調査区全景(南より)	図版10 出土遺物 4-6、5-1、5-2、5-3、5-4、5-6、
(B) 調査風景(南より)	5-12、5-14、8-30
図版2 (A) S D 7 第1層の土器(南より)	図版11 出土遺物 6-1、6-2、6-4、6-6、6-7
(B) S D 7 完掘状況(南より)	図版12 出土遺物 7-1、7-2、7-3、7-12、7-18、
図版3 (A) S D 4 遺物出土状況(北より)	7-19
(B) S D 4 完掘写真(東より)	図版13 出土遺物 7-23、8-11、8-35、9-1、9-2、
図版4 (A) S D 4 条痕文系土器出土状況	9-3、9-4、9-6
(B) Pit 7 土器棺出土状況	図版14 出土遺物 9-5、9-7、9-11
図版5 (A) S D 5 遺物出土状況(東より)	図版15 出土遺物 10-4、10-5、10-14、10-15、11-4
(B) S D 1、S K 1 完掘状況(北より)	図版16 (A) 拓本No.1～No.17
図版6 (A) Pit 9 遺物出土状況	(B) 出土遺物 5-13、5-14とS D 4 追加資料
(B) S D 7 第3層遺物集中地点	図版17 (A) S D 4 追加資料
図版7 (A) S D 7 遺物集中地点(北側)	(B) S D 7 遺物集中地点(南側)
(B) 拓本No.18～No.32	図版18 (A) 拓本No.33～No.48
図版8 (A) S D 7、S D 8 重複関係	(B) 拓本No.49～No.64
セクション	図版19 (A) 拓本No.65～No.83
(B) S D 4 上層と下層	(B) 拓本No.85～No.104
図版9 出土遺物 4-1、4-2、4-3、4-4、4-5、	図版20 (A) 拓本No.105～No.135
5-8	

第1章 経過報告

日本電信電話公社は東海地震等の非常災害連絡通信用として、また一般公衆通信、TV伝送用として東京～名古屋～大阪間市外電話回線（無線方式）を計画した。これは準ミリ波を利用した無線方式で約3kmに1ヶ所の割合で中継地を設けるため袋井市内では袋井市山科地内ほか2ヶ所に中間無線通信所が建設されることとなった。ところがこの地区は中遠地域の弥生時代の大集落として著名な鶴松遺跡の中心であった。現地で埋蔵文化財の説明板を確認した名古屋無線通信部は袋井市教育委員会に文化財の所在の有無の確認について依頼文書を提出した。さっそく教育委員会は遺跡地図を持って現地を踏査したところ確かに鶴松遺跡の中心部で、昭和48年に道路拡張に伴って発掘調査された地区とはわずか50mしか離れていなかった。このような状況のもと名古屋無線通信部と袋井市教育委員会は、たびたび協議を重ねた結果、国1バイパス発掘調査、長者平遺跡発掘調査等の関連から57年2月より発掘調査を開始することとなった。

発掘調査は“遠州のからっ風”の吹きすさぶ昭和57年2月22日より開始された。調査区の電力函基礎部分と中継柱基礎部分はそれぞれ1グリット、5グリットとして全面調査を行ない、北西隅と南西、南東隅にそれぞれ4×4mのグリットを入れ用地内での遺物分布を知ることとした。調査方法はユンボによりグリット内の耕作土、水田床土を除去しその下層からは作業員によって遺構確認のために精査を行なった。その結果、1・2・5グリットに比べて3・4グリットで顕著な遺物の出土状況を示したためそれぞれのグリットをつなぐように拡張し、さらに土器の集中が北方向に延びたため東端・西端を北側に向かってトレンチを拡張した。実測及び写真撮影は遺構検出後逐次行なった。実測は電々公社用地西側境界杭を基準に1/20実測図を原図にし、微細図は1/10で作図した。写真撮影は中型カメラ（マミヤRB6×7）を中心に小型カメラ（35mmニコンF2）で補ないながら撮影した。現地作業は悪天候と激しい湧水に悩まされながら3月30日に無事終了することができた。

第2章 調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 袋井市教育委員会 教 育 長 鈴 木 勲 一

社会教育課長 丸 尾 徹

社会教育係長 長 沼 宣 男

文化財係 吉 岡 伸 夫

永 井 義 博（調査担当者）

調査参加者

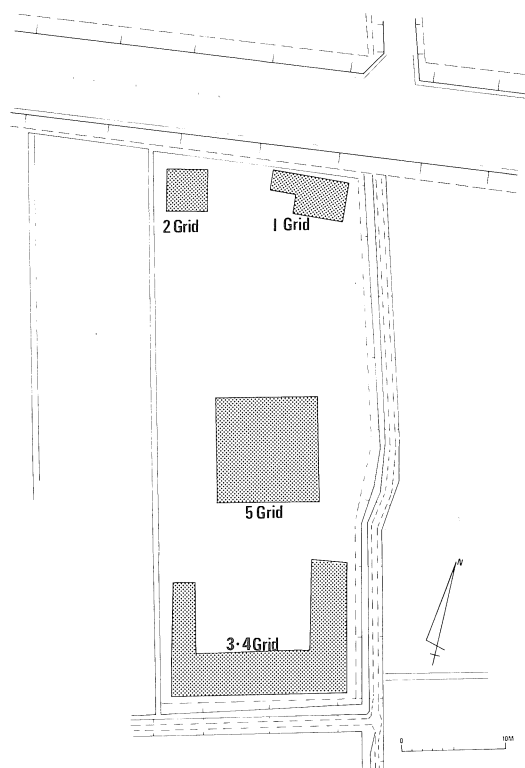
浅井征江、鈴木咲子、寺田せつ子、寺田ひで子、仲根世始子、名倉保子、早川はま、久野すみ
榊原コガネ、永井八枝子、永田きみ子、浅井直子、松江敏子、大場公彦、磯部裕二

第3章 遺 跡 環 境

鶴松遺跡は、東名高速道路袋井インターチェンジの北200mの太田川の旧河道により形成された微高地に位置する。この太田川は現在、周智郡春野町の春埜山（はるのさん）を源として南流し敷地川（しきじがわ）、小藪川（こやぶがわ）の水を集めて遠州灘へ注いでいる。この川底平野は三方を山に囲まれ、古代には南側には大きな潟が入り込んで独特の文化圏を残してきた。遺跡の西側を囲むのは最大幅4km、総延長11kmの広大な磐田原台地でその丘陵上東端には多数の弥生～古墳時代遺跡をのせている。遺跡北東方向は油山・可睡丘陵より派生した山塊が迫っており、この丘陵上にも弥生時代を中心に住居跡、墳墓等が散在している。このように低い丘陵に周囲を囲まれてはいるが、遺跡の位置する沖積低地は弥生時代中期から古墳時代、奈良、平安時代と常に人間の生産の場として、交通の要所として重要な役割を果たしてきたのである。

この太田川流域でまず最初に成立したと考えるのが鶴松遺跡である。第Ⅰ次調査の発掘は昭和47年に実施され竪穴住居跡22、大溝、Pit群、土壌などが検出されているが、このうち白岩式の土器を出す住居跡3、二之宮式の土器を出す住居跡2となりその他は菊川式の住居跡と見られている。大溝も白岩式から菊川式に至る各時代に掘削されており大雨のたび氾濫し流路を変える太田川に対してかなりの神経をつかっていたようである。弥生時代中期に成立した鶴松の「ムラ」は弥生時代後期まで栄えていくようでその後は旧河道の自然堤防に沿って北へ、南へと人々の生活は拡大していったと思われる。鶴松遺跡の南に位置する徳光遺跡は昭和43年に東名高速道路の袋井インターチェンジ建設に伴って発掘調査され溝状遺構を中心に弥生後期の土器と古式土師器を出土している。報告書の遺物を見ると弥生後期の土器の割合が古式土師器より多い傾向を示す。同じ自然堤防を南に下ると国道1号線袋井バイパスの建設で調査された土橋遺跡がある。ここの遺物は弥生時代後期後半の遺物から古式土師器を中心に出土している。また、木製品や動物遺体もこの時期のものが多く比較的残存状態は良い。このほかには蟹田川をはさんで西側の自然堤防上には同じく弥生時代後期の溝状遺構などを検出した玉越遺跡がある。しかし、この自然堤防は鶴松―徳光―土橋とつづく微高地とは別の自然堤防である。鶴松遺跡の北自然堤防上には鶴田Ⅱ遺跡―鶴田遺跡―川田遺跡と弥生時代後期から古墳時代の遺物を散布するところがある。これらの遺跡は残念ながら発掘調査が行なわれていないため詳細は不明である。鶴松遺跡東側の丘陵上には鶴松、機ヶ谷古墳群がある。昭和56年のヤマハ発動機袋井工場の建設に伴う発掘調査では台状墓、土壌墓を検出しており弥生時代後期から古墳時代初頭の墳墓の形態を示すものと思われる。

太田川の西、磐田原台地上にも弥生時代中期から古墳時代にかけての遺跡が集中している。このうち新豊院山墳墓群は、弥生時代の土壌3基、古墳時代の台状墓1基、古墳時代前期の前方後円墳1基などを検出したD地点をはじめとして、弥生時代中期からの造墓域として土壌、方形周溝墓、台状墓、前方後円墳、円墳と多数の遺構を検出している。



第4章 遺構概説

鶴松遺跡は北から南へ徐々に下る微高地上にある。土層の堆積は次のとおりである。

第1層 褐色土（耕作土）

第2層 暗褐色土（水田床土）

第3層 灰色粘土（無遺物層）

第4層 青色砂質土（無遺物層）

この用地内はいわゆる遺物包含層は確認できなく、遺物はすべて遺構覆土内より出土している。ただし、場所によっては第2層と第3層の間に黒色ピート層が入るところがあるが、基本的には第2層を重機で掘削すると第3層上に溝跡、土壇、Pit等が確認することができる。

（a）第1グリットの遺構

第1グリットは用地北東隅の調査区で、この部分に建設される電力函の大きさにあわせて、東西5m×南北4mの大きさであった。調査は重機により水田耕作土、床土を除去したところで第3層上面で溝跡（SD1）と土壇（SK1）が検出された。そのためSD1の西側をできる限り知るためグリットを拡張し調査した。

SD1は確認部分で幅60cm、深さ30cm、確認された長さは約7mを測る。土層堆積の状態は覆土の上層部分は黒色粘土層を基本とし、下層部分は黒色砂質土となっている。遺物は弥生土器を中心に覆土内に破片が散在している。

SK1はSD1と重複しており、長軸1.4m、短軸80cmの卵形の形態をしている。土層堆積遺物出土状態よりSK1のほうがやや新しいようである。遺物は有機質のやや弱い黒色土内に多量に含まれている。台付甕破片、壺胴部破片等が出土している。

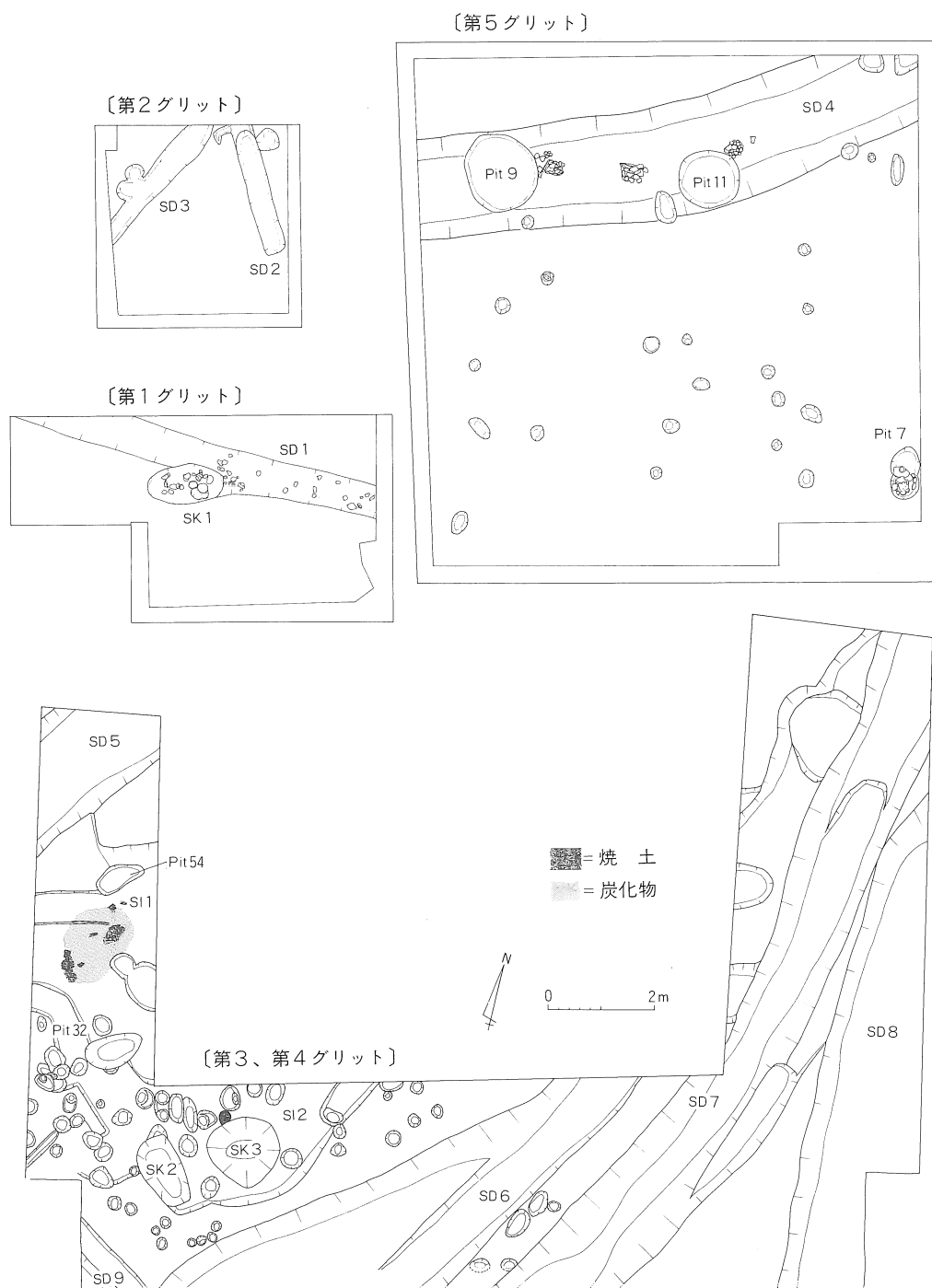
（b）第2グリットの遺構

第1グリット同様に第2層を掘削した段階で遺構が検出されている。第2グリットの北側で溝跡が交差しそうな状況で出土している。

SD2は北西から南東に主軸をとる幅40cm、深さ10cm確認部分での長さ2.4mの小溝である。北側のグリット外でSD3と交わると思われる。出土遺物は若干数の弥生土器片がある。

SD3は北東より南西に流れている幅40cm、深さ10cm、確認部分での長さ2.6mの小溝である。出土遺物は若干の弥生土器片がある。

用地北側は、かつて第1次調査で発掘された地区からわずか40mしか離れていない。しかし遺構、遺物の検出状況はきわめて希薄で住居跡の生活面を感じさせる遺構も検出されていない。このことより、やや遺跡の中心をはずれた集落外と考えることができる。



第3図 遺構実測図

(c) 第3、4グリットの遺構

第3、4グリットは用地の南東、南西の隅に設けられた4m×4mのグリットである。しかし、重機で耕作土を掘削中にはほぼ完形の弥生土器（高坏、壺など）が多量に検出されたため、重機の使用を中止し作業員により遺構面の精査を行った。周辺の土層、遺物などを検討したところ、この部分が大きな溝状遺構の中央部らしいと思われたため急きょ、第3、4グリットを結びさらに東西両端を北に拡張し溝状遺構の検出に努めた。拡張区内はほぼ全面に溝跡、Pit住居跡が重複して一面の黒色土の中にあちこち遺物が顔をのぞかせていた。精査の結果、溝状遺構5、住居跡状遺構2、土壌3、柱穴と考えられるPit若干数が検出された。なお、拡張区の東端、西端に排水用の集水ますを切ったため一部遺構が失われている。

SD5は第3、4グリット拡張区の北西部をかすめるように検出されている。溝内の土層堆積は第1層＝黒色ピート、第2層＝黒色土、第3層＝黒褐色土の順で各層とも多量の弥生土器を包含している。

SD6は第3、4グリットの中央あたりで検出された幅1.2m、深さ60cm、確認部分の長さは約9mを測る溝跡である。SD6はSD7から派生するような検出状況であるが土層観察からの遺構の新旧関係は確認できなかった。

SD7は検出された部分の北と南では若干異なった様子を見せている。北側部分は幅1.6m、深さ70cmのU字形を呈している。この溝はやや南側に下ったところで明確な段をもって約20cm底部のレベルが下がってくる。SD7の覆土は、第1層上面＝黒色ピート層、第1層下面＝完形土器を多量に含む黒色粘土層、第2層＝暗青灰色粘土層、第3層＝青灰色粘土層、第4層＝砂質青灰色粘土となっているが、溝内の土層堆積の常で水の流れによって部分的に異なった土が入り一定した状況とはなっていない。SD7の出土遺物は弥生土器のほか第4層中からモモの種8点と木製品が、第3層中からはコバルトブルーのガラス小玉が出土している。石器類も石斧片、たたき石片等が出土している。

SD8はSD6、SD7の埋没後の落ち込みと考えている。一応、本報告でも溝跡として取り扱っておくが、東側部分の立ち上りが調査区内では確認できず、また覆土がそのほとんどをピート層より構成しているため他の溝跡と若干状況が異なり池状遺構、または不定形の大形の落ち込みの一部とも思われる。覆土のピート層はSD6、SD7の第1層として流れ込んでおり、遺構底部に若干の黒色土を残すのみである。土器の出土量はかなり多いが、SD6、SD7と異なりほとんどが細片ばかりである。

SD9は第3、4グリット拡張区の南西隅で検出されている。しかし、残念ながら溝のほとんどを西側の集水ますで削り取られておりその規模、性格を明らかにすることは難しい。

SD5～SD9の5本の溝跡は、SD6、7、8が接している他はSD5とSD6がほぼ平行関係に、SD5、6とSD9とは直交する位置にある。つまり、3本ないしは4本の溝跡によって方形に区画された区域があることになるが、これによって周溝墓等の遺構を想定するのは少し難しいかもしれない。

住居跡（SI1、SI2）は共にその一部が発掘区の中に現れているのみで正確な規模はつ

かめていない。壁の立ち上りも水田耕作によりほとんど失なわれており住居跡の床面とPitの一部が検出されている。重複した住居跡間の新旧関係は確認できていない。

SI1は壁のわずかな立ち上りと床面の焼土と炭化物、径40cm、深さ10cmのPitが確認されている。

SI2は2つの土壌（SK2、SK3）と切り合っているためSK3北側のわずかな焼土と多数のPitが床面で検出されている。Pitの平均的な計測値は直径40cm、深さ38cmである。

SK2は長軸1.4m、短軸80cm、深さ70cmとやや大型で、覆土は黒色粘土中にわずかに弥生土器片を含んでいる。

SK3は径1.2mの浅い皿状の土壌である。覆土は黒褐色粘土で復元するとほぼ完形になる壺形土器を出土している。中期中葉の遺物を出土している。

SK2はSI2とほぼ同時期、SK3はSI2より新しい遺構であるというのが調査中のセクション等からの所見である。

(d) 第5グリットの遺構

他のグリットの調査と同様に重機で第3層上面まで掘削したところ多数のPitと溝跡が検出された。溝跡は覆土の最上層より完形の土器が見えたのでその付近の重機による掘削は中止し作業員により精査を行った。

SD4は第5グリットの中を東西方向に横切る溝跡で幅2m、深さ80cm、確認されている長さは10mであるがさらに東へ、西へと延びると思われる。溝内は第1層～第3層に分かれ遺物もかなり出土している。溝底部は砂礫層で湧水が激しく晴天つづきでも常に満水である。

Pitは、SD4と重複する2つの大きな土壌状の遺構と、その他の小Pitに分かれる。また第5グリット南東隅のPit7のように土壌墓のような形態をとるものがある。

Pit9はSD4の覆土を切ってつくられた径1.4m、深さ30cmのほぼ円形の土壌状の遺構である。遺物はほとんどが弥生後期のいわゆる菊川式の遺物であるが一部底部の遺物の中にはSD4の弥生中期の土器片が混入している。土器は壺形土器のほぼ完形品が入っている。

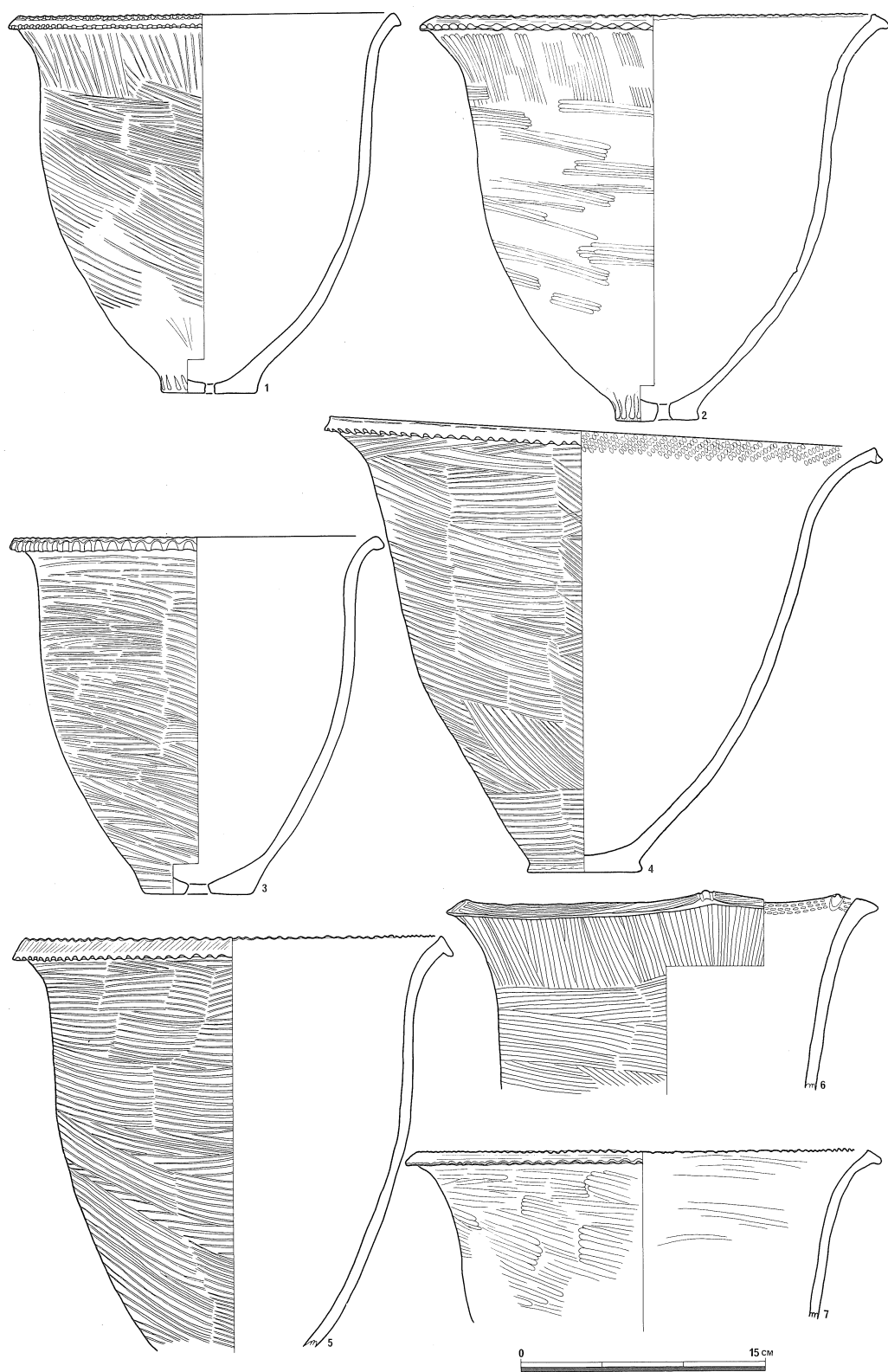
Pit11はPit9の東側に3mの距離をもって位置する。径は1.2m、深さ20cmの数値でやや小さな値である。覆土は黒色土である。土器片もやや小さなものが多い。

小さなPitはその他に22あるが、とくに住居跡や掘立柱建物跡の柱穴となるような形態のものではなく、Pitの並びに特徴をもつ遺構はなかった。

Pit7、8は調査中には二つのPitが接するように検出された。しかし、時間の経過により調査区内の水が引いて土層が安定すると掘り方がしっかり現われ楕円形の土壌であることがはっきりしてきた。内部からは広口の壺形土器のほぼ完形になるかと思われる破片が出土しているが、時期的には中期中葉の嶺田式からややさかのぼるものと考えられる。いわゆる土器棺である。

第5章 遺物概説

第4図の1～7はすべて溝跡SD4より出土した深鉢である。1は口径22.8cm、底径6.0cm、器高23.0cmを計る土器で底部に径0.6cmの穿孔がある。これは土器焼成前に両側から鋭利な工具により穿っている。外にわずかに折り返された口縁部は上端と外端にヘラ状工具により細かなキザミが施されている。外面調整は基本的には荒い条痕によって整えられているが土器の下半部は磨耗のため条痕は見られない。土器上部は縦方向の条痕を施し、胴部では一部で縦方向の条痕を消すように斜め方向の条痕が施されている。土器内面の調整はヘラケズリにより薄くした後、ヨコナデで仕上げられている。器厚はたいへん薄く、口縁部付近で6mm、底部付近で8mmを計る。全体に小ぶりであるが、バランスのとれた土器である。焼成は良好で、胎土はやや荒く外面にススが附着している。2は口径26.8cm、底径5.0cm、器高24.7cmを計る深鉢である。この土器の特徴は外面調整がミガキで仕上げられており、1の条痕で仕上げた土器と同じく土器上部は縦方向のミガキで、その後、斜め方向のミガキを施している。口縁部は折り返した後、小さな棒状工具によりキザミ目状に上端と先端に施されている。この工具は条痕文系の深鉢の口縁部にキザミを施したり、胴部に条痕を施す工具と異なり、2の土器の胴部ヘナデ状の調整をした工具であろう。底部の穿孔は内、外面より鋭利な工具によって穿たれている。器厚は5～8mmと薄く、焼成も良好である。3は口径22.0cm、底径6.6cm、器高21.7cmを計る。1、2と比較すると胴下半部の張りは弱く底部近くのくびれは弱い。口縁部のキザミ目は上端、先端に施されているが、彫が深くしっかりとしたつくりになっている。胴部の調整は1の土器のように口縁部直下より縦方向に施す条痕は見られず外面全体に斜め方向の条痕で仕上げている。底部の穿孔は1、2より大きく1.1mmほどである。外面の条痕は荒くススが附着している。土器の焼成は良好で、器厚は7～8mmを計る。4は溝跡SD4出土の深鉢型土器の中で最大なもので口径33.3cm、底部6.7cm、器高26.8cmの良品である。外面の調整は斜め方向、横方向の条痕が規則性をもたないで施されている。胴部最下部のみ一定方向（横方向）に施されている。口縁部は外面先端はヘラ状工具によるキザミ目が施されているが上端部にはキザミ目を持たない。内側には幅2cmでLRの縄文が巡っているのが特徴である。胴部内側の調整はヨコナデで仕上げられている。焼成は良好で、胎土はやや赤味を帯びて小礫を含む。底部は一部欠損しているが穿孔は確認されていない。5は口径25.4cm、現在高25.0cmで底部を欠損するため底部、器高を計測することはできない。口縁部の折り返しは大きく外面は板ナデ調整の前先端部に細いキザミ目が施されている。内側はナデで仕上げられている。6は深鉢の上部のみで口径26.5cm、現在高12.0cmを計る。口縁部は三ヶ所に装飾を持つ波状口縁で口唇部に沈線があり内側は縄文RLが巡っている。胴部調整は条痕というよりハケに近く、土器上部は口縁部白下より縦方向にハケが施された後、ヨコハケ(?)が胴部中頃より見られる。7は一見してミガキ調整のように見られるが、表面の剥落のためハケメが見えないのかもしれない。口径は27.4cm、現在高10.5cmで内側にはハケメがわずかに残っている。焼成は良好であるが胎土には小砂利のよ



第4図 出土土器実測図(1)

うな混入物が見られる。

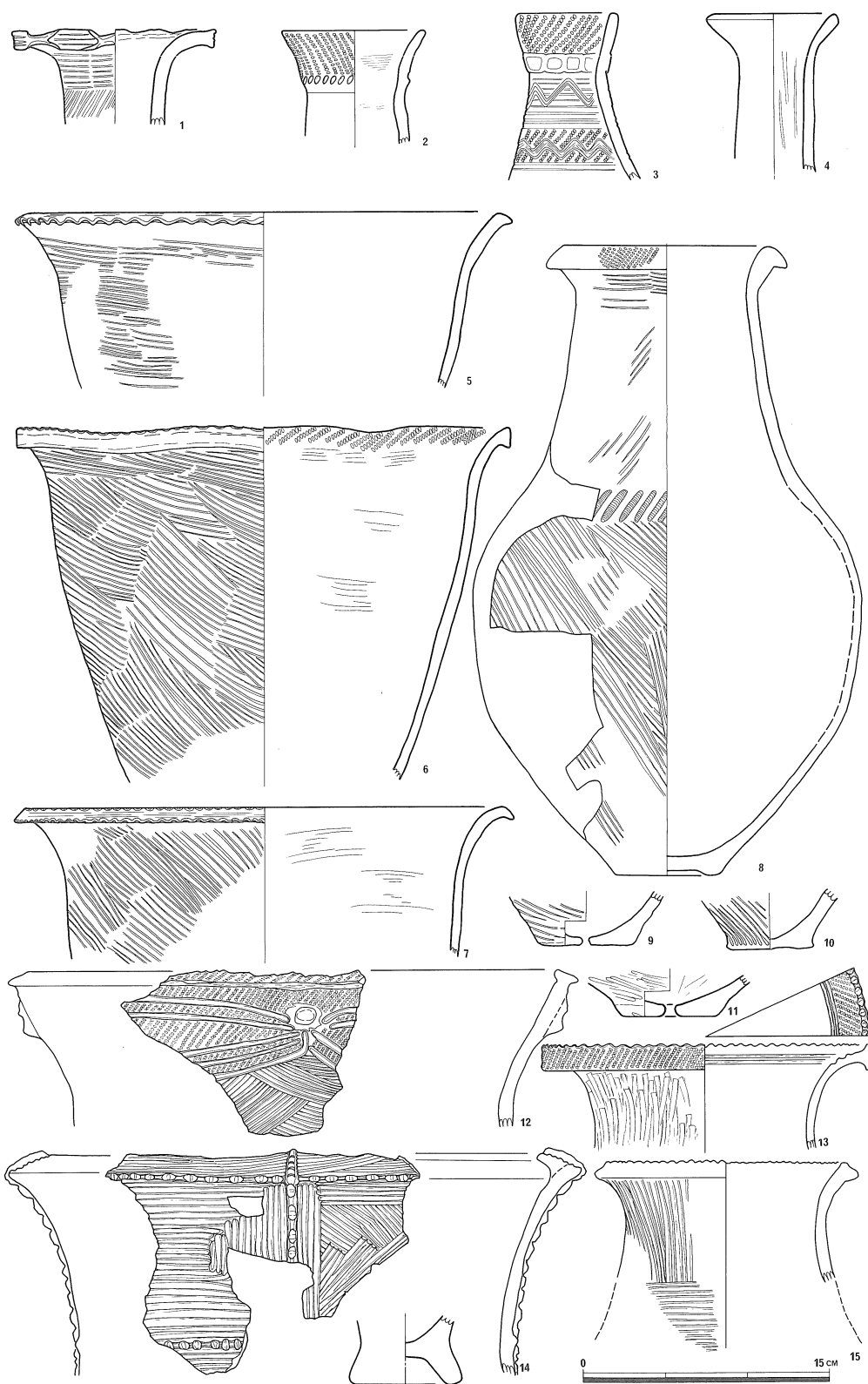
第5図の1～4は壺形土器の頸部である。いずれも細頸の壺形土器で1は外面頸上部を横方向の櫛状工具の条痕を施し、下半を斜方向の条痕で仕上げている。口縁部は大きく外反し、口唇部先端に櫛状工具で平行に沈線を入れた後に先端をつまんでいる。半田山Ⅱ遺跡、原川遺跡に類例があり丸式土器である。2は口縁部外側に縄文を施し、その下に楕円形の押圧文を巡らせている。長野県・緑ヶ丘遺跡、埼玉県上敷免遺跡に類例がある。3は縄文を施文の基本とし、櫛描きの平行沈線、波状文、山形文を配している。4については、細い頸部から立ち上がりわずかに外反する口縁部であるが、外面の調整はほとんど剥落している。内面にしぼった跡が見られる。5～7は第4図の6以外の土器とほぼ同時期中期中葉の深鉢形土器である。5は上部のみの破片を回転復元したもので、内外とも磨耗が激しく条痕もわずかに残るのみである。口唇部も下半部のみがヘラ状工具のようなものでキザミを入れている。6は残りが良い深鉢形土器で、外面は斜め方向に条痕が施され、内面はナデ仕上のようなものである。口縁部内側には斜めに櫛刺突文が巡らされており、口唇部は上半部にキザミが施されている。7も口縁部のやや大形の破片であるが外面の条痕と口唇部の上下端それぞれのキザミはこの土器の特徴である。ここであげた3つの深鉢形土器と第4図の深鉢形土器を合せて12個体分の深鉢形土器（完形品または2分の1個体）と多数の小破片の各部の待徴について記すと次のようになる。

- 〔口 唇 部〕 a、上端、下端にキザミを持つもの
b、上端のみにキザミを持つもの
c、下端のみにキザミを持たないもの
d、キザミを持たないもの

- 〔口 縁 部〕 a、波状口縁のもの
b、波状口縁でないもの

- 〔外 面 調 整〕 a、条痕文系で、上部を縦方向に施文しその下から横または斜方向に施文するもの。
b、条痕文系で、横または斜方向に施文するもの。
c、ナデ状の仕上げで、横または斜方向に仕上げその下から横または斜方向に仕上げたもの。
d、ナデ状の仕上げで、横または針方向に仕上げたもの。

- 〔口縁部内側〕 a、櫛状工具による刺突文を巡らしたもの。
b、ハケ状の仕上げのもの。
c、特に文様を持たないもの。

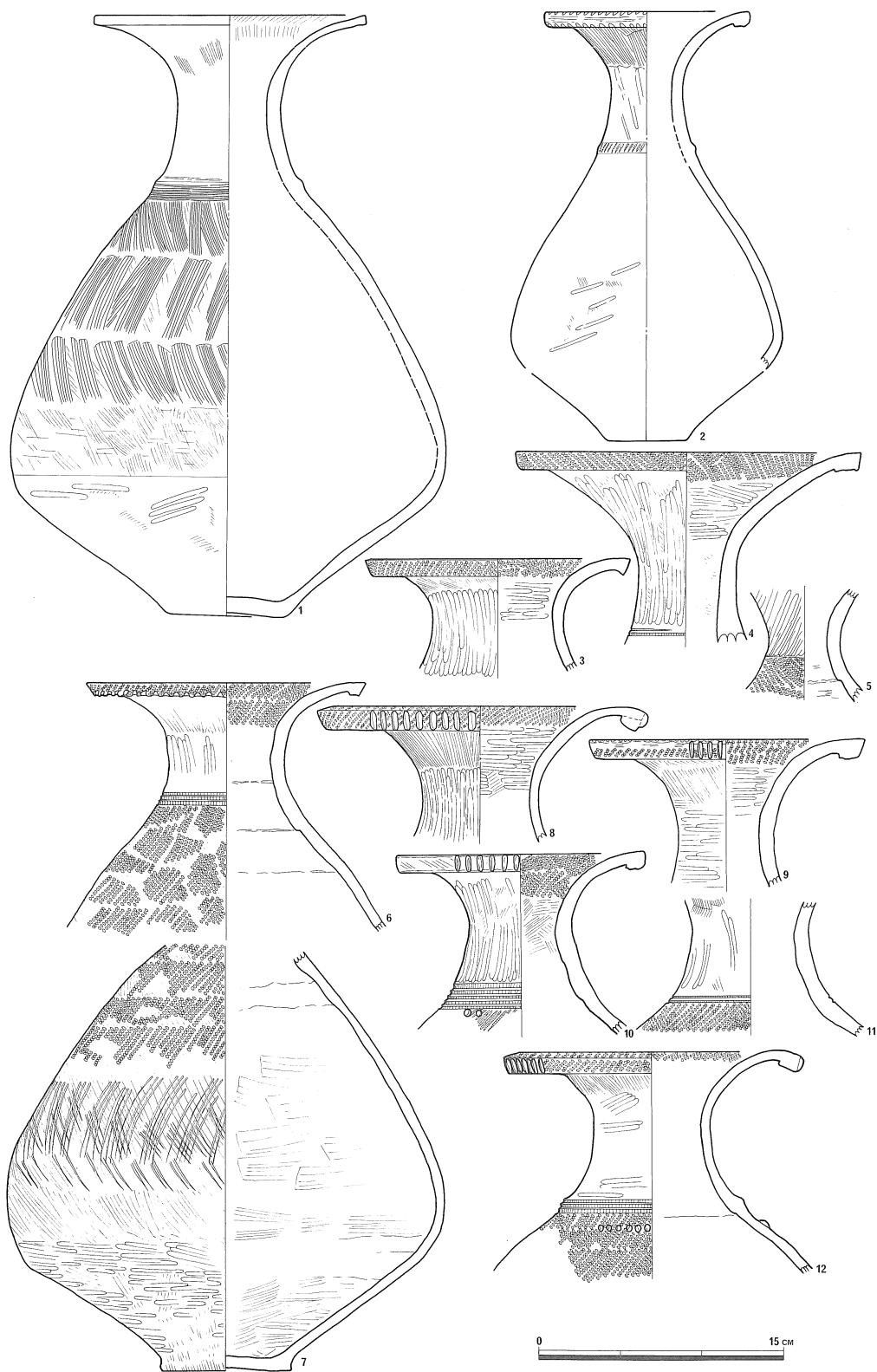


第5図 出土土器実測図(2)

8は弥生中期中葉前半の広口壺で胴部の調整痕は剥落している部分もあるが、基本的に条痕系の土器で、頸部上部は横方向、その下は右上から左下方向に、肩部に櫛状工具による文様帯を巡らせた後、胴部は左上から右下方向に施されている。厚い口縁部は外面に縄文をころがしである。袋井・山下遺跡、埼玉・飯塚遺跡、三ヶ尻遺跡、栃木・出流原遺跡と通ずるところがある。

9～11は深鉢形土器の底部破片である。このうち9、10は外面調整は条痕系で、11はナデのようである。9、11は底部穿孔がはっきりわかる。12、14はともに鉢形土器の口縁部破片と思われる。ともに縄文土器の系譜を過去から引きずってきており、外面は突起を基準に工字文に近いモチーフを施している。口縁部上部は太いヘラ描き沈線と縄文の組み合わせで、その下は櫛状工具による条痕に近い調整が施されている。14は、粘土ひもを貼り付けた突帯で土器外面を区画し、突帯にもすべてキザミを入れている。14の口唇部は斜め方向の櫛状工具のハケメを施している。この土器片には2つのパターンが読み取られ、区画内に左は「回」の字状に櫛状工具により施されている。13、15は8に近い形状の広口壺の口縁部破片である。13は口縁部内外面に縄文を施し、頸部はヘラナデのような調整である。15は全体に表面の剥落が激しいが、縦方向、横方向の櫛状工具により施文されている。

第6図の1は口径16.6cm、底形7.4cm、胴部最大径21.5cm、器高36.6cmを計る弥生時代後期前半を代表する壺形土器である。頸部が細く、胴部最大径も小さくさらに上にあるためプロポーションがいい。口縁部は折り返しをもたず、口唇部のみやや厚くなっている。外面はハケ→ナデで仕上げられて、内面は櫛描の羽状文が巡っている。肩部は小さな段と4本の横方向の沈線により区画されている。胴部の外面の調整はナナメハケ調整の後、櫛状工具により条痕のように文様が施されている。ハケ調整段階でヨコナデ等も入っている。胴部最大径より下半分はハケ→ミガキで調整されている。底は上げ底になっている。2は1を頸部の長さを除いてそのまま縮小したようなプロポーションである。口縁部は折り返した後、板ナデ→ヨコナデとされ先端の上、下部に小さなキザミが巡っている。頸部はタテハケ→タテミガキが施され、肩部の突帯にナナメ方向の櫛状工具による刺突文を持つ。胴部外面は板状工具によるナデの後、全面にミガキを施している。口径12.4cm、頸部くびれ部径4.4cm、胴部最大径16.6cmを計るが底部を欠損している。3は口径16.0cm、残存高7.0cmを計る壺形土器である。口縁部は折り返し口縁で朝顔形に外反する。口唇部外側、内側にL Rの縄文をころがす。頸部の調整は、タテハケ→タテミガキを施している。内側の調整は横方向のミガキである。4は3に比べると頸部が細く口縁部が大きく見える。口唇部は粘土を下から重ね厚みを持たせている。口唇部外側、内側は縄文L Rを巡らせている。頸部は板状工具でのナデの後、タテミガキを施している。肩部には二本の櫛状工具と思われる横押圧沈線文が入り区画している。内側も板ナデの後、ミガキを施している。5は壺形土器の頸部である。頸は板ナデの後、ミガキが施され、肩部は縄文L Rが巡っている。頸部径4.4cmを計る。破片であるため全容はわからないが、このグループの中でもやや古い時期に位置するかもしれない。6は口径17.0cm、残存高15.0cmを計る壺形土器である。口唇部は粘土帯を重ねた上に縄文L Rを内→外に巡らせ、等間隔にキザミを施してい



第6图 出土土器实测图(3)

る。口縁部直下からは板状工具によるナデが縦方向に施され、その上にタテミガキが入っている。肩部には三本の横押圧沈線文が巡り胴部は板ナデの後、縄文LRがとびとびに施されている。7は壺形土器の頸部から上を欠損する土器であるが残りはよい。底径8.0cm、胴部最大径26.5cm、残存高26.0cmの土器である。胴部外面は板ナデの後、最上部は縄文LRを巡らし、胴部最大径より上は荒い櫛状工具により条痕文のように綾杉に施している。最大径より下はミガキが見られるがあまりいてない。内側の調整は板ナデが主流と思われる。8は口径20.3cmの壺形土器の頸部である。口縁部の外反はさらに大きく貼り付けた粘土帯もやや厚く、さらに内外面には縄文LR、棒状浮文が配されている。頸部付近はこの手の壺形土器の基本的なパターンで板ナデ→タテミガキが施され、内面も板ナデ→ミガキの調整である。9も口径16.6cmの壺形土器の頸部である。頸部径が細いこと、頸部外面のミガキ調整がヨコ方向であることを除けば8とはほぼ同じ調整である。10も棒状浮文を持ち口唇部内側に縄文LRを巡らす壺形土器であるが肩部に櫛状工具による押圧横線文5本と小さな円形浮文、その下に櫛状工具による刺突文を持つ。11は2本の横押圧沈線と縄文LRを持つ壺形土器の肩部である。12は横押圧沈線の数と円形浮文の数が異なる以外は他の壺形土器と同じパターンである。

第7図、第8図はSD7の出土品を中心とした壺形土器である。一応、大まかな分類をして図示してあるが、溝内の遺物であるため個々の層位にとらわれることなく、各層はあくまでも目やすとしてその変化を追ってみたい。

壺形土器の器形は、ソロバン球形から無花果形まで変化に富んでいる。溝跡で、ある程度の流れがあったためか、完形品はほとんどなく、全体のわかるものは第8図の11と35のみである。壺形土器の底部は第12図に収録した。個々の部分の形態は、口縁部では大きく外反するものと、受口のものがあり、要素としては外反するものが新しうである。口唇部は粘土帯を貼り付けて肥厚させたもの（いわゆる折り返り口縁）と、単純口縁に大きく2つに分かれる。口縁部の外反する壺形土器の肩部文様帯は次のようである。

(A) 櫛押圧横線文を施した土器

第7図の1、3、4、6、7、8、9、10、11（2はPit9出土）

(A') 櫛押圧横線文+円形浮文の土器

第7図の5

(B) 櫛押圧横線文+櫛刺突羽状文の土器

第7図の12、15、16、20 8図の6

(B') 櫛押圧横線文+櫛刺突羽状文+胴部扇形文の土器

第7図の19

(C) 櫛刺突羽状文を施した土器

第7図の14、17、18、21、22、23

(D) 縄文を施した土器

第8図の1

(D') 縄文の上下に櫛押圧横線文で区画し円形浮文を加えた土器

第8図の11

(E) 文様を施さない土器

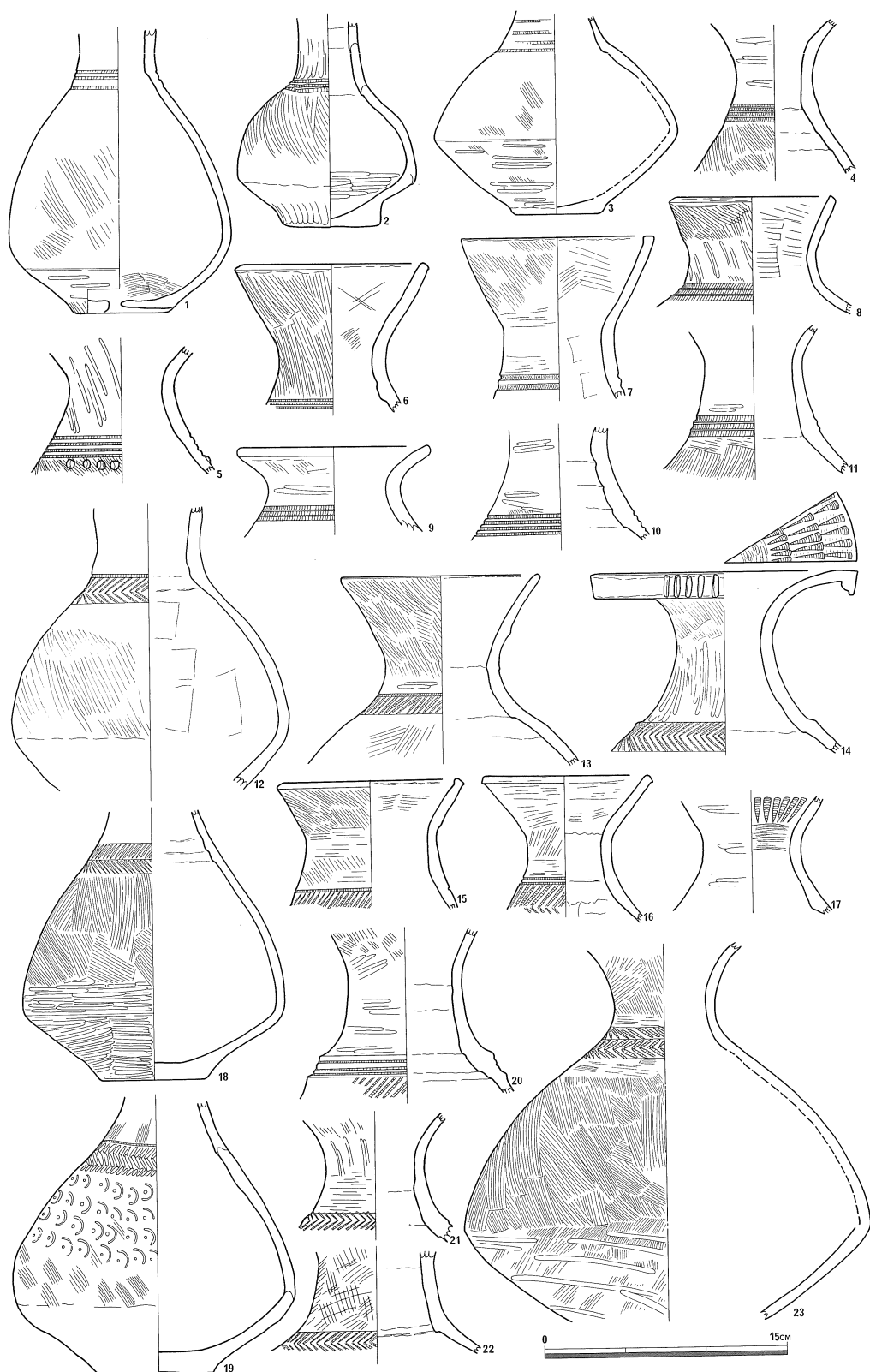
第8図の2、3、7、9、14、15、16、17、18、19、22、23、24

(F) 半載竹管文を施した土器

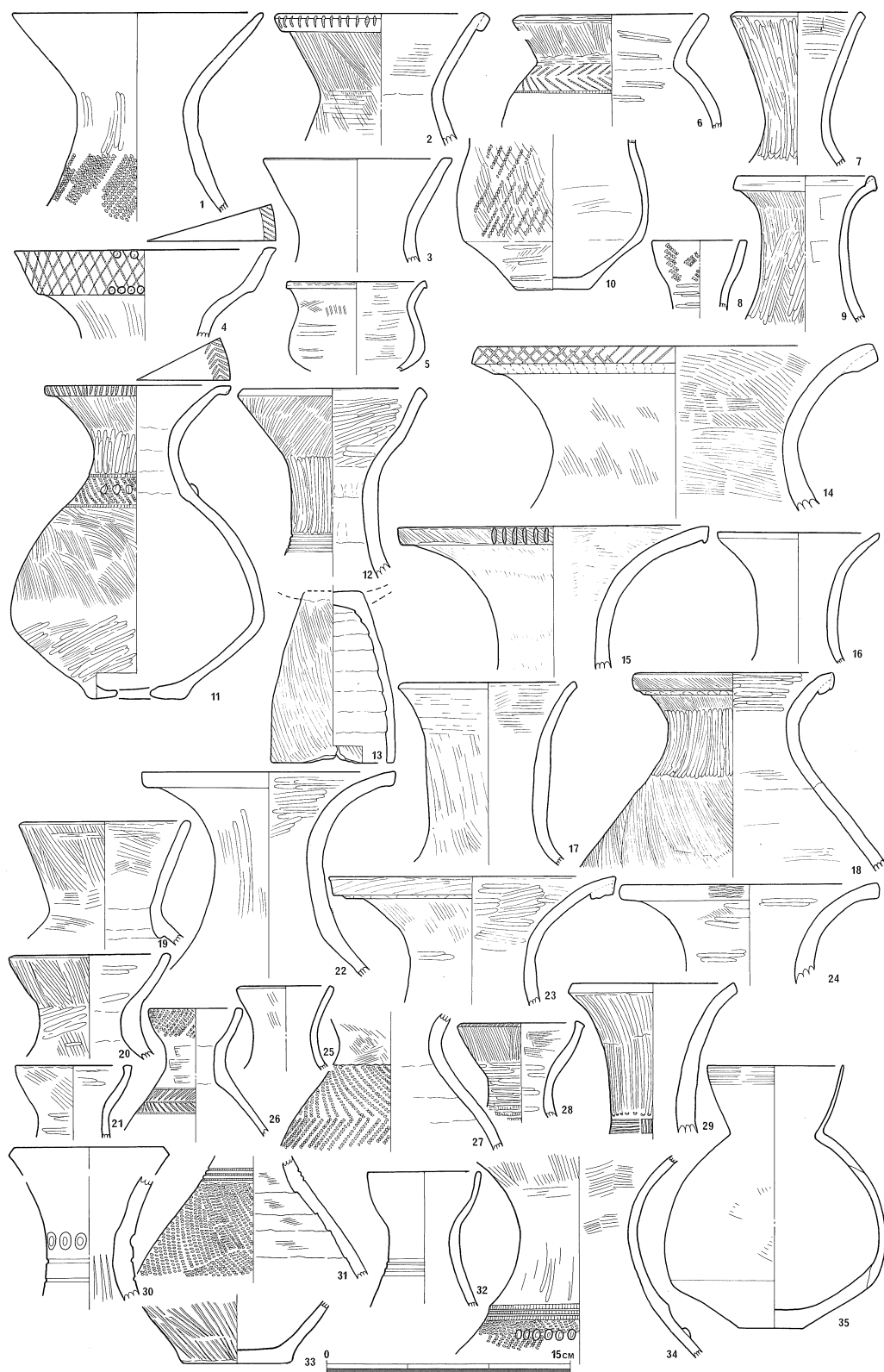
第8図の29

口縁部の受口状の土器は小片が多いため全体のわかるものは少ない。各部分は、口唇部端部から、櫛状工具によりキザミをつけたもの（第8図—28）、キザミのないもの（第8図—8、1、20、21、25、26、28、32）がある。口縁部外面はハケ調整のもの（第8図—12、20、21、25、28）と縄文をころがしたもの（第8図—8、26）がある。胴部は出土点数が少ないが、縄文をころがすもの（第8図—27）、櫛押圧横線文+縄文（第8図—31）、櫛押圧横線文+櫛刺突羽状文を組み合わせたもの（第8図—26）がある。第8図の中で以上の分類に入らなかった土器としては4は大きく外反することなく、やや受口状の口縁であるが、一般にこの種の土器は有段羽状文を肩部に持ち（第7図の20、21）、第7図—18に近いプロポーションを持つ。5と13は壺形土器以外ではあるが、版組みの都合でここに入れさせてもらった。5はミニチュアの台付甕か。13は不明である。第8図—30、33は土壙（SK3）出土の中期中葉の土器である。第8図—34は第6図の下段の土器に含まれると考えられる。

第9図の1の高坏はやや小型で口径17.5cm、底径9.0cm、くびれ部3.8cm、器高14.0cmを計る。口縁部は鐔状に大きく外反するが口唇部にキザミを持たない。坏部、脚部とも外面はハケ→ミガキで仕上げられて脚の段より下部は縄文LRが巡っている。坏部内面はミガキ、脚部内面はナデで仕上げた。2は高坏の脚部である。底径12.5cm、くびれ部4.8cm、残存高13.6cmを計る。くびれ部は1と同じで三角の突帯をミガキで仕上げこのミガキは脚部段の上部まで及んでいる。段部はハケ→ヨコナデで仕上げられており、段より下は縄文LRが巡っている。3は底径11.2cm、くびれ部径4.4cm、残存高12.0cmを計る。接合部は5本の櫛状工具による横押圧線文を巡らせその直下よりタテミガキで仕上げられている。脚先端の整は縄文を羽状に配している。脚内面は粘土ひもの巻き上げる痕をそのまま残し、下部はヨコハケで仕上げられている。4は底径11.0cm、接合部径4.5cm、残存高12.2cmを計る。接合部は縄文LRをころがしそれ以外の外面はタテ方向のミガキである。脚段部はヨコナデで仕上げ、脚段部は擬似縄文のようにヘラ状工具で斜めにキザミを入れている。内面はヨコナデでハケメも残る。5は口径24.5cm、底径10.7cm、接合部4.4cmを計る。口縁部は鐔状に外反し、先端は櫛状工具によりキザミが施されている。外面は坏部も脚部もいねいなミガキで仕上げられた良品で、接合部には櫛状工具による刺突羽状文が施され、脚端の段部はナメハケで調整されている。坏部内面はミガキが、脚部内面は板ナデで仕上げられている。6は大型の高坏の脚部で接合部は三角突帯でミガキで仕上げられている。脚端の段部はハケの後、櫛状工具により刺突羽状文が巡っている。底径14.8cm、くびれ部5.6cm、残存高16.5cmを計る。内面はヨコナデで仕上げられている。7は口径25.0cm、底部11.0cm、くびれ部6.4cm、器高19.0cmを計る鉢形の坏部を持つ高坏である。坏部、脚部とも外面は板の柾目部分でナデた、いわゆるハケ調整で仕上げられてお



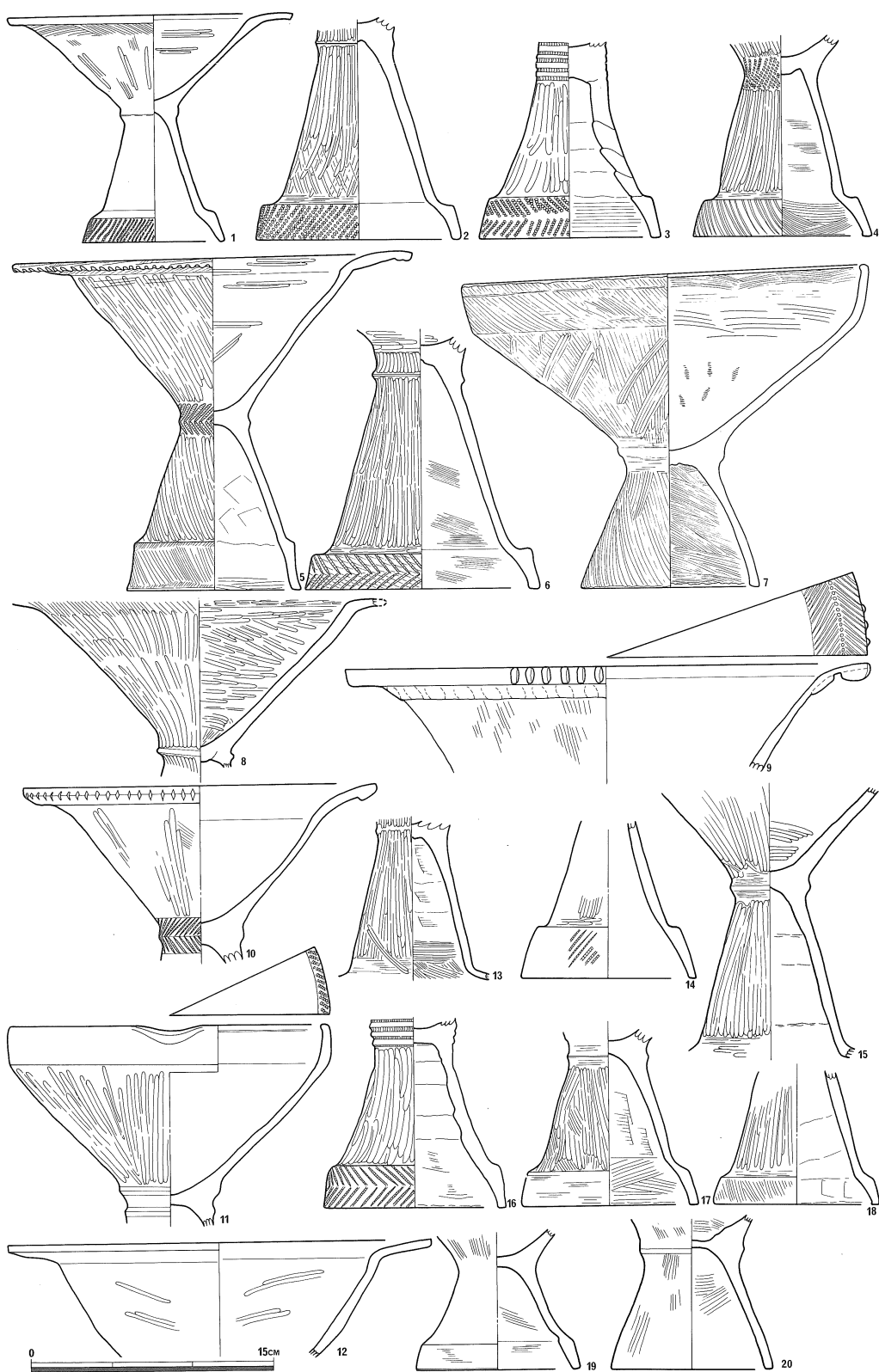
第7图 出土土器实测图(4)



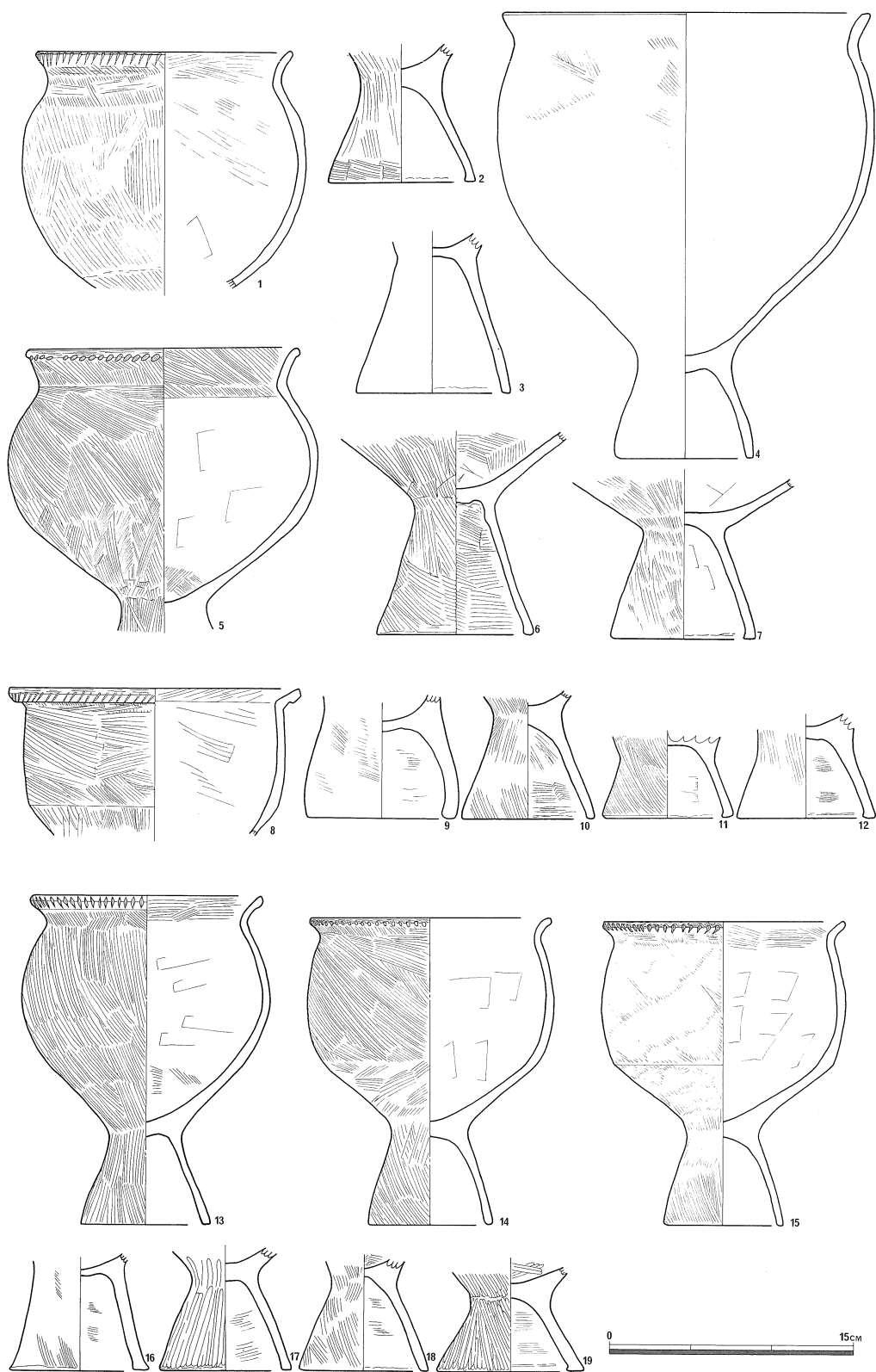
第8图 出土土器实测图(5)

り、接合部の突帯部分のみヨコナデで仕上げられている。坏部外面にヘラ状工具によるミガキ痕が見られる。内側は坏部で、ていねいなナデで口唇部にわずかにハケが残り、脚部内側はハケメである。8の高坏は口縁の先端と脚部を欠損する。接合部は断面三角形の突帯を持ち、内・外面はていねいなミガキで仕上げられている。9は口径32.0cmの口縁部で高坏または壺形土器かもしれない。折り返し口縁の先端には6本の棒愛浮文を四ヶ所に貼り付け、内側は櫛状工具による刺突羽状文が巡っている。口縁部の屈曲したところは器厚が薄いためか粘土帯が補強のため貼り付けユビの押さえ跡が残っている。内外面は剥落が激しく調痕ははっきりしない。10はやや小型ながらしっかりとしたつくりである。脚部を欠損し全容は不明であるが、口径21.8cm、残在高10.5cmを計る。折り返した口縁部はヘラ状工具でキザミが巡り接合部は櫛状工具による刺突文が入り内外面はミガキで仕上げられている。11は口径19.7cmの鉢形の高坏で1ヶ所口縁部が押さえられ片口の注口土器である。折り返された口唇部の先端には縄文LRがころがっており内外面ともミガキで仕上げられている。接合部は断面三角形の突帯が二列巡っている。12は坏部の破片を復元して図示した。内外面ともミガキのようである。13は高坏の脚部である。外面はミガキで仕上げられ接合部の断面三角形の突帯がわずかに残る。脚端の段部に移るところにはヨコナデ痕が残る。脚内面は粘土ひもの巻き上げ痕を残し板状工具によるナデで調整してある。14は高坏脚部片でる。表面の磨耗が激しく脚のミガキと段の櫛状工具による刺突文がわずかに残るのみである。15は坏部、脚部の端を欠損している。接合部の断面三角形の突帯はヨコナデで、外面は全体ミガキで仕上げられ、坏内面もミガキである。脚端の段に移るあたりのみヨコ方向のミガキとなっている。16は脚部底径11.4cmを計る。接合部は4本の櫛押圧横線文が巡りその直下からタテミガキで仕上げられている。段部は櫛状工具による刺突羽文が見られる。17は底径11.0cmの脚部で接合部は断面三角形の突帯を持つ。この突帯と段部がヨコナデで、脚部はタテハケ→タテミガキで仕上げられている。内側は板ナデ、下部は荒いヨコハケとなっている。18も脚部片である。タテハケ→ミガキの脚部で段上部ヨコナデ、ナナメハケとなっている。19、20は高坏の脚であるが、鰐状の口縁を持つものではなく、7のような鉢状の坏部を持つ高坏である。

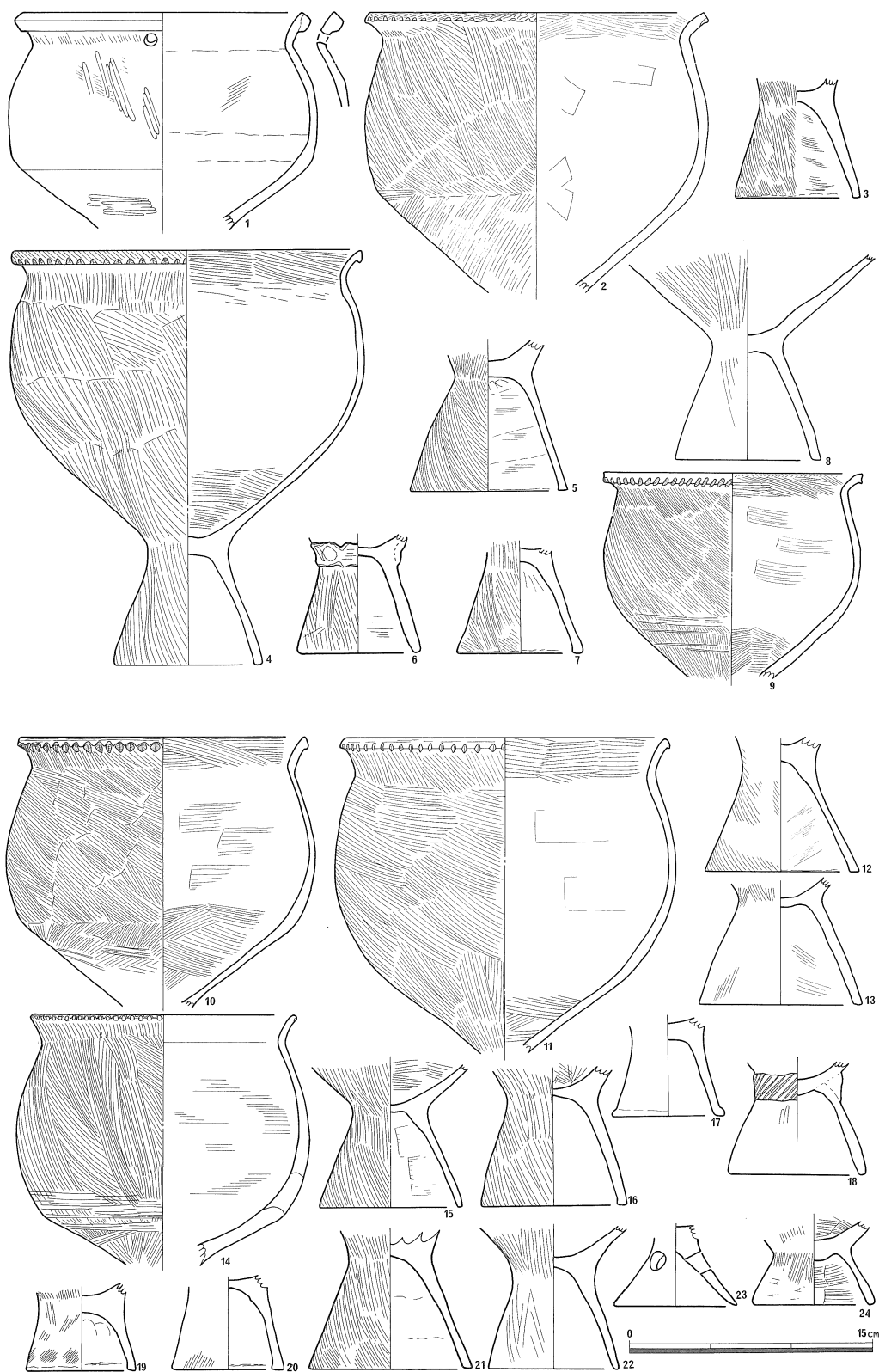
第10図、第11図は甕形土器の実測図である。そして、そのほとんどが台付甕である。脚部のみの破片の中には図版数の関係でここに入れられていただいた第11図23の小型高坏または器台の脚があるが、これは例外として図示した土器の4分の3はSD7の出土品である。基本的なプロポーシヨンは第10図の13～15や第11図の4に見られるように、球形または、それに近い隅丸方形、無花果形の胴部にくの字に外反する口縁部が付く。口縁部は折り返しのものと、折り返さないものがあるが、口唇部はほとんどヨコナデ等のあと櫛状工具によるキザミが施されている。口縁部、胴部、脚部の外面はタテ方向、または斜め方向のハケメで仕上げられている。甕部の内側は板ナデが多く、脚部内側もナデ、またはハケで調整されている。甕部と脚部の接合部は粘土帯の補強をしないのがこの地域の一般的であるが、第11図の6や18のように例外もある。6のように粘土帯を貼り付けて、そのままのものと、18図のように櫛状工具による刺突を斜めに巡らすものがある。一応、土器は出土層位順になっている。第10図の1～7はSD7



第9图 出土土器实测图(6)



第10图 出土土器实测图（7）

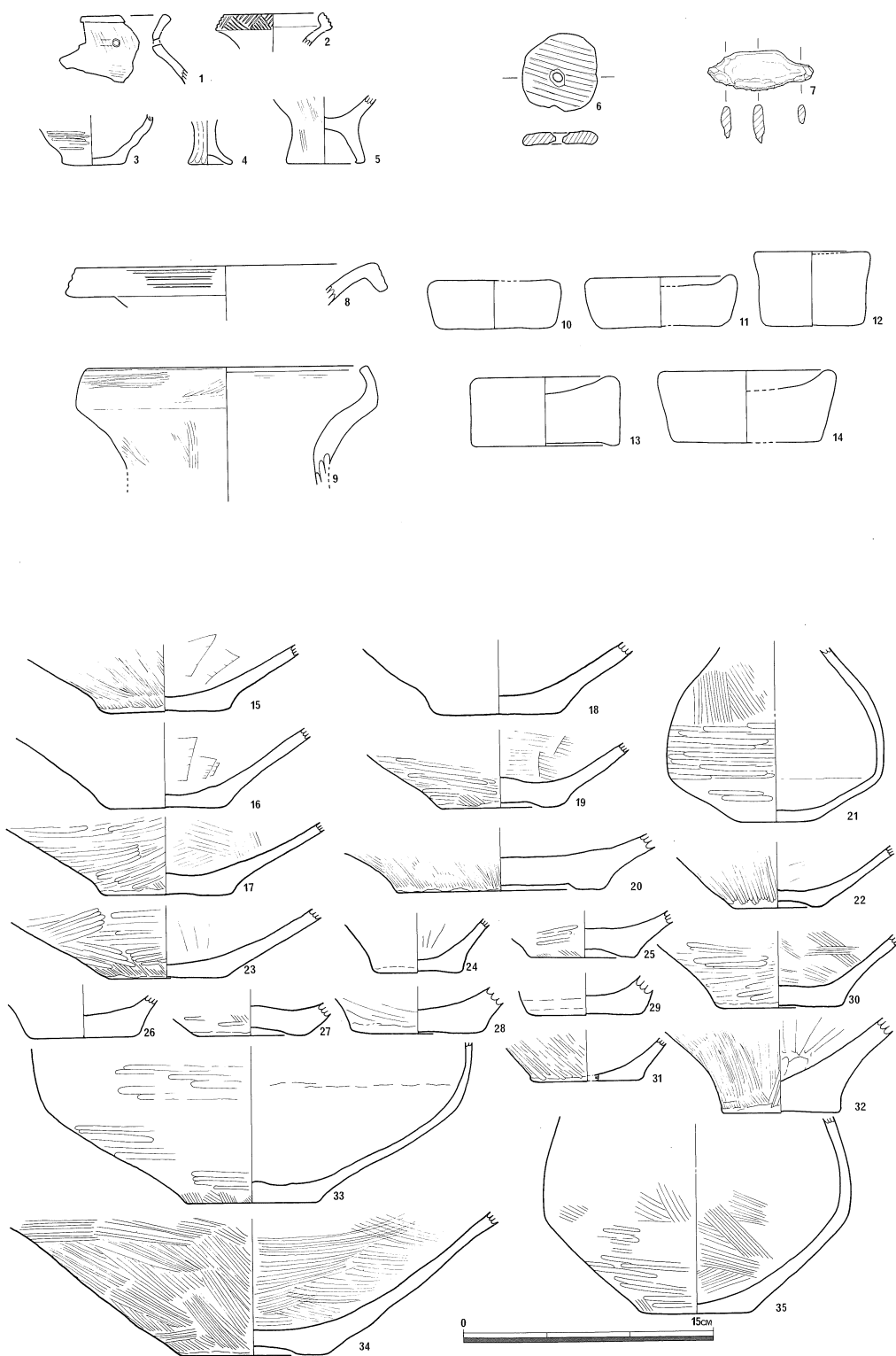


第11图 出土土器实测图（8）

の黒色土 1、8～12は黒色土 2、13～19と第11図 1～3、8 が黒色土 3 となっている。また黒色土 3 とほぼ同じレベル内の土器集中ヶ所からは第11図 4～6 が出土している。7、9 は黒色土下層よりの出土である。第11図10～24は S D 7 以外の遺構出土である。なお、第11図の 1 はこのグループではやや異質で外面にハケ調整の後ミガキで仕上げている鉢形土器であろうか。また口縁部下に小孔がある。そして口縁部の折り返しも他の甕に比べて大きい。

第12図の 1 は鉢形土器も口縁部下に小孔を持つ。第11図の 1 の小孔に比べて小さく、はたして同じ性格の小孔かは不明である。2～5 はミニチュア土器と思われ、2 は壺形土、とりけ中期の細頸の壺のようである。3 は後期の壺形土器の胴部から底部であろう。4 はなにか形象のようであるが不明である。5 は台付甕の台部で後期のものであろう。6 は中期の条痕系土器片を加工したもので、中央を両側から穿孔している。用途としては、土器片錘、または紡錘車のようなものであろうか。7 は石器で、片方のみ刃部がありナイフ形の石器である。8、9 は壺形土器の口縁部で胎土などから在地の土器ではなく搬入品の可能性がある。10～14 は大判焼状の粘土を焼き固めた土柱状の土製品である。出土が S D 4 周辺にかたよっており、また熱を受けて赤く焼けているため、甕（深鉢）形土器の器台（または支脚）として使用され、熱効率を高める、または土器が倒れにくくするための補助器具の可能性がある。

15～35 は各遺構出土の壺形土器とその底部である。後期の遺物がほとんどであるが、第12図—26、28、29、31、32 は中期の底部である。



第12図 出土土器実測図(8)

鶴松遺跡出土土器実測図一覧表

番 号	遺物No.	地区・遺構名	層 位
4-1		S D 4	覆土
4-2	54.105	"	覆土下層
4-3	62.90 120	"	"
4-4	105	"	覆土
4-5	40.111 112	"	覆土(第Ⅱ層)
4-6	72.88 113	"	"
4-7		"	覆土

5-1	59	S D 4	覆土下層
5-2			
5-3	91	S D 4	覆土
5-4	115	"	覆土(第Ⅱ層)
5-5	104	"	覆土
5-6	108 110	"	"
5-7	45.52	"	覆土下層
5-8	109	Pit 7	覆土
5-9	89	S D 4	"
5-10	118	"	覆土(第Ⅱ層)
5-11		"	
5-12	138	"	覆土(第Ⅱ層)
5-13		"	
5-14	118	"	覆土(第Ⅱ層)
5-15		"	

6-1		S D 7	黒色土 3
6-2		"	"
6-3		表 採	
6-4	371	S D 7	黒色土 3
6-5	388	"	最下層
6-6	374	"	土器集中地点
6-7	359	"	黒色土 2
6-8		"	下層
6-9	373	"	土器集中地点

6-10	354	S D 7	黒色土 2
6-11	265	Pit 32	覆土
6-12	373	S D 7	土器集中地点

7-1		S D 7	土器集中地点
7-2	68	Pit 9	覆土
7-3	210	S D 7	黒色土 1
7-4	235	"	"
7-5	373	"	土器集中地点
7-6			
7-7	373	S D 7	土器集中地点
7-8	364	"	黒色土 1
7-9	315	S D 6	覆土
7-10	373	S D 7	土器集中地点
7-11	378	"	覆土
7-12	226	"	黒色土 1
7-13	353	"	黒色土 2
7-14	368	"	黒色土 3
7-15			
7-16	243	S D 7	黒色土 1
7-17	245	"	"
7-18		"	"
7-19	199	"	黒色土 1
7-20	243	"	"
7-21	353	"	黒色土 2
7-22	44	S K 1	覆土
7-23	367	S D 7	黒色土 3

8-1	200 201	S D 7	黒色土 1
8-2	217 218	"	"
8-3	239	"	黒色土 1
8-4	307	S D 6	覆土(黒色土)
8-5	192	"	覆土(ピート層)

番 号	遺物No.	地区・遺構名	層 位
8-6	356	S D 7	黒色土 2
8-7	353	"	"
8-8	357	"	"
8-9	359	"	"
8-10	326	"	"
8-11		"	土器集中地点 (黒 2)
8-12	373	"	"
8-13	360 373	"	"
8-14	368	"	黒色土 3
8-15	368	"	"
8-16	371	"	"
8-17		"	"
8-18	371 388	"	"
8-19	367	"	"
8-20	372	"	セクション帯 (黒 3)
8-21	371	"	黒色土 3
8-22	368	"	"
8-23	371	"	"
8-24	370	"	"
8-25	362	"	側溝内 (黒色土 3)
8-26	390	Pit 54	覆土
8-27	367	S D 7	黒色土 3
8-28	388	"	最下層
8-29	369	"	黒色土 3
8-30	339	S K 3	覆土 (中期)
8-31	362	S D 7	側溝内 (黒色土 3 ?)
8-32			
8-33	339	S K 3	覆土 (中期)
8-34			
8-35	304	S D 5	覆土

9-1	373	S D 7	土器集中地点
9-2	373	"	"
9-3	244	"	黒色土 1

番 号	遺物No.	地区・遺構名	層 位
9-4	364	S D 7	黒色土 1
9-5		"	黒色土 2
9-6		"	覆土
9-7	357~ 359	"	黒色土 2
9-8	55.304	"	黒色土 3
9-9	217	"	黒色土 1
9-10	229	"	"
9-11	372	"	セクションベルト
9-12	200	"	黒色土 1
9-13	367	"	黒色土 3
9-14	220	"	黒色土 1
9-15	358	"	黒色土 3
9-16	244	"	黒色土 1
9-17	362	"	側溝内
9-18	230	"	黒色土 1
9-19	301	S I 1 の西側	黒褐色土
9-20	237 238	S D 7	黒色土 1

10-1	231	S D 7	黒色土 1
10-2	239	"	"
10-3	243	"	"
10-4	212	"	"
10-5	206	"	"
10-6	307	S D 6	覆土
10-7	231	S D 7	黒色土 1
10-8	356	"	黒色土 2
10-9	326	"	"
10-10	358	"	"
10-11	357	"	"
10-12	358	"	"
10-13	368	"	黒色土 3
10-14	371	"	"
10-15	371	"	"
10-16	369	"	"

番 号	遺物No.	地区・遺構名	層 位
10-17	369	S D 7	黒色土 3
10-18	371	"	"
10-19	368	"	"

11-1	368	S D 7	黒色土 3
11-2	370	"	"
11-3	367	"	"
11-4		"	土器集中地点
11-5	373	"	"
11-6	373	"	"
11-7	388	"	最下層
11-8	377	"	黒色土 3
11-9	388	"	最下層
11-10		"	"
11-11	373 359	"	土器集中地点 (黒 2)
11-12	71	Pit 9	覆土
11-13			
11-14	217	S D 7	黒色土 1
11-15	362	"	側溝内
11-16	365	"	セクションベルト
11-17	362	"	側溝内
11-18			
11-19		S D 8	下層
11-20		表 採	
11-21	11		一括採集品
11-22	362	S D 7	側溝内
11-23	77	S D 8	ピート層
11-24	46	S K 1	覆土

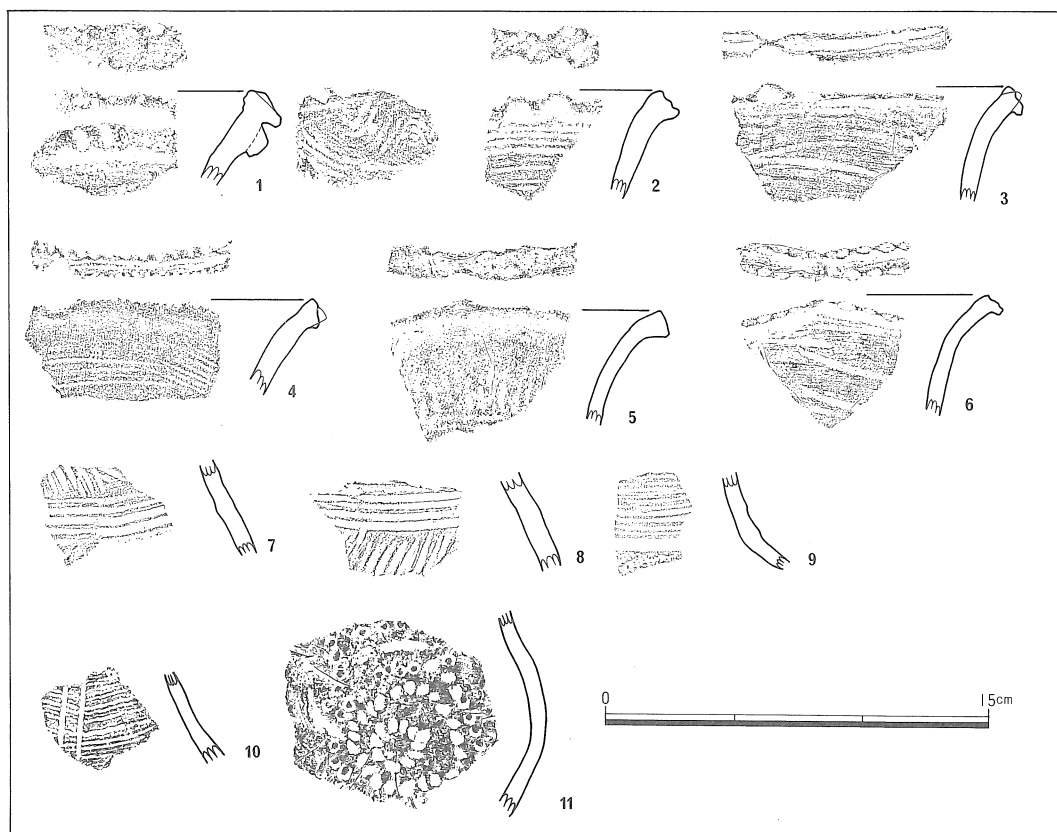
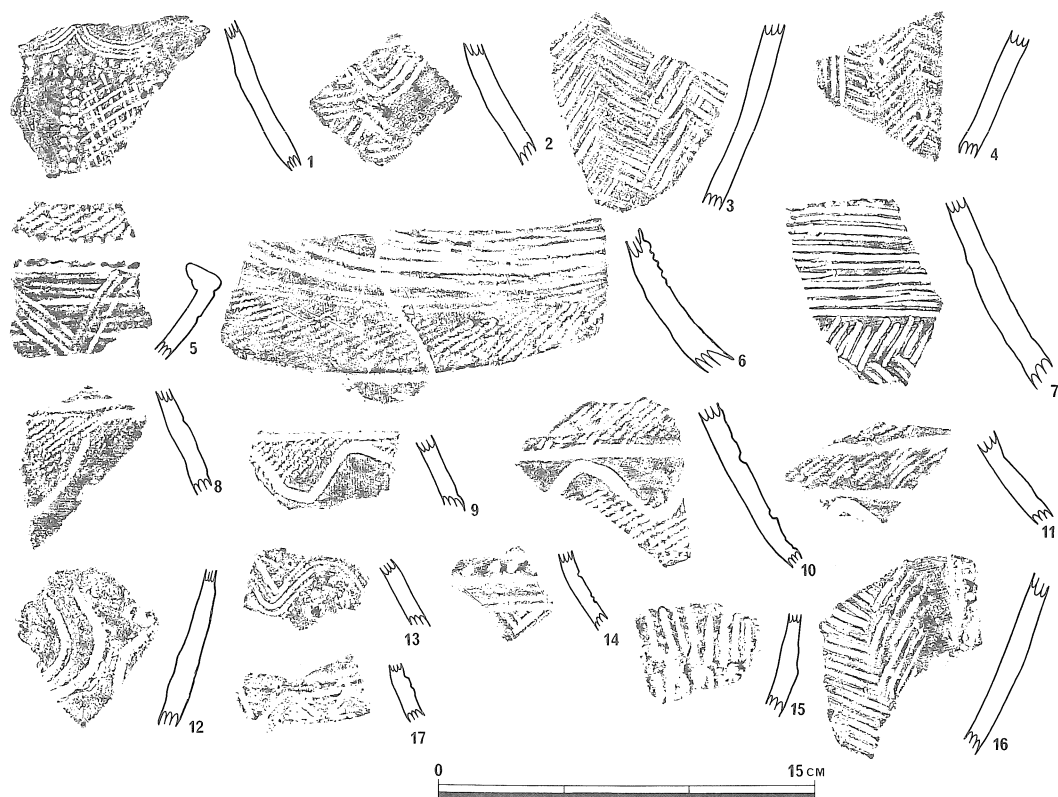
12-1	315	S D 6	覆土
12-2	373	S D 7	土器集中地点
12-3	356	"	黒色土 2

番 号	遺物No.	地区・遺構名	層 位
12-4	326	S D 7	黒色土 2
12-5	368	"	黒色土 3
12-6	50	S D 4	最下層
12-7	371	S D 7	黒色土 3
12-8	220	"	黒色土 1
12-9	362	"	側溝内
12-10		表 採	
12-11	57	S D 4	覆土下層
12-12		表 採	
12-13	52	S D 4	覆土下層
12-14	112	"	覆土(第Ⅱ層)
12-15			
12-16	362	S D 7	側溝内
12-17	364	"	黒色土 1
12-18	11	第 4 グリット	集水ます内
12-19	373	S D 7	土器集中地点
12-20		表 採	
12-21	223	S D 7	黒色土 1
12-22	371	"	黒色土
12-23	388	"	最下層
12-24	373	"	土器集中地点
12-25	367	"	黒色土 3
12-26	31	Pit 11	覆土 〔中期〕
12-27	388	S D 7	最下層
12-28		S D 4	〔中期〕
12-29		表 採	"
12-30	368	S D 7	黒色土 3
12-31	118	S D 4	覆土(第Ⅱ層) 〔中期〕
12-32		S D 4 ?	〔中期〕
12-33			
12-34	373	S D 7	土器集中地点
12-35	225	"	黒色土 1

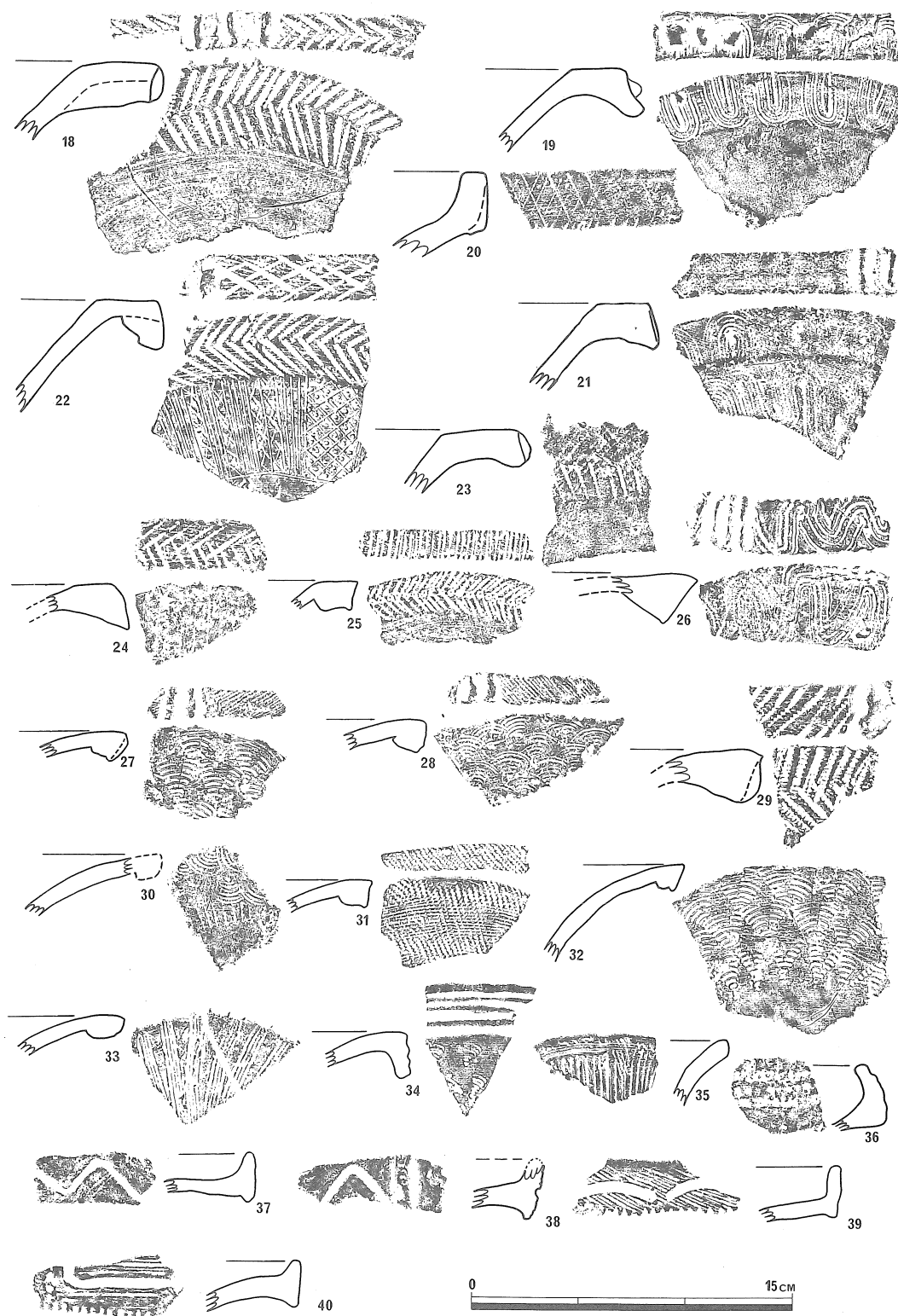
鶴松遺跡出土土器拓影について

1は施文順に、櫛描連続重弧文→棒状工具による双沈線→へう描斜格子文となっている。S D 4の遺構覆土の最上層で耕作土下層と接するあたりからの出土で、瓜郷的な施文を持つ土器である。2、14、17はへう描き沈線と山形文（三角文）を組み合わせたもので白岩遺跡出土土器片に類例がある。3、4、7、16はいわゆる条痕系の文様と呼ばれるが実際は条痕ほどの凸凹は持たない土器ではあるが丸子式土器まで遡るのであろうか。綾杉文的な手法で、櫛描文と組み合わせる場合もある。5は受口状の口唇部上面に縄文をころがしており口縁部の施文ではないが白岩遺跡に類例がある。外面は太い沈線+櫛状工具による横線文の上に櫛状工具によりV字文が施されている。6、8、9、10、11は縄文を主体とした土器で、太い沈線で区画した内側に縄文をころがした、いわゆる磨り消し縄文的技法の土器である。いずれもS D 4第Ⅱ層出土の土器で丸子式土器併行の土器である。6などは西山遺跡などでみられる。12は太い沈線で弧を描いてあるが、部分のみでどんなモチーフか推測できない中部山岳系の中期中葉の破片かもしれない。13は櫛描波状文を持つ土器片である。この種の波形文は見性寺貝塚や白岩遺跡など各時代を通じて散見できるが、ゆるやかな施文はやや新しいものかもしれない。15は屈曲部を境にしたへう描きの沈線文である。

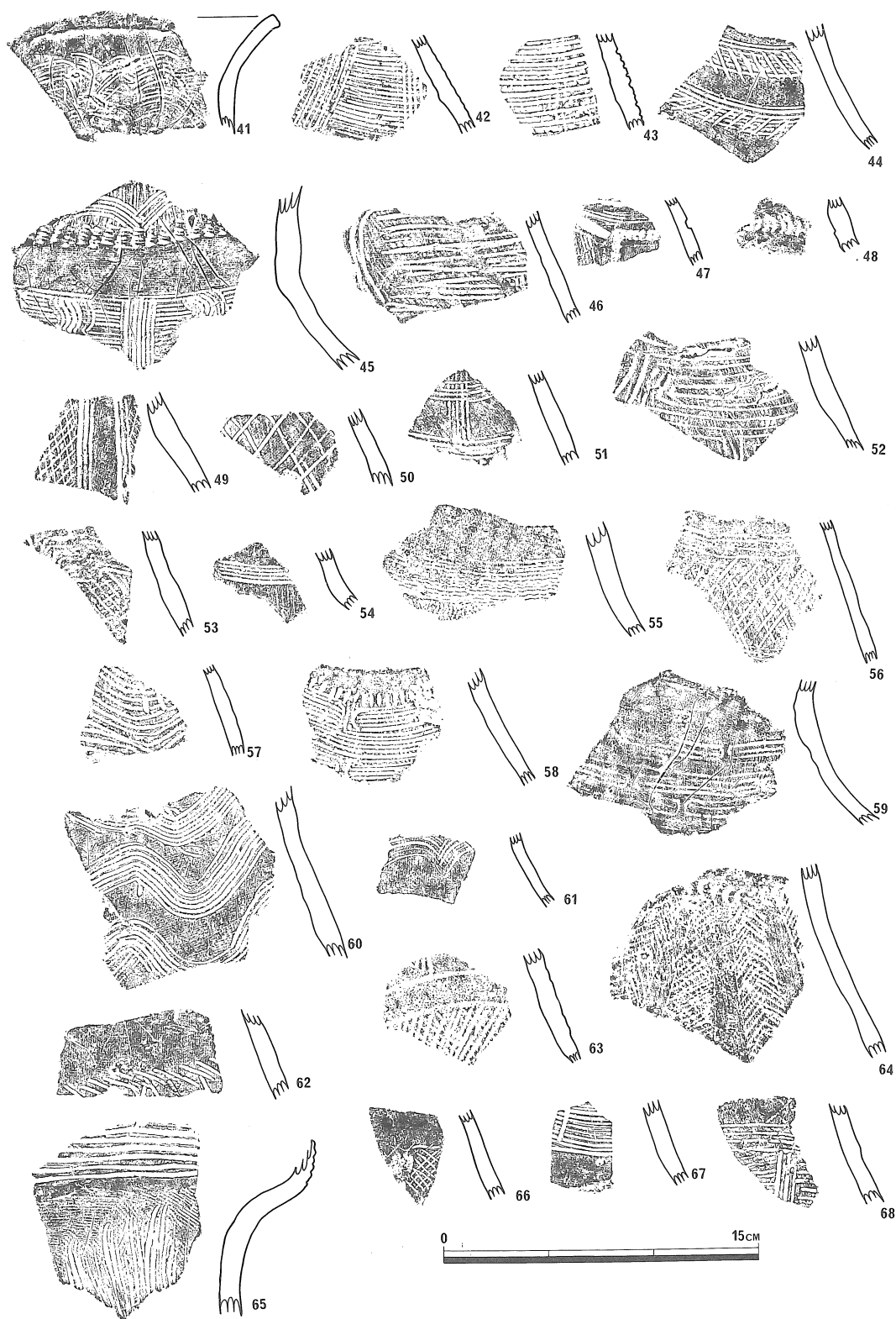
18～40は各層位出土の口縁部のみを集めた拓影である。18は口縁部上面と外面に櫛状工具による刺突羽状文が巡らせてある。外端は棒状浮文を3本貼り付けてある。内面はヨコナデ仕上げである。大型の壺形土器は口縁部を肥厚させてあり、外面下部に粘土帯を貼り付けてある。壺形土器の口縁部に櫛刺突の羽状文を持つ土器は伊場遺跡に多数みられる。19の壺形土器口縁はアヒルの嘴状の断面で、円形浮文を3つ貼り付けてある。18の土器で櫛刺突羽状文の施してある位置に櫛描U字文（擬似流水文）が施されてある。これも、伊場遺跡の壺形土器の口縁部にみられる。20はやや受口状の口縁で、キザミの下に斜格子文を施してある。21は流水文のややくずれたもので、外面には施文はなく棒状浮文が貼り付けてある。22は櫛状工具による刺突羽状文+櫛刺突の斜格子文の組み合わせで内側はへう状工具による5本の縦線文+連続X字文+中央に棒状工具による刺突を持つ斜格文が施されている。23は口縁上部に櫛状工具による刺突羽状文が巡り、口唇外部は断面三角形の棒状浮文が4つみえる。24は口縁上部は摩耗が激しく外面の櫛刺突羽状文はヨコハケの後、施されている。25は櫛刺突羽状文の中央に竹管の刺突をもち外面は縦の櫛刺突文である。26は口縁部上面・外面とも櫛描波形文で棒状浮文を2貼り付けてある。27と32、28と30は共に類似した櫛描の扇形文が口縁部内面に施されている。口縁部外面はハケメがほどこされそれぞれ棒状浮文が貼り付けてある。29は18、22と同じ櫛状工具による櫛刺突羽状文であるが口縁部外面は斜めの櫛刺突文である。32は櫛描きの刺突と押し引きで簾状文的効果をもたせている。33は櫛描文で跳ね上げ文的な技法である。34の壺形土器の口縁部は外面凹線文で口縁部内側は櫛描の扇形文が施してある。外来系の土器である。35は櫛状工具で表面を仕上げている。36の口縁部は連続の半截竹管文で嶺田式系の土器で西田遺跡などの小破片が類例となるであろうか。37～40は漏斗状口縁を持つ壺形土器でへう描きの太い沈線による八八形文、 $\cap$ 形文などがある。屈曲部にキザミを持つものもないものがある。



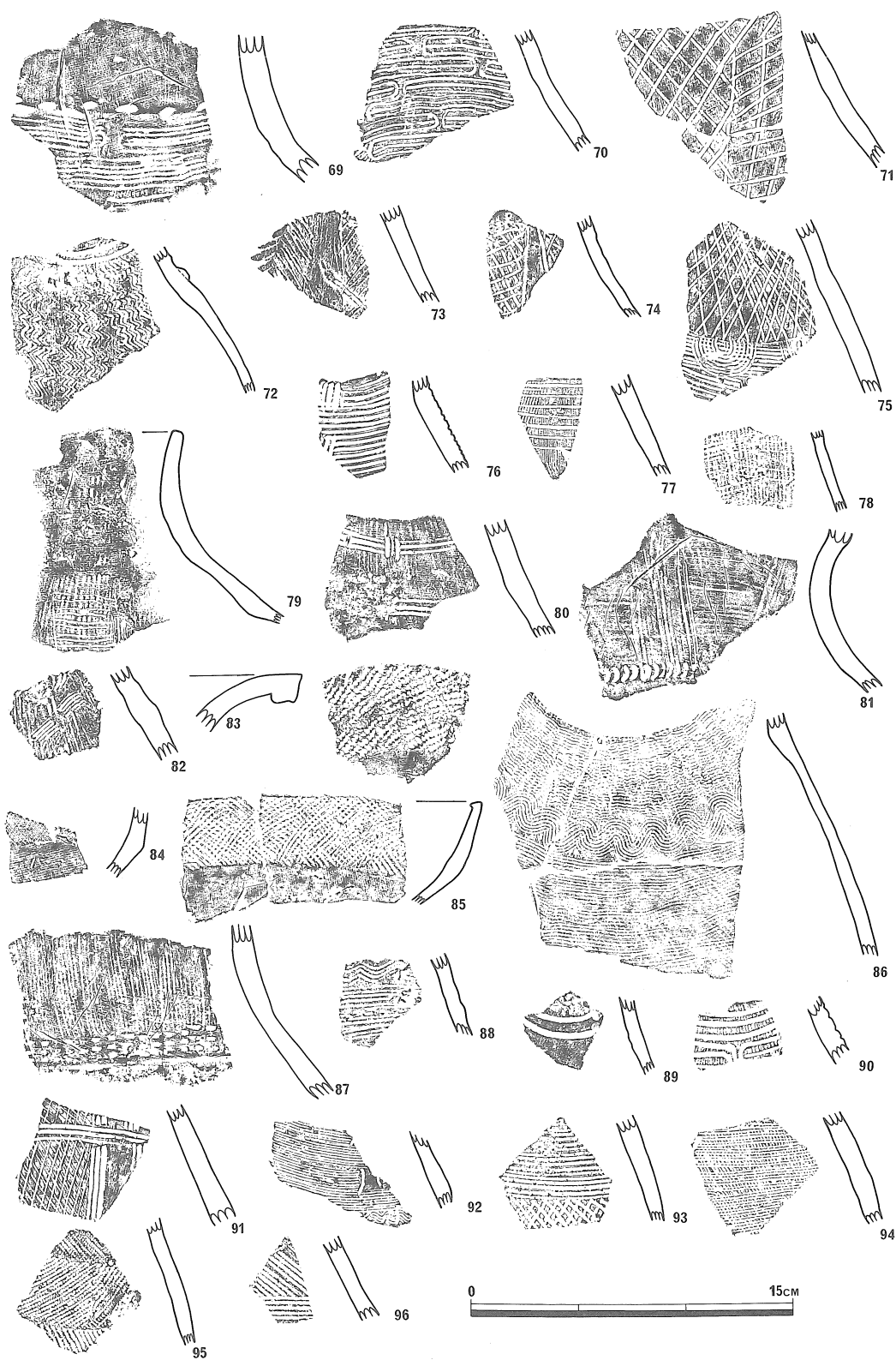
第13图 出土土器拓影(1)



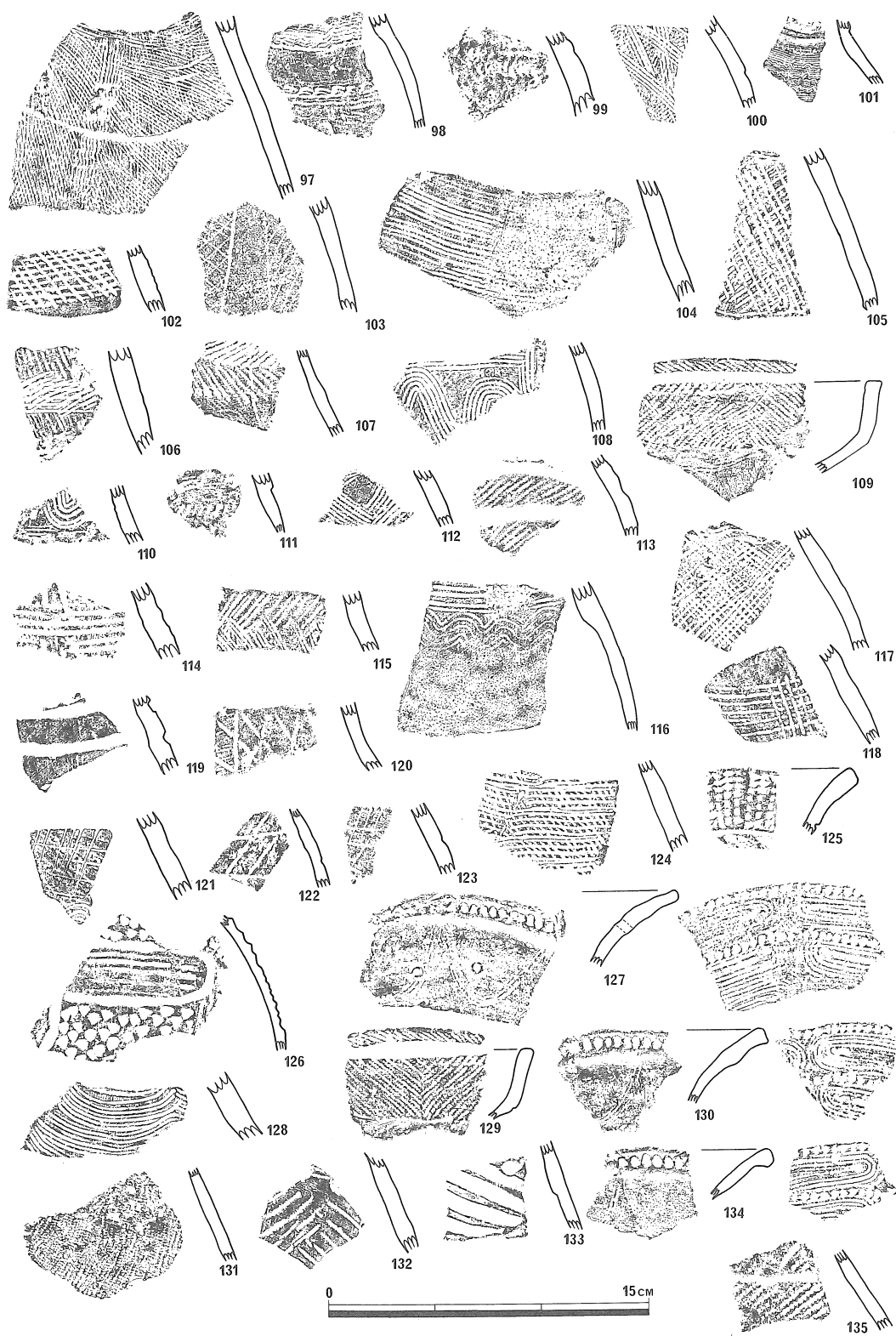
第14图 出土土器拓影(2)



第15图 出土土器拓影(3)



第16图 出土土器拓影(4)



第17图 出土土器拓影(5)

鶴松遺跡出土土器拓影一覧表

番号	遺物No.	地区・遺構名	層 位	番号	遺物No.	地区・遺構名	層 位
1	48	S D 4－h	第1層	29	368	S D 7－i	黒色土3
2	52	S D 4－c	第1層下	30	362	S D 7－x	一 括
3	51	S D 4－d	〃	31	377	S D 7－i	黒色土3
4	52	S D 4－c	〃	32	370	S D 8－e	〃
5	57	S D 4	〃	33	350	S D 7－i	黒色土2
6	119	S D 4－i	第2層	34	370	S D 8－e	黒色土3
7	136	S D 4－e	〃	35	350	S K 1	覆 土
8	137	S D 4－g	〃	36	168	S D 6	黒褐色土
9	138	S D 4－i	〃	37	350	S K 1	覆 土
10	138	S D 4－i	〃	38	371	S D 8－e	黒色土3
11	138	S D 4－i	〃	39	369	S D 7－j	〃
12	31	Pit 11	覆 土	40	325	S D 7－j	黒色土2
13	134	S D 4－c	第2層	41	380	S D 7－i	黒褐色土
14	21		耕作土下	42	380	S D 7－i	〃
15	122	S D 4	覆 土	43	380	S D 7－i	〃
16	89	S D 4－a	〃	44	379	S D 7－h	〃
17	121	S D 4	〃	45	379	S D 7－h	〃
18	357	S D 7－i	黒色土2	46	379	S D 7－h	〃
19	365	S D 7	セクションベ ルト内	47	380	S D 7－i	〃
20	357	S D 7－i	黒色土2	48	185	S D 6－2 c	〃
21	196	S D 7－a	黒色土1	49	308	S D 6－2 d	黒色土
22	326	S D 7－k	黒色土2	50	291	S D 8－d	ピート層
23		表 採		51	380	S D 7－i	黒褐色土
24	296	S D 7－x	黒色土1	52	379	S D 7－h	〃
25		表 採		53	161	S D 7－q	黒色土1
26	369	S D 7－j	黒色土3	54	294	S D 7－a	〃
27	368	S D 7－i	〃	55	193	S D 6－2 d	ピート層
28	362	S D 7－x	一 括	56	101	S D 7－j	黒色土

番号	遺物No.	地区・遺構名	層 位	番号	遺物No.	地区・遺構名	層 位
57	356	S D 7－h	黒色土 2	86	388	S D 7－q	最下層
58	356	S D 7－h	〃	87	389	S D 7－q	〃
59	325	S D 7－j	〃	88	388	S D 7－r	〃
60	326	S D 8－k	〃	89	389	S D 7－q	〃
61	356	S D 7－h	〃	90	388	S D 7－r	〃
62	360	S D 7－r	〃	91	388	S D 7－r	〃
63	356	S D 7－h	〃	92	388	S D 7－r	〃
64	360	S D 7－r	〃	93	389	S D 7－r	〃
65	326	S D 7－k	〃	94	389	S D 7－q	〃
66	354	S D 7－a	〃	95	389	S D 7－q	〃
67	326	S D 7－k	〃	96	389	S D 7－q	〃
68	358	S D 7－j	〃	97	299	Pit 28	覆 土
69	368	S D 7－i	黒色土 3	98	256	Pit 23	〃
70	366	S D 7－a	〃	99	261	Pit 28	〃
71	370	S D 7－k	〃	100	309	Pit 28	〃
72	368	S D 7－i	〃	101	299	Pit 28	〃
73	370	S D 7－k	〃	102	12	S D 1	〃
74	370	S D 7－k	〃	103	43	S D 1	〃
75	369	S D 7－j	〃	104	44	S K 2	〃
76	370	S D 7－k	〃	105	43	S D 1	〃
77	370	S D 7－k	〃	106	327	S D 5	〃
78	380	S D 7－i	黒褐色土	107	327	S D 5	〃
79	370	S D 7－k	黒色土 3	108	315	S D 6	〃
80	369	S D 7－j	〃	109	314	S D 6	〃
81	377	S D 7－i	〃	110	324	S D 6	〃
82	369	S D 7－j	〃	111	313	S D 6	〃
83	366	S D 7－a	〃	112	315	S D 6	〃
84	369	S D 7－j	〃	113	314	S D 6	〃
85	388	S D 7－r	最下層	114	188	S I 3	〃

番号	遺物No.	地区・遺構名	層 位	番号	遺物名	地区・遺構名	層 位
115	349	S I 1	覆 土	126		表 採	
116	341	S I 2	〃	127		表 採	
117	311	S D 6	〃	128		表 採	
118	345	S I 2	〃	129	362	S D 7	
119	339	S K 2	〃	130		表 採	
120	339	S K 2	〃	131		表 採	
121	56	S K 1	〃	132		表 採	
122	339	S K 1	〃	133		表 採	
123	4	S D 1	〃	134		表 採	
124	328		セクションベ ルト内	135		表 採	
125		表 採					

鶴松遺跡出土土器拓影〔別梓資料〕一覧表

番号	遺物No.	地区・遺構名	層 位	番号	遺物No.	地区・遺構名	層 位
1	52	S D 4－c	第1層下層	7	136	S D 4－e	第2層
2	52	S D 4－c	〃	8	117	S D 4－g	第2層
3		S D 4	覆 土	9	135	S D 4－d	第2層
4	137	S D 4－g	第2層	10	21		耕作土下
5	88	S D 4－b	黒色土	11	121	S D 4	第2層
6	117	S D 4－g	第2層				

41は壺形土器の口縁部で櫛描のくずれた波形文がある。42、43は櫛描横線文の土器で42は縦方向の櫛描文をもち瓜郷遺跡中層第1様式系の土器で梶子遺跡等で類例がある。43は芝本遺跡、八幡上遺跡に類例をみる。44は7本の櫛描横線文上に斜め方向にへら描き文を施す。「森町考古13号」の報告の白岩遺跡に類例を見る。45は櫛描文の組み合わせで弧線文、横線文、波線文、縦線文、櫛の刺突押し引きを組み合わせである。瓜郷系の土器片であろうか。46は壺形土器の胴部でへら描の楕円形の区画に櫛の横線文を施してある。中期の土器片である。47は半裁竹管の押し引きと、同じ工具による止めながらの押し引きの横線文である。瓜郷遺跡、阿島遺跡に同様の手法の施文がある。細頸の壺の頸部である。48は爪形文で白岩遺跡に類例がある。49は三本の櫛描き縦線による区画に細かな斜格子文をあてている。49はへら描きの斜格子文である。51は4本の櫛状工具による縦線と横線の組み合わせで格子状文となっている。52はへら描き沈線による区画文でいわゆる工字文状になっている。上藪田・川の丁遺跡等に類例がある。53は櫛描きの波形文と斜格子文との組み合わせである。54はタテハケののち櫛描きの横線文を施す。55は細かな横方向の波形文と破片の下部に同じ工具による縦方向の波形文の組み合わせである。56は4本の櫛描き横線文を上下に持つ区画内へら描きの格子状文である。57は櫛描きの波線文の一部で縦方向に2本のへら描きの沈線をもつ。58、59、69、70は櫛描き横線文を修正して疑似流水文として表している。白岩遺跡、上藪田・川の丁遺跡に類例を見る。58はへら刺突の列点文下に6本の櫛描き横線文に（のへら描きをいれて、）と（の間はへら磨きで消している。60は7本の櫛状工具による大きな波形文が数段施されている。瓜郷遺跡中層第1様式、第2様式に類例がある。61は〇〇の櫛描文を持つ。62は櫛へら描きの羽状文を持つ。63はへら描きの横線文と櫛状工具による格子状文の組み合わせである。64は横方向の連続半裁竹管文の下にへら描きの縦線で区画しへら描きの羽状文とへら描きの斜格子状文を無施文地帯を残してひとつおきに施してある。65は口縁部に太い櫛描きの横線文を持ち頸部は櫛状工具による跳ね上げ文となっている。白岩遺跡に類例がある。66は櫛描きの斜格子文に丹塗りが見られる。67は櫛描きの横線文に縦線が一本はいつている。68は櫛描き横線文に同じく縦線が交差している。71はへら描きで斜格子文が施されている。瓜郷遺跡、梶子遺跡等に類例がみられる。72は櫛押圧横線文が2列に施された下に細かな櫛描きの縦波状文が残る土器で白岩遺跡に類例がある。73、74は64と同じ施文である。75はへら描きの稜格子文と櫛描きの横線文の組み合わせに櫛描きのU字状文をもつ。76は櫛描き横線文に4段おきに櫛状工具で縦線を施す。77は細かなタテハケにへら描きの横線をいれている。78はタテハケとヨコハケを組み合わせで施文しているが表面の磨耗が激しく確認しがたい。79はタテハケ調整の後ミガキで縦四角に窓状にミガキ残しそこにヨコハケを加えて文様としている。80はタテハケ調整の後、櫛状工具によ横線文を途中で止めて縦方向の施文を入れ、再び横線文を施す。81は半裁竹管の連続刺突文を巡らせ頸部は跳ね上げ文を施す。梶子遺跡に類例がある。82は不連続の櫛描き文である。83は櫛状工具による刺突で疑似縄文の口縁部内側である。84は細かな櫛描きの斜格子状主である。8は鉢形土器の口縁部で細かな櫛描きの斜格子の文様である。86は壺形土器の肩部でおなじ櫛状工具を使って細かな波状文、波形文、横線文によりバラエティーに富だ文様構成を見せている。87は

櫛状工具の刺突とタテハケがみれる。88は櫛描きの波形文と横線文との組み合わせである。87、88は梶子遺跡に類例がある。89は2本描沈線を残す中期中葉の土器である。90は細かなタテハケの後、太い沈線によって文様が施されている。91は3本の櫛描きの沈線文による区画の中に、細かな斜格子文を入れている。搬入品である。92は櫛描きの横線文の途中をへうで(形に切り疑似流水文に近い感覚を視覚にうたっている。93は櫛描きの横線文と斜格子文の組み合わせである。94は細かな櫛描きの斜格子文である。河田遺跡に類例がある。95は後期の縄文を施した破片である。96は櫛状工具による線文が斜めに接する破片で中期の物であろう。97は細かな櫛描きの斜格子文の地文の中に、縦方向の櫛がきの波形文を重ねている。98も櫛描きの波状文を施している。99は爪形文を2列に弧状に施してある。100は斜めに交差する櫛描き文である。101は細かな櫛描き波状文である。102は櫛描きの斜格子文である。10は64と同じ施文で丹塗りである。104は46と同じく沈線で描かれた楕円形の中に櫛描きの横線文を施したものである。105は沈線による区画の中に櫛描きの斜格子文は入れてある。106は櫛描きの横線文に櫛状工具で短い施文が施されている。107は後期の壺形土器の肩部の櫛刺突羽状文である。108は櫛状工具による区画に波状文を組み合わせている。瓜郷遺跡、梶弧遺跡などで見られる。109、129は85と同じ施文である。110は108と同一の個体である。111は爪形文である。112は櫛状工具による山形文の一部である。113は太い沈線と縄文の組み合わせである。114はへう描きの区画を持つ文様である。115は櫛描きの羽状文で重なりは112の止め方に似ている。116は5本の櫛描き横線文と波形文である。117は櫛描きの波形文に斜格子文をもつ。118は櫛描き文である。119は75と同じ施文と思われ白岩遺跡に類例がみられる。122は櫛描き斜格子文、123は櫛描き文で丹塗りの土器である。124は一見複雑に見えるが細かな斜格子文が少し流れたものである。125は細頸壺の口縁部で櫛の刺突の下はへう描きの沈線である。白岩遺跡、緑ヶ丘遺跡に見られる。126も中期の土器の胴部で棒状工具の刺突の中に沈線に囲まれて櫛描き横線文がある。須和田式系の土器と思われる。127、130、134は同一の破片で櫛の刺突と櫛描きの疑似流水文的デザインが特徴的である。西からの搬入品である。128は櫛描きの弧線文である。131は弥生時代後期前半の壺形土器の胴部に見られる縄文手法である。132はへう描きの羽状文である。133は半裁竹管の背で施文されたような太い沈線で中期である。縄文時代晩期とされている土器であろう。13は太い沈線と縄文の組み合わせで弥生時代中期中葉の土器片で西川遺跡、梶子遺跡等に類例がある。

別梓資料について

1は口縁部下に突帯をもつ壺形土器で、外面の条痕は磨耗のためかはっきりしないが、内面は櫛描きの波状文をのこす。口唇部はへう状工具によるキザミを残した小さな突起を持ち条痕を残す。殿畑遺跡に類例をみることができ水神平Ⅱ式土器の系譜をひくと思われる。2は条痕系の甕形土器の口縁部で、口唇の内外面にキザミを持ち上面は櫛刺突が見られる。3は口唇部にキザミを持たない甕形土器の口縁部で1ヶ所口唇部をつまみ突起状にしてある。典型的な丸子式土器である。外面には条痕が残る。4も同じく甕形土器で口唇部内外面にキザミを施し1

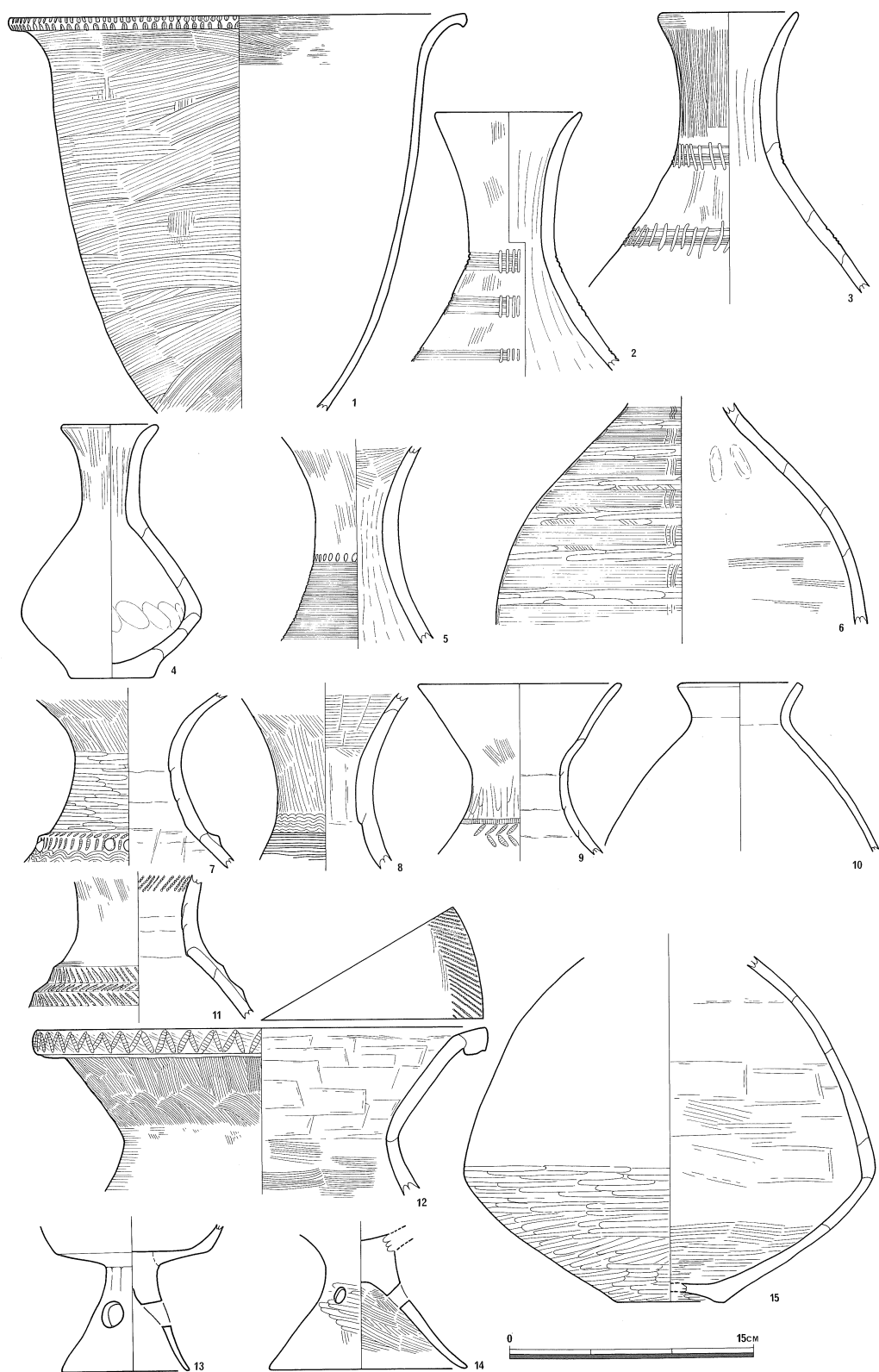
ケ所つまみ出してある。これも、丸子式土器の範疇にはいるものと思われる。5は波状口縁部を持つ壺形土器で第5図15の土器と同じ形態である。丸子式土器である。6は波状口縁の甕形土器片で口唇部の内外にキザミを持つ。7、8は壺形土器の胴部破片で横位の条痕と斜位の条痕の組み合わせである。丸子・岩滑式系土器の壺形土器の胴部破片である。9は横位の条痕と沈線をはさんで縄文との組み合わせである。これも丸子式土器と考えている。10は櫛描横線文に2本のヘラ描き沈線で施文してある。11は竹管状工具による刺突文を同心円状に2重に施しその内側には棒状工具による刺突も2重にまわす。須和田式系の土器に似ているが確証はない。表面に丹塗りのあとがのこる。棒状工具による刺突は梶子遺跡等にみられる。

◎鶴松遺跡出土土器の拓影を見ていくと施文はおおまかに次のようになる。

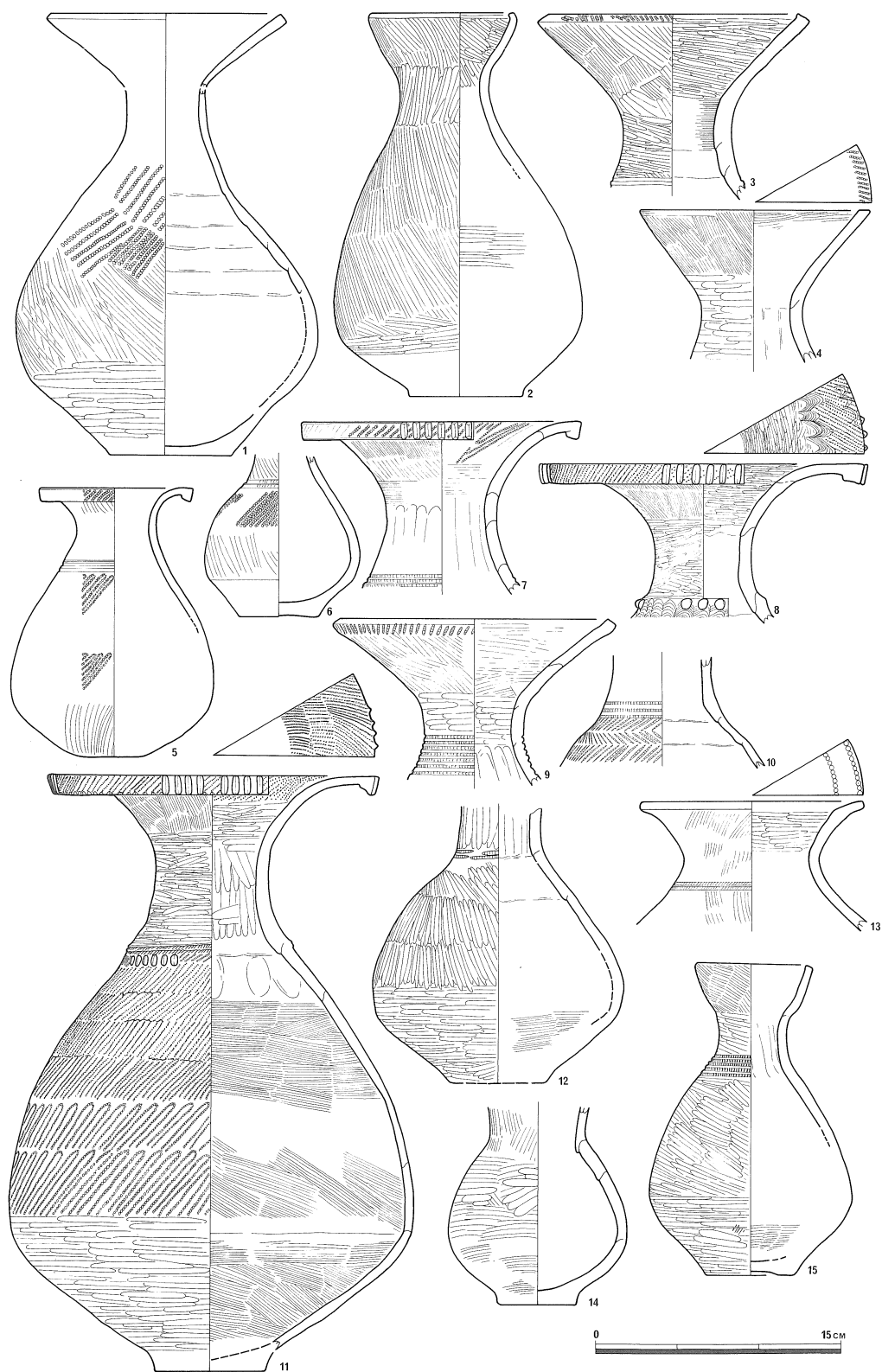
1. 工具を器面で引くことによって描く文様（例えば櫛描文など）
2. 工具を器面に対して垂直、または斜めから刺突して描く文様（例えば櫛刺突羽状文）
3. 工具を器面に押圧することによって施文する文様（例えば櫛押圧横線文など）

◎これに使われる工具は7種類が想定できる。

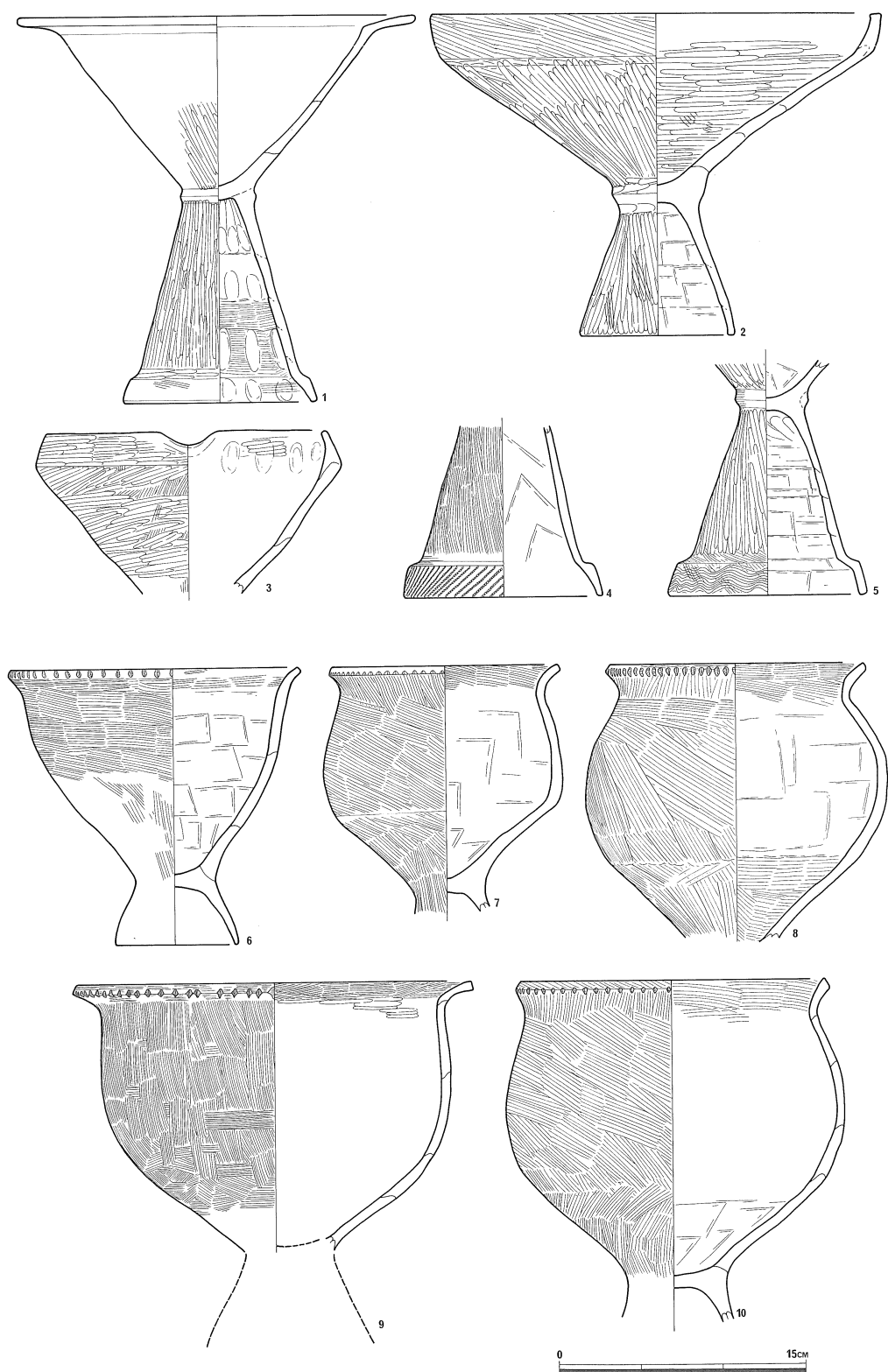
1. 櫛状工具
2. 棒状工具
3. 竹管状工具（半裁竹管）
4. 竹管状工具（円筒のまま）
5. ヘラ状工具
6. いわゆる縄文
7. 板状工具（小口状）



第18図 第I次調査出土土器実測図(1)



第19図 第I次調査出土土器実測図(2)



第20図 第1次調査出土土器実測図(3)

第6章 結 語

概 況

太田川の中流域は、西は磐田原台地、東を可睡・油山丘陵に挟まれた、狭いながらも肥沃な沖積平野を形成している。沖積平野の中には旧河川によって残された河道跡が帯状に広がり、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡がここの上に展開している。とくに鶴松遺跡が位置する微高地⁽¹⁾上は、第1図のとおり弥生時代中期に登場する鶴松遺跡を中心に北へ鶴田Ⅱ遺跡、鶴田Ⅰ遺跡、川田遺跡が弥生中期→弥生後期→古墳時代の広がりを見せ、南へは、徳光遺跡、土橋⁽²⁾遺跡、玉越遺跡が弥生後期→古墳時代→奈良・平安時代と生活範囲の拡大を示している。今回報告した鶴松遺跡の土器は弥生時代中期前半のものから含まれ、稲作の東進を考えるうえでたいへん興味深い遺跡となるであろう。本報告では太田川流域の弥生文化（稲作文化）の開始の時期を弥生時代中期前半の丸子式土器とし、従来から知られている弥生時代中期中葉の嶺田式⁽³⁾期より一段階古く考えている。本来なら、水神平式土器を含めて縄文時代晩期の土器から考えていかなければならないが、ここでは各遺跡が沖積平野におりた段階を中心に検証していきたい。さて、遠江地方は、いわゆる弥生文化東進の証とされる遠賀川式土器文化圏の影響を直接受けることのない地域であった。関東に弥生文化を伝える条痕文系土器の本流は、天竜川を北上して信州ルートで北関東へ波及し、むしろ太平洋側の海岸平野は稲作東進の初期の段階では支流となってしまった。そのためか、遠江の弥生時代中期の遺跡から出土する土器も、地方色の強い条痕文系の土器や、縄文を多用する土器が多く、駿河湾や関東系、伊那谷を中心とした中部山岳系の土器が混入してきており、遺構や層位のはっきりしない遺物や、採集品を中心とした古い資料については個々の土器に対する判断が難しい場合が多い。

鶴松遺跡は周知のとおり、弥生時代中期～後期の遺物を大量に出土することによって各方面から注目されていた。発掘調査も行われ、住居跡や溝跡なども検出されていたが正式に報告されることなく『袋井市史—通史編—』でわずかに触れているのみである。さらに当遺跡北西側⁽⁴⁾の磐田原台地上で発掘された新豊院山墳墓群の成立について重要なカギを握る遺跡となったが、鶴松遺跡の資料が公表されていなかったことからいまひとつの盛り上がりには欠けた。

今回紹介した遺物では、第5グリット内の溝跡（以下SD4と呼ぶ）出土の丸子式土器とその関連遺物を中心に丸子式土器から嶺田式土器への変遷を検証することによって太田川中流域での弥生文化（水稻耕作）の開始と展開について多角的に検討していきたい。なお、東海地方における弥生文化出現期の状況については、尾張・三河の先学諸氏により条痕文系の土器を中心に檜王式→水神平式→岩滑式という編年が組まれている。このうち岩滑式については、駿河・遠江における弥生時代中期前半の土器である丸子式土器との並行関係が確認されているのでこれを採用していきたい。なお、岩滑式は尾張地方の朝日式土器、畿内の第Ⅱ様式の土器との並行関係が考えられている。⁽⁵⁾

弥生時代中期前半の土器（いわゆる丸子式土器）について

鶴松遺跡出土の丸子式土器は次のような特色を持っている。

- (1) 層位的に第2層・丸子式土器→第1層・嶺田式土器の土器変遷が追うことができる。
- (2) 丸子式土器を出土する段階で遺跡が沖積平野におりて稲作を開始したと予想される。
- (3) 沖積地の遺跡でも岡の平遺跡のように前段階（縄文晩期）から継続しない。
- (4) 西の半田山Ⅱ遺跡（浜松市）、東の原川遺跡（掛川市）と類似する遺物が多い。

以上の特色を念頭において丸子式土器を概観すると次のとおりである。第13図に示した土器拓影17点は、S D 4の第1層（上層）出土の土器、第2層（下層）出土の土器、その他S D 4関連遺物と大きく3つに分けられる。S D 4は無線通信塔の基礎部分（10m×10m）の第5グリット内の狭い範囲で検出されたため、S D 4全体からすれば限られた部分でしかない。S D 4の規模は第3図のとおり幅2.0m、深さ0.8mで、土層の堆積をセクションで検討してみると、細かな層は褐色土の間層をいくつかはさんで上層と下層に分けられた。第1層関連の土器片は1～5で、そのうち1は遺構覆土のかかなり上部の確認面に近いところからの出土である。第1層出土の土器は比較的条痕文系の土器が多いようである。第2層関連の土器は、6～11、13で縄文系の土器片が主体となっている。縄文系の土器片はヘラ状工具により描かれた太い沈線の中に縄文が施されており、いわゆる磨り消し縄文としたものと、櫛状工具による調整痕を残すものがある。以上、第1層、第2層とわけて紹介したが上層に櫛状工具による条痕文系の土器、下層に縄文を主体とした土器（磨り消し）という結果となった。かつて、丸子式土器の出土状態⁽¹²⁾に関して安本博氏が報告した丸子セイゾウ山遺跡の記述に重なる結果がでたことは興味深いことではあるが、遺物の出土点数、調査範囲を考えると慎重に考慮しなければならない。

また、土器の実測図の方では、S D 4第2層（下層）出土の土器として次の土器を、鶴松遺跡及び太田川流域の弥生土器としては先行する遺物と考えている。第4図の6は、丸子式土器の鉢形土器のうちのひとつと考えられるがこの時期の破片としては大きいものである。この土器は波状の口縁を持ち、口唇部には斜めに条痕とみられる沈線を持つ。波状の口唇部先端にはヘラ状工具によるキザミが2ヶ所入れられている。口縁部内側には波状の突端にヘラ描きのU字形の沈線と、内側を巡る櫛状工具による刺突が確認できる。第5図の1、14は鉢形土器と思われるが同時期の遺物には類例がなく縄文土器的色彩が濃い。しかし、袋井市内の縄文時代の遺跡は丘陵上、または山地に立地するため丸子式土器関連の遺物と考えている。2の土器は、尾張地方で朝日式土器と共伴する。いわゆる大地型土器（愛知県岩倉市大地遺跡出土）に実測図が類似しており、その他の類例としては岐阜県の穀見遺跡（八幡町）、山岸遺跡（可児市）出土土器⁽¹³⁾がある。しかし、実際に土器を持ちよって比較したわけではないので今後の類例の増加を待ちたい。3の土器については、瀬戸川流域の上藪田・川の丁遺跡⁽¹⁴⁾（藤枝市）や子ノ神遺跡（神奈川県厚木市）の出土品の中に類似したモチーフの土器片が出土しているのが参考となるだろう。⁽¹⁵⁾一応この土器については丸子式土器関連の遺物とだけにしておきたい。

細頸壺としては、第5図の1は外面頸上部を横方向の櫛状工具の条痕を施し、下半を斜方向

の条痕で仕上げている。口縁部は大きく外反し、口唇部先端に櫛状工具で平行に沈線を入れた後、先端をつまんでいる。丸子式土器の範疇に入るもので、半田山Ⅰ遺跡⁽¹⁶⁾（浜松市）、原川遺跡⁽¹⁷⁾（掛川市）等に類例がみられる。

さて丸子式土器は、静岡市丸子セイゾウ山遺跡、丸子佐渡遺跡の出土土器を標式として杉原莊介氏が提唱した。丸子式土器の器種構成は、壺形土器、鉢形土器、甕形土器の3つからなるが全体のプロポーションを確認できる資料は少なく、いずれも小破片である。壺形土器は、胎土・焼成とも不良で中型品が多く長胴のことが多い。胴部最大径は中位かやや上にあり、口縁部は凸帯を付すものがあり凸帯上に押捺を施している。器面調整は大きく分けて条痕系と縄文系の2つがあり、条痕系のなかには櫛描文的手法の土器も含まれている。条痕文については、（１）単なる条痕文（２）縦走りの条痕文（３）平行沈線と斜線文を交互に配したもの（４）丁字文（５）波状文（６）交又線文、などがある。縄文はヘラ描きの太い沈線に区画された中に縄文を配す磨り消し縄文も見られる。鉢形土器も胎土・焼成とも不良で鉢形の口縁は広く外方に拡がり、底部は比較的薄い。口縁部の形状は、波状口縁のものと連続押捺口縁のものがある。器面調整は条痕が主流となっており、単なる斜線のものと縦走羽状文にわかれる。条痕文の壺形土器との違いは、条痕の単位が壺形土器に比べて長いことである。甕形土器は、いわゆる水神平式土器の伝統をきわめて強く有し、口縁部に特徴ある押捺を付した大きな凸帯を持つ。また、胴部破片には半裁竹管による波状文が認められる。以上のように、杉原氏の称するところの丸子式土器は、関東地方の初期弥生文化の解明に大きな影響を与えた。

このほか、丸子式土器の様式内容について佐藤由紀男氏の見解がある。これは、半田山Ⅰ遺跡（浜松市）の出土土器からⅠ類＝条痕紋の土器（原文のまま）Ⅱ類＝無紋の土器、Ⅲ類＝縄文を施した土器と分類し、構成する器種を壺形土器、甕形土器、鉢形土器として岩滑式土器との関係について考慮しながら説明している。半田山Ⅱ遺跡、原川遺跡の資料は鶴松遺跡に類似するものがある。別枠資料では特に共通するものを多く扱っている。水神平Ⅱ式土器とも考えられる別枠資料のⅠは、半田山Ⅱ遺跡のP25や原川遺跡に同じ系譜の土器片を見る。特徴としては、口縁部の小さな折り返しと、その下の突帯が明瞭に分かれていること。口唇部上面にキザミを持つ、または小突起を残す。口縁部内側に櫛状工具による文様を持つなどである。別枠資料のⅢ、Ⅳなど甕形土器の口唇部を指でつまんで小突起を作るのを特色としている。まだ、第5図のⅠや別枠資料のⅤの壺形土器の口縁部も同じ手法で成形されている。その他、磨り消し縄文の土器、横位と斜位の条痕を組み合わせたものなど共通する手法が見られる。

原川遺跡では甕形土器に良好な資料を持つ。これらは合わせ口の土器棺であり点出土している。このうち復元されて概報に写真が掲載された土器は、胴部外面に縦方向の羽状条痕文を施し、口縁部内側には半裁竹管による横線文が巡り、8ヶ所に心電図のグラフのように波が描かれている。口唇部は、上部端にキザミを持ち、端面はヨコハケが施されている。

本論において、弥生時代中期前半の土器については丸子式土器を援用して説明した。しかし、遠江においてこのままこの時期の資料が増加すると一つの方向性が捉えられるであろう。

弥生時代中期中葉の土器（いわゆる嶺田式土器）について

鶴松遺跡S D 4の土器で丸子式土器の次に位置づけられるのが嶺田式土器である。嶺田式土器は久永春男氏によって名付けられた土器で、遠江一円、とくに天竜川以東～大井川以西を主な分布範囲としている。標式遺跡となる嶺田遺跡は、菊川流域の小笠町嶺田の沖積平野に位置し、菊川町白岩遺跡などと密接な関係を持ち、弥生時代中期中葉に遺跡の開始を確認できる遺跡⁽¹⁸⁾である。このころ、三河では瓜郷式土器が出現し、駿河では形式設定にややあいまいな所を残すが原添式土器が関東の須和田式土器並行として登場している。嶺田式土器の器種は、壺形土器と甕形土器の2種類である。壺形土器は、細頸のもの（細頸壺）と、大きく開口するもの（広口壺）に大まかに分けることができるが、いままでは各地の弥生時代中期の遺跡でも扱われているように細頸壺が主流であった。壺形土器に施文される文様は、太い沈線で区画をつくり、その中に縄文、爪形文、歯の細密な櫛状工具による条痕文などである。また頸部に櫛描きの鋸歯状斜線列を配したものもあり弥生時代前半の系譜をひき、丹塗りが盛行するのも特色である。甕形土器は深鉢に近い器形で、胴部で細条痕で仕上げ、口縁部はつよく刻みを加えたものが多い。口縁部の刻みには、内外から交互におさえて口縁が波形の線を描くもの、口唇部を幅広く平らにつくってそこに条痕文を施した後内外から押さえて口縁が波形のもの、口縁内側に縄文を施したものなどのバリエーションがある。

弥生時代中期中葉の嶺田式土器の分布西限は最近の報告から浜名湖北西岸の都田川流域と、浜松駅近くの梶子遺跡あたりで、愛知県の主要遺跡からも若干の類似土器がある。とくに、梶子遺跡では瓜郷式土器を主体にした構成に嶺田式土器が混在して出土しており東三河地方との交流が推測される。この時期の周辺の遺跡として、信州では有名な阿島遺跡（喬木村）をはじめ満島南遺跡（天竜村）、寺所遺跡（飯田市）、緑ヶ丘遺跡（明科町）などがある⁽¹⁹⁾。岐阜県では牧野小山遺跡（美濃加茂市）が代表的で、愛知県では、東三河の篠東遺跡（小坂井町）、瓜郷遺跡⁽²⁰⁾（豊橋市）などである。

今回の調査では12個体分の甕形土器（完形品または2分の1個体）と多数の破片が出土している。これを各部分の形態によって分けると遺物の章で述べたようになる。そこで、ほぼ完形品で全体の確認のできるものを中心に代表的な3類6種を分類した。

A類……小型の甕形土器で口唇部にはキザミを持つ。

(1) 胴体の条痕が横または斜方向のもの。[第4図の3]

(2) 胴体の条痕が上部5分の1まで縦方向、それより下は斜方向のもの。[第4図の1]

B類……中型の甕形土器で胴部の仕上げがナデ状のもの。

(1) 胴部の調整が横または斜方向のもの。[第4図の7]

(2) 胴部の調整が上部5分の1まで縦方向、それより下は横方向のもの。[第4図の2]

C類……大型の甕形土器で胴部は斜方向の条痕で口縁部内側に櫛状工具にて刺突が巡らせてあるもの。

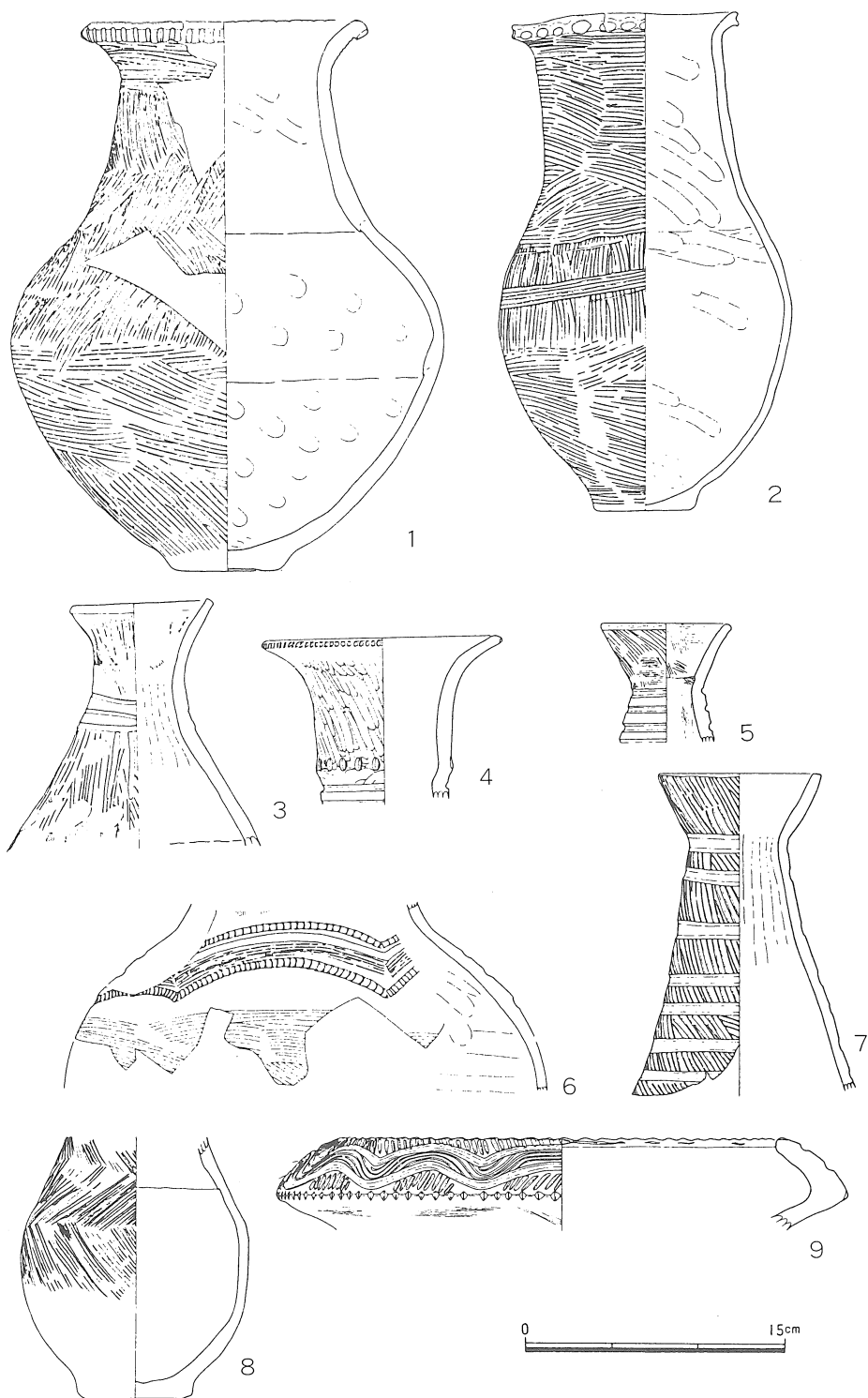
(1) 口唇のキザミが下にあるもの。[第4図の4]

(2) 口唇のキザミが上にあるもの。[第5図の6]

以上のように、S D 4 第 1 層出土の甕形土器は、いわゆる嶺田式土器として久永春男氏の示したバリエーションを明快に揃えている。⁽²¹⁾ また、S D 4 では絶対量において甕形土器の割合が多く、広口壺、細頸壺の出土が少ないのも特色の一つとなっており、大量の物資を蓄えるため、または加工するための場を近くに持っていた可能性を示している。このことについて、さらに傍証資料として甕形土器の底部を注意深く観察していくとほとんどの土器に穿穴がみられる。これは、焼成前に鋭い工具であけられている。甕形土器の溝跡内での出土状態は、完形品、またはそれに近い大型の破片が多く、溝内に投棄されてからもこの場をほとんど移動することなく静かに埋没したものと思われる。さらに、甕形土器のほとんどが西に口縁部を、東に底部をむけて出土していることから、溝内に東→西のゆるやかな流れがあったことが考えられた。

遠江地方出土の主な嶺田式土器の広口壺と呼ばれる土器のほぼ完形に近い遺物は、第21図の1・2は山下遺跡（袋井市）、第5図の8は鶴松遺跡（袋井市）、第22図の4は馬坂遺跡（磐田市）の出土土器である。土器のプロモーションとしては、やや長胴・長首で胴部条痕仕上の第21図の2、第5図の8と、短い首・張った胴部を持つ条痕仕上げの第22図の4、第21図の1に分かれる。これ以外に、第22図に示した馬坂遺跡の方形周溝墓の資料を参考にあげた。本図は、磐田市埋蔵文化センターのご厚意により参考資料としてお借りしたものである。いままで馬坂遺跡の資料については、『磐田の古代史』⁽²²⁾の中で平野和男先生が紹介しているのが公式資料である。この中の写真によると第22図の土器では、1と3は同じ溝内から出土している。また、山下遺跡S D10、S D41からは第22図1の土器と、第21図の1と同形式の胴部破片が周溝墓の同一溝内から出土している。⁽²⁵⁾ また、第21図の2の土器も山下遺跡の方形周溝墓群の中では第21図の1の土器と同じ嶺田式土器としてとらえられている。第5図の8の土器は周辺の遺跡に完形品の出土例や他の土器との共伴関係の心当りがないので、関東周辺を見ると埼玉出土の須田式土器を出土するなかに飯塚遺跡（妻沼町）、三ヶ尻上古遺跡（熊谷市）、上敷免遺跡（深谷市）などの県北の児玉・大里周辺と、栃木県の出流原遺跡（佐野市）など形態が類似している。⁽²³⁾ これは、緑ヶ丘・阿島など信州ルートからの流れを考える要素となっている。⁽²⁴⁾ 最近、（財）静岡県埋蔵文化財研究所のご厚意で見学させていただいた原川遺跡（掛川市）に第5図の8と胎土と胴部下半の条痕がよく似た土器片があるのを記しておく。

さて、嶺田式の細頸壺の代表的な土器であるがおおむね次のものと思われる。鶴松遺跡の出土遺物の中からは第5図の2・3と第8図30・33そして拓影№125・126等がある。袋井市山下遺跡からは第21図4・5・6・7が該当する。⁽²⁶⁾ 嶺田式土器と併行する周辺の土器を見ていくと三河の瓜郷式土器、駿河の須和田式土器系といわれる原添式土器などよりも、中部山岳の伊那谷方面の土器、特に阿島遺跡や寺所遺跡の遺物との類似性を強く感じる。⁽²⁷⁾ このあたりについては松井一明氏の「嶺田式土器の検討」『転機 創刊号』に詳しいのでそれを参照していただきたい。



第21図 袋井市山下遺跡出土土器

沖積平野への進出と展開

沖積平野に位置する遺跡より丸子、岩滑系の土器を出土したことは、太田川流域の弥生文化（稲作文化）を考えるうえでいくつかの問題を提起することとなった。そのあたりについて筆者の意見を遠江・駿河の沖積平野の様相に限定して若干述べてみたい。それでは、太田川流域を含めて西から順に条痕文系の土器を出土する遺跡を検証していきたい。

三河地方と近接する浜名湖に注ぐ小河川周辺の遺跡では、笠子川流域の中村遺跡⁽²⁸⁾（湖西市）や、今川流域のイノコ遺跡⁽²⁹⁾（湖西市）、宇利山川流域の殿畑遺跡⁽³⁰⁾（三ヶ日町）、都築大谷川流域の青木遺跡（三ヶ日町）などがある。これらの遺跡はいずれも丘陵上または段丘上に位置し縄文時代後期または晩期に遺跡から開始されるのが特徴となっているが、沖積平野の微高地上に立地するこの時期の遺跡はない。

浜名湖北東岸の都田川流域では、条痕文系の土器を出土する遺跡を3つに分類して考えている。A類と呼ばれる段丘上に位置する遺跡は、縄文時代後期または晩期に成立し、檜王式または水神平式までで断絶し、弥生時代中期の遺物は出土していない。B類は沖積平野に位置し丸子式土器⁽³¹⁾から始まり弥生時代後期、古墳時代と継続する遺跡である。C類は縄文時代後期に開始され弥生時代後期以降までも継続する遺跡で、立地も段丘端部から沖積地にかけて分布しておりA類・B類の両方の特徴を兼ね備えている。

鶴松遺跡の位置する太田川とその支流である原野谷川流域では、縄文時代から継続し弥生時代中期に断絶する遺跡は発見されていない。弥生時代中期前半からの遺跡では、丸子式土器⁽³²⁾を出土する向天方遺跡（森町）が知られているだけである。沖積平野での微高地上で丸子式土器を出土し弥生時代後期、古墳時代と継続するのは、土橋遺跡、鶴松遺跡（以上袋井市）がありこの地域の水田経営の先進性を示唆できる。原野谷川の自然堤防上に位置する原川遺跡（掛川市）は、丸子式土器を主体とする弥生時代中期前半の土器を出土する遺跡で弥生時代後期や古墳時代の遺物は少ないようであるが、最近この遺跡の南側一帯の調査で継続する時期を補う遺物が出土している。

遠江の東端に位置する菊川流域では、丘陵上や段丘上に位置し丸子式土器を出土する遺跡は発見されていない⁽³³⁾。沖積平野では白岩遺跡⁽³⁴⁾（菊川町）では丸子式土器の小破片が出土しているといわれ、嶺田遺跡（小笠町）では弥生時代中期中葉から遺跡が開始される。採集資料ではあるが同じく中期中葉から開始される遺跡に勝間田川流域の西川遺跡（榛原町）があることを付け加えておく。

瀬戸川流域の志太平野に位置する焼津・藤枝地区では古くに丘陵上に出現する遺跡は現在のところ発見されていない。沖積平野に位置する遺跡としては上藪田・川の丁遺跡、郡・平島遺跡（以上藤枝市）などがある。しかし、これらの遺跡では丸子式土器は出土しておらず、弥生時代中期中葉の遺物から始まり、弥生時代後期、古墳時代と継続して営まれている。瀬戸川下流の焼津市域に中期の遺物が見られないのは、地形的に当時集落を営営して稲作農耕をおこなうのに不適當であったのだろう。

安倍川流域を中心にした静岡平野では、縄文時代中期から丸子式土器までを出土する西山遺

⁽³⁵⁾跡（静岡市）の例や、丸子セイゾウ山遺跡⁽³⁶⁾、丸子佐渡遺跡⁽³⁷⁾（以上静岡市）のように丸子式土器のみを出土する遺跡はすべて丘陵上に立地している。沖積平野に立地する遺跡は弥生時代中期中葉からはじまり、最近調査された微高地上の駿府城三の丸遺跡⁽⁴²⁾のように駿府城の関連遺構下の数メートルの砂利層の下から発見された遺跡と、国鉄南側の低湿地帯に位置する有東遺跡、川合遺跡、神明原遺跡、宮川遺跡（以上静岡市）などがある。これらの遺跡はいずれも弥生時代後期、古墳時代と継続する遺跡である。⁽⁴³⁾

天竜川、大井川の大河川を本論で除いたのは、ともに氾濫が最近まであり沖積平野上で弥生中期の遺跡が確認されていないためである。

以上のような各河川流域の状況をまとめるとつぎのようになる。

- ・浜名湖周辺では、丘陵上または段丘上から水神平式土器、遠賀川式土器を出土する遺跡がある。しかし、沖積平野への進出は見られない。
- ・都田川では、丸子式土器出現期に大きな画期が認められ遺跡は沖積平野の微高地上へ進出した。弥生時代後期、古墳時代と継続し水稻耕作の定着を裏付けている。⁽³⁸⁾
- ・太田川流域では丘陵上に位置する遺跡と、沖積平野に位置する遺跡からともに丸子式土器を出土する。ただし、丘陵上の遺物は土器棺の単独出土と考えられ、沖積平野の遺跡は弥生時代中期につづき弥生時代後期、古墳時代と爆発的な増加を見せ水田経営の有利さを十分に示す地域である。⁽³⁹⁾
- ・菊川流域では、沖積平野のみに立地し、丸子式土器もわずかに出土するが、ほとんどが弥生時代中期中葉以降の遺跡である。⁽⁴⁰⁾
- ・瀬戸川流域では、丘陵上の遺跡はなく、狭い沖積平野に弥生時代中期後半から遺跡が営まれている。また、静かな“志太の浦”を前面に持ち、瓜郷式土器などの搬入品が散見できる。⁽⁴¹⁾
- ・安倍川流域では、丸子式土器を出土する遺跡は安倍川右岸の丘陵上に立地し、左岸の沖積平野には弥生時代中期中葉から進出してくる。これらの遺跡は関東系の土器と、瓜郷式土器の両方が見られるが、定着した様子を見せる関東系に対して、西からの土器は搬入品が多いようである。⁽⁴²⁾ 遠江・駿河の中期の土器を見ていくと今までの原添式土器を須和田式土器並行と呼ぶことにたいして、実は原添式土器が逆に須和田式土器成立に大きな影響を与えていることも考えられる。

以上のように、遠江・駿河地方の丸子式土器の出現段階で沖積平野に進出した遺跡は、都田川流域と太田川流域である。しかし、それぞれの遺跡の性格の違いは三河地方との距離の関係であろうか。条痕文系土器を出土する遺跡は山間部から平野まで各地にある。しかし、筆者は弥生文化の開始を次のように考えている。①出土土器②遺跡の立地③时期的なもの④次の時期への遺跡の展開と、これらの条件を満たした遺跡のみが水田をつくり稲作を開始しているのであろう。水稻耕作の開始（定着）をもって弥生時代とし、沖積平野への進出をもって稲作農耕の開始と仮定するなら、土器の形式名によって縄文時代と弥生時代の画期を示すことの矛盾は必ず生ずることなのである。

海の道・稲の道

「登呂遺跡のシンポジウム」では、舟による交通について、さかんに話題になっていた。陸路については、縄文時代からの道があるだろうからそれはある程度解決がつくだろうが、海の道の面から考えると海上交通は、内海である浜名湖の場合、外海である遠州灘の場合、湾内である駿河湾の場合とおおまかに3つの航海術を必要とする。

浜名湖は東西7km、南北12kmの大きな湖で、当時は現在と違って湖の南側は海とつながっていなかった。さらにこの湖はたいへん穏やかな湖面で、特に夏は風も波もなく湖全体に油をながしたようでサザ波さえたたない。実際、湖の中央まで初心者が、小さなカヌーで漕ぎ出してもなんの不安も感じない。湖西市から館山寺（浜松市）までの約7kmを1時間余りで渡ることも可能である。さらに帆を使っていたならもっと短時間でつく。ディンギークラスの小ヨットで追い風、追い波なら30分程でついてしまう。そのような自然環境から考えても湖を囲む平野の交流は盛んであったことが推測される。

遠州灘は黒潮が洗う海岸で流れは速く、波は高い。いったん航路を見失うと、船は伊豆諸島まで流されてしまう。伊豆諸島から条痕文系の土器を出土する遺跡がいくつかあるが、はたしてこの土器の搬入経路が伊豆半島からのものなのか。それとも黒潮によって三河から直接渡ったものか不明な点も多い。遠州灘で難波して打ち上げられた船は数知れず、近世まで東西海上交通の難所とされてきた。多くの遭難の話には、遠州に漂着した後醍醐天皇の子、宗良親王の伝説を生んだり、薩摩藩の船が難波したおかげでこの付近一帯にサツマイモが栽培されるようになったりしたが、船頭にとっては苛酷な海であった。とにかく、縄文・弥生時代でもある程度の航海術を持たない舟（人）でないと、ここを乗り切ることは難しい海である。

駿河湾にはいれば、海流も波も落ち着く。浜も砂浜がひろがり海水浴場がつづく静かな海である。ある程度の経験さえあれば小舟での航行も可能であろう。

志太の浦をこぐ船はよし無しにこぐらめかもよ由こさるめ（万葉集3430）

後れるて恋ひつつあらずは田子の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る（万葉集3205）

愛知県の三河湾に浮かぶ日賀間島の古墳群は、福岡県の貝島古墳群と並んで“海人”の遺跡として知られている。この古墳群の出土遺物は漁撈関係のものが多く古墳時代のこの島の持つ性格を推察することができる。さて、この島には新井浜貝塚があり縄文土器から水神平式土器、貝田町式土器、寄道式土器、古式土師器が出土している。このことから、島は古くから人間の足跡が残されており、本報告で問題にしている弥生時代中期にもさかんに生活が営まれていたと思われる。島の地形は必ずしも稲作に適しているとは言えず、漁撈の中継地として、また海上交通の要所として伊勢湾を中心にしながら遠江、駿河との交流に重要な地点であったのかもしれない。

年魚市潟潮干にけらし知多の浦に朝こぐ舟も沖に寄る見ゆ（万葉集1163）

最近東海の遺跡から舟の出土例が増えている。しかし、比較的小さな舟が多いようで、はたして実際に外洋を航海することができるかは疑問視する人も私を含めて多い。遠賀川式土器が青森県で出土したことが確認されて久しいが日本海を北上した土器に対して、太平洋側の荒波

のもとまだまだ基本的な疑問点はたくさん残されている。

谷水田・低湿地進出に対する疑問

初期稲作文化を語るとき必ず言われることは、水稻耕作の技術を持った一団は、まず沖積平野の中に島状に浮かぶ微高地、または飛び出した丘陵先端に集落を営み低湿地または谷水田を開拓して水田を経営したという主旨の仮説である。はたして初期の段階に谷水田や低湿地の開発から開始されたのであろうか。昭和56年から始まった袋井バイパス関連の発掘調査では、市内のほぼ全域から農家の人々が作業員として参加してくださった。その時地元の人々から聞いた太田川流域の明治ごろまでの水田経営（田植え→稲刈を前提とした）を中心にその一端を紹介したい。⁽⁴⁴⁾

- (1) 袋井市宇刈地区などでは昔、山合いの水田のため、田植えは降雨時以外はできななかった。
 - (2) 同じく宇刈地区の小丘陵に挟まれた谷状の水田では今でも必ず谷奥を堰とめて溜め池を作って灌漑をしている。現在、袋井市内には約600の溜め池がある。
 - (3) 国本地区の江戸時代に作られた溜め池の例であるが、約4万トンの貯水量をもつ池で雨水とあわせて21町歩の灌漑ができる。小さな溜め池は約千トンの貯水量からある。
 - (4) 宇刈地区の溜め池は数年に一回栓を抜いて水替える。初冬に行い村中総出になる。池からは鯉など大量の魚が捕れるので規則を決めて家々で分配する。
 - (5) 田植えの時、水は上の田からくるので必ず結（ゆい）が行われた。とくに山田の田植えは応援を頼んだ。
 - (6) 地区によっては水の都合により苗代場は共同となっている。
 - (7) 太田川・原野谷川のような中河川流域の水田では夏、水不足になる。そこで溜め池の水を使う地区もある。
 - (8) 日照りの時は、ただ神仏に雨ごいをするしかなかった。とくに異常気象の時は、原野で松根を掘り起こし大きな焚き火をした。竜神が雲（煙）に乗って降下するのを願ったのである。
 - (9) 鶴松地区の谷田は深いピート層であるため田下駄も役に立たない。丸太を横に組んで足場を作りそれにのって田植えをした。
 - (10) 谷田で田植えをするもう一つの方法は、地下2尺ほどのところに丸太を埋めておきそれを足で探りながら植えていく。もし踏み外すと腰まで泥のなかである。
 - (11) 深田で刈った稲の運搬には、「えどろ船」と呼ばれる竹の枝を束ねた船を使う。稲株をこの上に乗せ、浮力の限界になった時、畔まで押していく。綱をつけて引けば軽々と動く。
 - (12) 明治政府誕生とともにこの地域の稲作改良がおこなわれた。湿田が多く稲の倒伏が多いため倒れにくい稲を探す品種の選択や土地改良による乾田化をめざした。
- 以上のように、谷水田、低湿地を経営していくのは戦前の農業においても想像以上に難しく、

生産性もかなり低い。谷水田の深田の作業では膝や腰まで泥にもぐり、稲も倒れやすい。これでは農作業もたいへんであるが、ただ不作の場合は倒れにくい。豊作や良好な品種で、稲にモミが多く実るほど倒れやすくなるのである。谷水田はまた環境も悪く、必ず水不足があったり、水温の調節も難しいのである。さらには、丘陵の谷間で日照時間が少ない場合もある。もし百歩譲って、従来の説に従って仮に丸子式土器を出土する丘陵上の遺跡が谷水田を試みても正常な経営は不可能に近い状態であっただろう。これは、縄文時代後期、晩期に続いて丘陵上の遺跡で丸子式土器が出土しても、次の時期まで遺跡が残らないことと、沖積地に丸子式土器から登場する遺跡は弥生時代後期、古墳時代と爆発的に発達することが、それを証明している。また、丘陵上の遺跡には住居跡ではなく再葬墓などである。尾張・三河の沖積平野で稲作を行ってきた経験から、遠江の場合に生産性を犠牲にしてまで谷水田、低湿地に固執する必要はあるのであろうか。

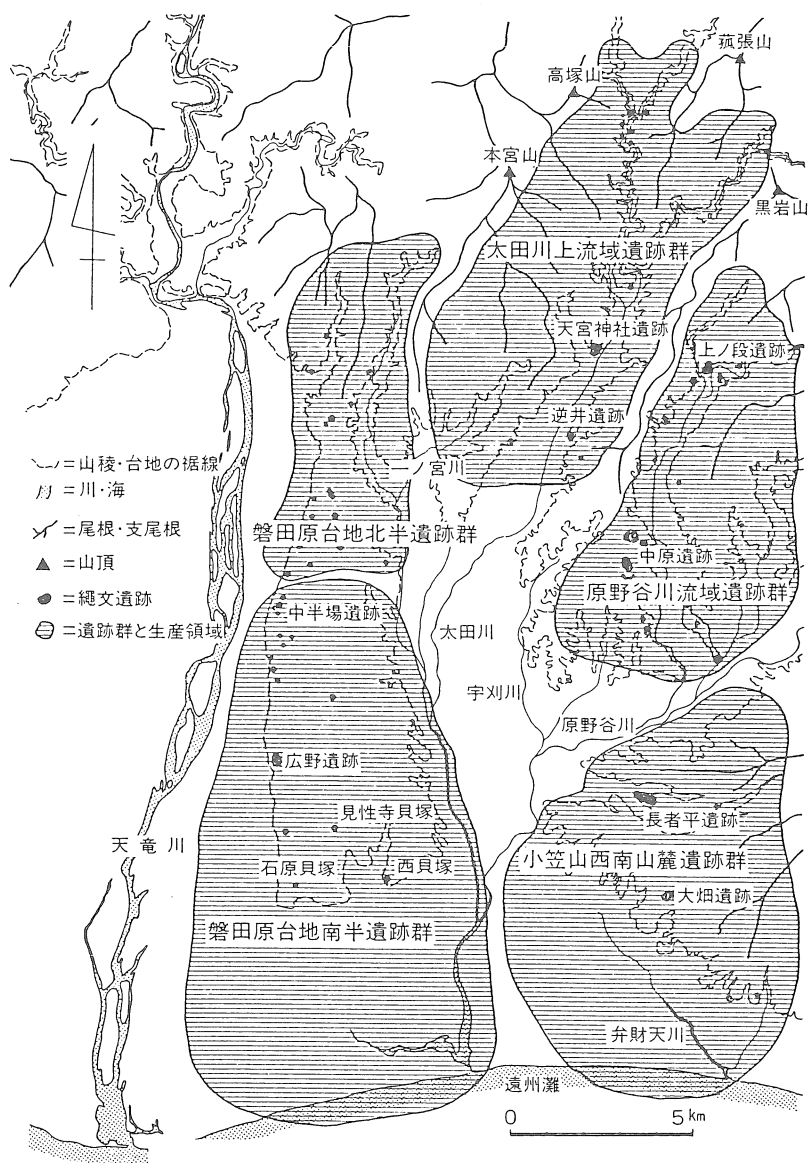
縄文／弥生をとりまく関係

本文のように、稲作文化の開始時期について考えていく場合、この地域の縄文時代晩期の様相からとらえて必要がある。しかし、残念ながら遠江の場合は尾張・三河地方と異なりこの時期の調査例が少ない。本地域に係わる遺跡についてまとめてみると、限られた資料ではあるが第22図と第23図のようになる。

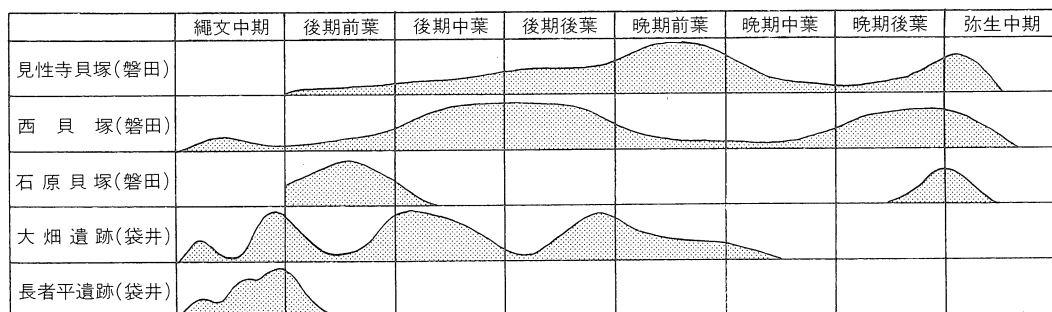
現在の太田川の河口付近は、たびかさなる洪水を防ぐため近世に大改修がおこなわれ旧地形とはすっかり姿を替えてしまっている。かつてこの付近は、天竜川の吐き出す土砂により砂洲が形成され出口をとぎされた太田川の水はここに古磐田海とよばれる潟をつくっていた。そして、潟をとりまくよう縄文時代の貝塚が展開していた。

第23図の縄文時代遺跡の盛衰グラフによれば、古磐田海の東岸の袋井市側の大畑遺跡（貝塚）、長者平遺跡（集落跡）は縄文時代中期の盛行期を境に徐々に衰退してしまう。一方、磐田原台地の南端に位置する石原貝塚、西貝塚、見性寺貝塚は縄文時代中期→後期→晩期とその盛行期をずらしながら次々と大規模な貝塚を形成していった。そして、弥生時代の黎明期に入ってもわずかに継続されている。この事実について見性寺貝塚の報告の中で平野吾郎氏は岡山県の例を引きながら古磐田海を領域とする人々が石原貝塚、西貝塚、見性寺貝塚と移動しながら生活していたと指摘している。これらは、次の段階で鎌田・鍬影遺跡、そして二之宮貝塚と続き弥生時代後期菊川式土器、古式土師器、奈良・平安時代の郡衙関連遺物を出土する御殿・二之宮遺跡の出現をみることとなる。

さて、話を袋井市域に戻すと、小笠山の西側で弥生時代の遺物を出土する遺跡は中期中葉からとなってしまう。おもな遺跡は、王子遺跡、狐塚遺跡、大門遺跡などであるが中期の前半の遺物を出土する遺跡はなく、また小丘陵や台地上に立地し沖積平野におりてくる遺跡も発見されていない。弥生時代中期前半の遺跡は逆に本報告で紹介した沖積平野の微高地上に位置する鶴松遺跡や、丘陵上に位置する森町の向天方遺跡の例になってしまう。しかし、弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代と継続して営まれる鶴松遺跡の場合と、弥生時代中期前半のみで断



第22図 太田川周辺の縄文時代生産領域（『袋井市史』より）



第23図 古磐田海を囲む縄文時代遺跡の出土土器量

（『見性寺貝塚の研究』『袋井市史』より）

絶してしまう向天方遺跡の場合と対象的な性格を示す遺跡である。このことについては、人間の動きもふくめて、さらに発掘資料の増加をまって遺物・遺構のみならず海進・海退や太田川の流路の関係を検討しなければならない。

近代農村に残る初期稲作文化

太田川流域で条痕文系土器を出土する遺跡は本報告で述べたとおり、向天方遺跡のように山間部の丘陵上に位置する場合と、鶴松遺跡のように沖積平野の微高地上に位置する場合がある。そこで、考古学的な方法論とは異なるが、農業の発達の比較的ゆるやかな第2次世界大戦前の農村の暮らしから、奈良時代以降の新しい条件を削除することによって残った部分から、水稻耕作開始期の状況を投影してみたい。現在の地形図の上では稲作に適しているような沖積平野も、実は地質的には稲作には不良な土地が各所に隠されており、農民たちの長年の知恵と努力によって現在にいたっている土地が多い。そこでは天災、人災を含めて不安定な生活を強いられることになる。本論では、弥生時代における稲作以外の食料確保の可能性について太田川流域の平野部の民俗事例を参考にして若干の考察を加えてみたい。

まず太田川流域は、豊かな自然に恵まれていたことは事実である。ひとつには小川、低湿地の沼、田、用水路などに淡水魚貝類が豊富であった。春から秋にかけて、雨で農作業ができない時、川にでかければ簡単に捕れた。春は、どじょう、たにし、はや、ふな、うなぎ、あゆなどが、秋は、もくずがに、どじょう、ふななどが捕れた。これらは、串焼き、火あぶりにして冬の保存食にすることもある。この付近の村では、魚貝類といえほとんどが川の魚や貝類であり、海が近くても海の魚はほとんど食べなかった。

近くの丘陵地帯も山野草、小果実、きのこが豊富で、わらび、ぜんまい、うど、たらの芽、しば栗、やまもも、しいの実、あけび、ぐみ、ふゆいちご、さんしょう、しいたけ、まつたけなどが採れた。

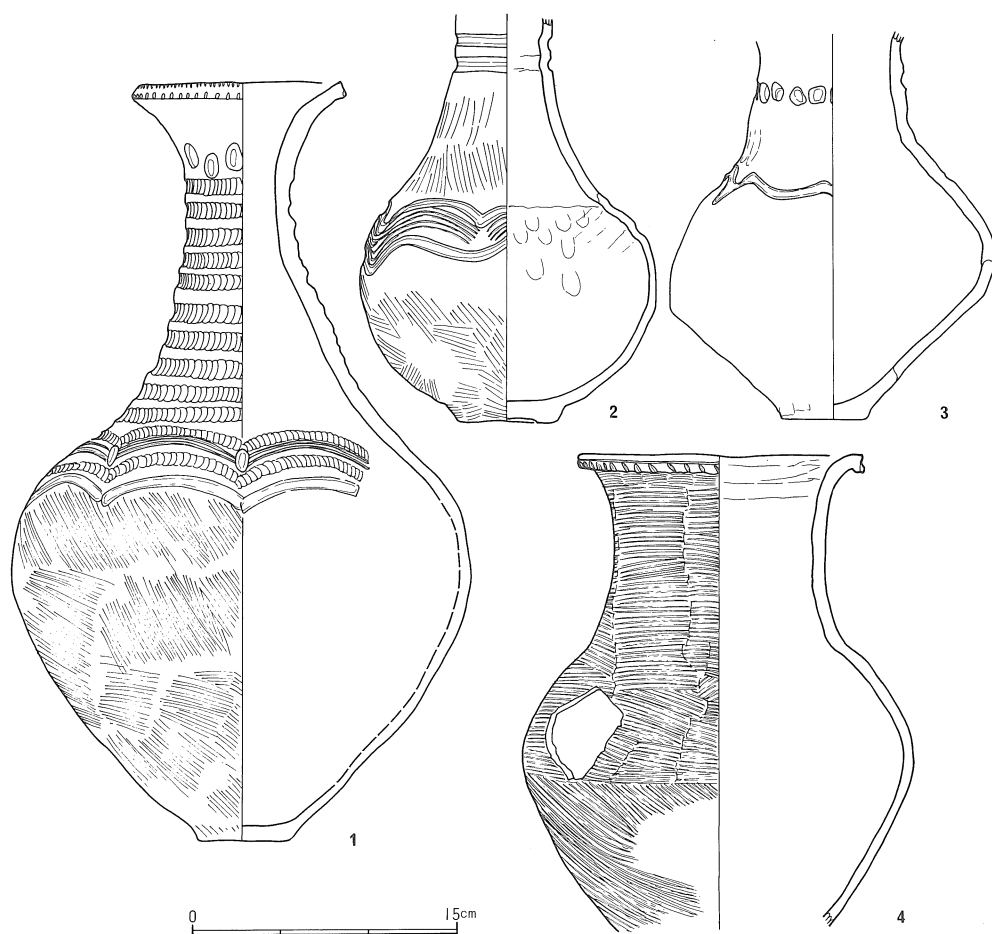
畑では野菜が作られ、芋類も作られた。特に里芋は乾燥している土地では作りにくい、この付近は低湿地で土壤中に水分が多いためよくできた。芋の貯蔵は水はけのよい畑に穴を掘って入れ上にワラを覆っておく。この付近もしばらく前までは白米のご飯が食べれるのは正月ぐらいでほとんどが米6／麦4の飯か、または麦飯だった。麦は小麦が栽培され、これは大麦より小麦のほうが低湿地に強いのである。

さらに、丘陵地帯は燃料となる雑木林もあった。燃料の確保はたいへん重要なことである。

このように豊かな自然は、弥生時代にもかかわらぬ恵みをあたえていたはずである。不安定な稲作技術を前提とした開拓者達にとっては周囲にあるすべての食料になるものは残すことなく確保し飢饉の恐怖と戦ったことであろう。

プラントオパール、花粉分析、水田雑草種子分析など、自然科学を応用した研究法の進歩により水田跡、畑跡などの検出は飛躍的な進歩をとげた。しかし、一番よいのは“遺構として水田跡”が発見されることである。静岡県の場合、例外として登呂遺跡の水田跡があるがその他の平野ではいまだ検出されていない。これは比較のおだやかな静岡の弥生時代の暮らしが、逆

に現在の水田跡の調査にとって決定的なダメージをあたえている。たとえば、ここ鶴松遺跡の位置する平野は弥生時代中期以降メートル単位で埋没する大規模な洪水を受けておらず、水田は弥生時代から現代まではほぼ同じ水準レベルで耕作されてきたのである。微高地を削って“島畑”を作る。そして、水田に稲を、島畑に芋類等を栽培したかもしれない。



第24図 磐田市馬坂遺跡出土土器実測図

後期弥生土器について

最後に、S D 7 の出土遺物を中心にして後期弥生土器について若干ふれてみたい。

第24図は『土橋遺跡』の中で、永井が発掘調査した周辺資料を鈴木敏則氏、中島郁夫氏の資料を加えて分類一覧表にしたものである。この時は、まだ鶴松遺跡の出土品は未整理の段階で土器分類の予感のみを感じていた。ここでは一覧表と本報告の遺物と対比しながらその問題点を探る。まず、「第22図 後期弥生土器一覧表」の使用土器について解説していく。

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. 鶴松遺跡Ⅱ S D 7 黒色土 3 | 11. 土橋遺跡 S K 3 覆土一括 |
| 2. 新豊院山遺跡 3トレ 溝跡内 | 12. 土橋遺跡 S K 3 覆土一括 |
| 3. 鶴松遺跡Ⅱ S D 7 黒色土 3 | 13. 土橋遺跡 S K 77 覆土一括 |
| 4. 鶴松遺跡Ⅱ S D 7 黒色土 3 | 14. 土橋遺跡 S K 77 覆土一括 |
| 5. 鶴松遺跡Ⅰ 鈴木敏則氏資料 | 15. 土橋遺跡 S K 77 覆土一括 |
| 6. 鶴松遺跡Ⅰ 鈴木敏則氏資料 | 16. 土橋遺跡 S K 77 覆土一括 |
| 7. 鶴松遺跡Ⅰ 鈴木敏則氏資料 | 17. 一色前田遺跡 2号住居跡 |
| 8. 鶴松遺跡Ⅰ 鈴木敏則氏資料 | 18. 一色前田遺跡 3号住居跡 |
| 9. 土橋遺跡 S K 3 覆土一括 | 19. 土橋遺跡 S D 10 覆土一括 |
| 10. 土橋遺跡 S K 3 覆土一括 | |

鶴松遺跡の資料の追加で、この「分類一覧表」も「編年表」として整理する必要があることを痛感している。しかし、太田川流域の資料は、鶴松遺跡1次調査、鶴松遺跡3次調査、徳光遺跡等の未発表資料をまだたくさん残している。昭和62年度には、これらの資料についてまとめていく予定であるのでその段階まで現在の「一覧表」を使用させていただく。

さて、今回の資料をこの表に比較していくとどうなるであろうか。第1類には、第6図—1（以下6—1と記す。）6—2などであろうか。第1類と第2類のあいだには6—6～6—12などが入る。第2類は9—8、9—15などである。第2類と第3類のあいだは9—1、9—2などが入る。第3類は7—1、7—2、9—5、9—7などである。第4類は7—18、7—19、9—16、9—26などである。そして第5類に該当する遺物は見当たらない。このような結果から一覧表とS D 7の土層を比較すると壺形土器に関してはおおむねつぎようになる。

(S D 7 黒色土 1) …………… (一覧表 第3類)

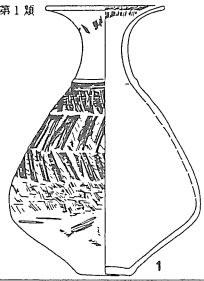
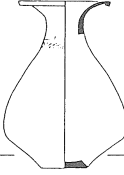
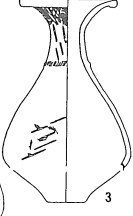
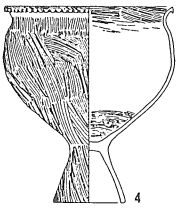
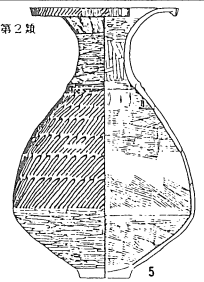
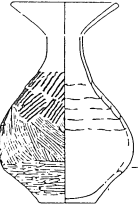
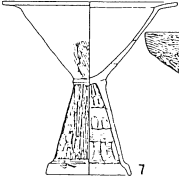
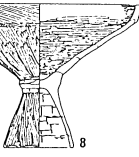
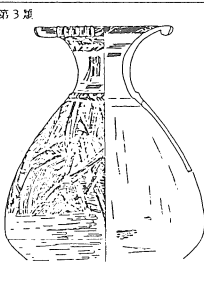
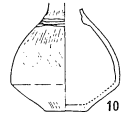
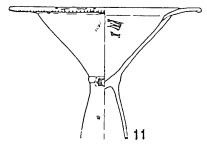
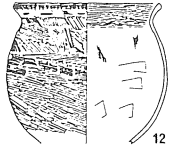
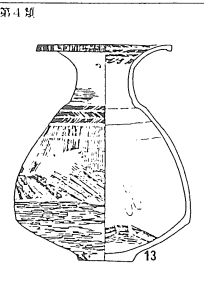
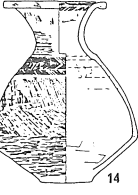
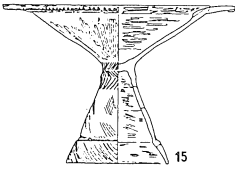
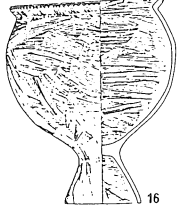
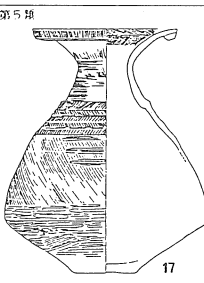
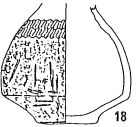
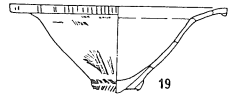
(S D 7 黒色土 2) …………… (一覧表 第2類)

(S D 7 黒色土 3) …………… (一覧表 第1類)

今回の資料の増加は、高坏形土器や甕形土器においては分類一覧表との矛盾を生じている。しかし、これは「編年表」の作成に向けて喜ばしいことである。この遺構一括遺物や層位を尊重し、机上論に終わることのない土器編年を62年度にまとめていきたい。本報告を編集するにあたり次の方々にご指導、ご教示をいただいた。文末ではあるがここに記して感謝したい。

中野有、浅野毅、伊藤寿夫、鈴木敏則、佐藤由紀男、平野和男、山村宏、柴田稔、山崎克己、平野吾郎、佐野五十三、梶田博之、石黒立人、辰巳和弘、吉岡伸夫、松井一明（敬称略）

（袋井市教育委員会 永井義博）

太田川中流域の後期弥生土器		
	壺形土器	関連資料
前 半	第1類 	  
	第2類 	  
後 半	第3類 	  
	第4類 	  
	第5類 	 

第25図 後期弥生土器一覧表

(註)

1. 加藤芳朗「土橋遺跡をめぐる地形・地質学的背景」『土橋遺跡—基礎資料編—』袋井市教育委員会他 1985
2. 永井義博「地理的環境・歴史的環境」『土橋遺跡—第1次調査—』袋井市教育委員会他 1982
3. 袋井市教育委員会『鶴松遺跡』1982
4. 静岡県教育委員会他『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1968
5. 袋井市教育委員会他『土橋遺跡—基礎資料編—』1985
6. 杉原荘介「駿河丸子及び佐渡出土の弥生式土器に就いて」『考古学集刊』4 1962
7. 柴田 稔「弥生時代の袋井市域」『袋井市史—通史編—』1983
8. 磐田市教育委員会『新豊院山墳墓群』1982
9. 増子康真氏、紅村 弘氏により研究されている。
10. 石川日出志「三河・尾張における弥生文化の成立」『駿台史学』52号 1981
設楽博己「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34巻4号 1982
11. 佐藤由紀夫「まとめ—土器について」『浜松市半田山遺跡(Ⅳ)発掘調査報告書』浜松市教育委員会 1986
12. 安本 博「静岡市丸子区細工所セイゾウ山遺跡と遺物に就いて」『静岡県郷土研究20』静岡県郷土研究協会 1939
13. 愛知考古学談話会『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題』1985
14. 藤枝市教育委員会他『上藪田・川の丁遺跡ほか』1981
15. 北武蔵古代文化研究会他『東日本における黎明期の弥生土器』1986
16. (11)と同じ
17. (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所『原川遺跡—昭和59年度発掘調査概報—』1975
18. 加藤賢二・大橋保夫「西方川河川改修工事における採集遺物(上)」『森町考古』9 森町考古学会1975
加藤賢二・大橋保夫「西方川河川改修工事における採集遺物(下)」『森町考古』13 森町考古学会1978
19. (13)と同じ
20. (15)と同じ
21. 久永春男「各地域の弥生式土器—東海」『日本考古学講座4』1956
22. 平野和男『磐田の古代史』19
23. (15)と同じ
24. (13)と同じ
25. 袋井市教育委員会他『山下遺跡』1984
26. (3)と同じ
27. (15)と同じ
28. (15)と同じ
29. (15)と同じ
30. (17)と同じ
31. (6)と同じ
32. 大橋保夫「向天方遺跡採集資料について」『森町考古』3 1971
33. (15)と同じ
34. 久永春男「大井川および菊川流域の弥生式土器」『大井川流域の文化』Ⅲ 1956
35. (15)と同じ
36. (13)と同じ
37. (13)と同じ
38. 佐藤由紀夫「都田川流域における弥生時代の開始」『静岡県考古学研究』17 1985
39. 掛川市教育委員会『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』1984
40. 向坂鋼二「榛原郡榛原町西川出土の嶺田式土器」『静岡県考古学研究』1 1978
41. (14)と同じ
42. 静岡市教育委員会により発掘調査。伊藤寿夫氏、浅野 毅氏のご厚意により実見させていただいた。
43. (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所により発掘調査。
44. 袋井市役所『袋井市史資料編—民俗・文化財・年表—』1985

(参 考 文 献)

- 島 竹秋「遠江における初期農耕文化の展開—西遠の場合—」『静岡県考古学研究』5 1979
- 平野吾郎『遠江見性寺貝塚の研究』1974
- 埼玉考古学会『埼玉県土器集成4（縄文晩期末葉～弥生中期）』1976
- 群馬県立歴史博物館『弥生文化と日高遺跡』1985
- 千葉県文化財センター『研究紀要3—考古学から見た房総文化—3、弥生時代』1978
- 松井一明「嶺田式土器の検討」『転機』創刊号 1985
- 浜北市教育委員会『浜北市芝本遺跡B地点』1985
- 愛知県教育委員会『朝日遺跡』1982
- 向坂鋼二「原始時代郷土の生活圏」『郷土史研究と考古学』1970
- 大塚初重・森 浩一『登呂遺跡と弥生時代』1985
- 紅村 弘『弥生時代成立の研究』1983
- “ 『東海先史文化の諸段階』1981
- “ 「弥生文化開始論争に於ける愛知県地方の持つ意義」『古代人』31 名古屋考古学会 1975
- 都田比呂志「農耕社会の形成」『日本歴史』東京大学出版会 1984
- 千曲川水系古代文化研究所『編年—中部高地における型式—』1980
- 野本寛一『大井川—その風土と文化—』1979
- 豊橋市教育委員会『瓜郷』1962
- 静岡市教育委員会『駿河西山遺跡』1985
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所『能島遺跡』1986
- 増子康真「美濃における弥生中期について」『古代人』31 名古屋考古学会 1975
- 鈴木敏則「二之宮式土器について」『森町考古』18 森町考古学会 1983
- 小畑頼孝「愛知県宝飯郡小坂井町篠東遺跡採集の弥生式土器」『足跡』3 東三西遠青年郷土研究クラブ
1978
- 三ヶ日町教育委員会『引佐郡三ヶ日町殿畑遺跡』1985
- 考古学談話会『マージナルNo.5』1985
- （財）愛知県教育サービスセンター『埋蔵文化発掘調査年報Ⅲ』1985
- “ 『勝川』1984
- 日本国有鉄道『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1965
- 浅羽町教育委員会『王子遺跡』1983
- 森 浩一編『日本の古代4 縄文・弥生の生活』中央公論社 1986
- 農文協『静岡の食事』1986

写真図版



(A) 調査区全景 (南より)



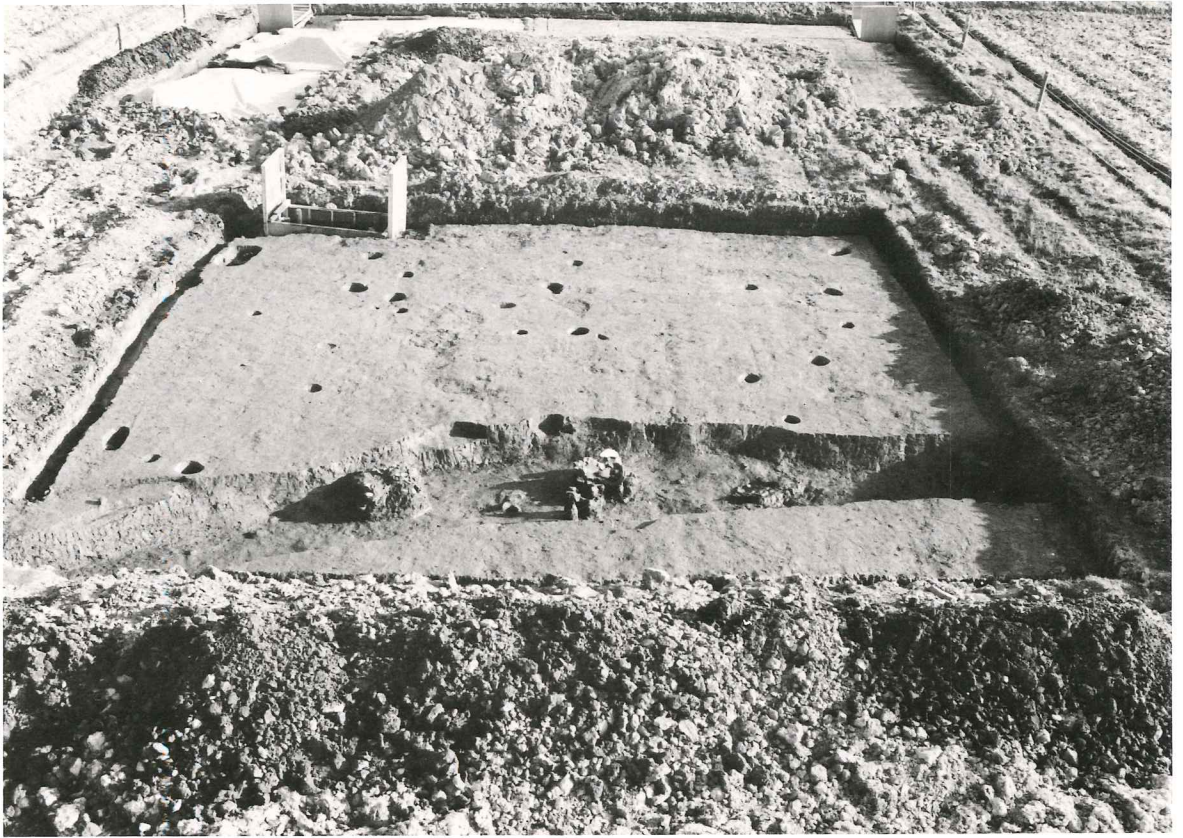
(B) 調査風景 (南より)



(A) S D 7 第 1 層の土器 (南より)



(B) S D 7 完掘状況 (南より)



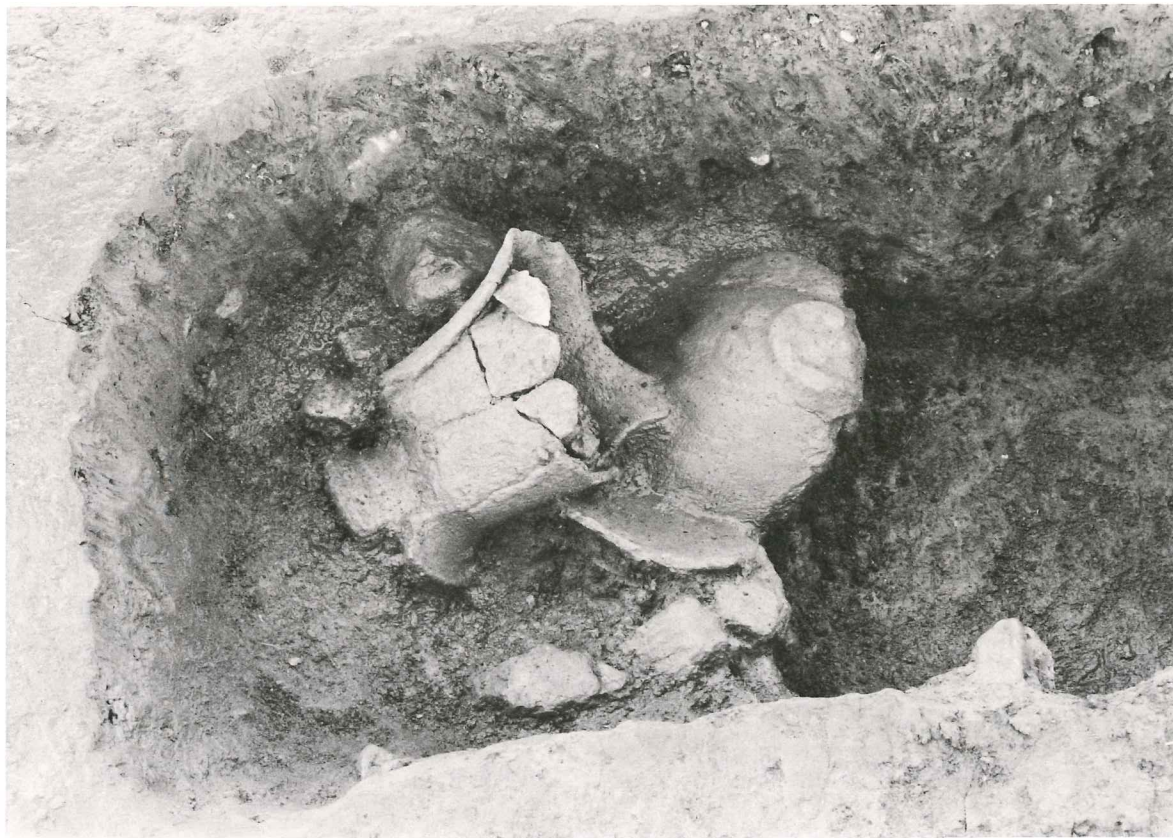
(A) S D 4 遺物出土状況 (北より)



(B) S D 4 完掘写真 (東より)



(A) S D 4 条痕文系土器出土状况



(B) Pit 7 土器棺出土状况



(A) S D 5 遺物出土状況 (東より)



(B) S D 1、S K 1 完掘状況 (北より)



(A) Pit 9 遺物出土状況



(B) SD 7 第3層遺物集中地点



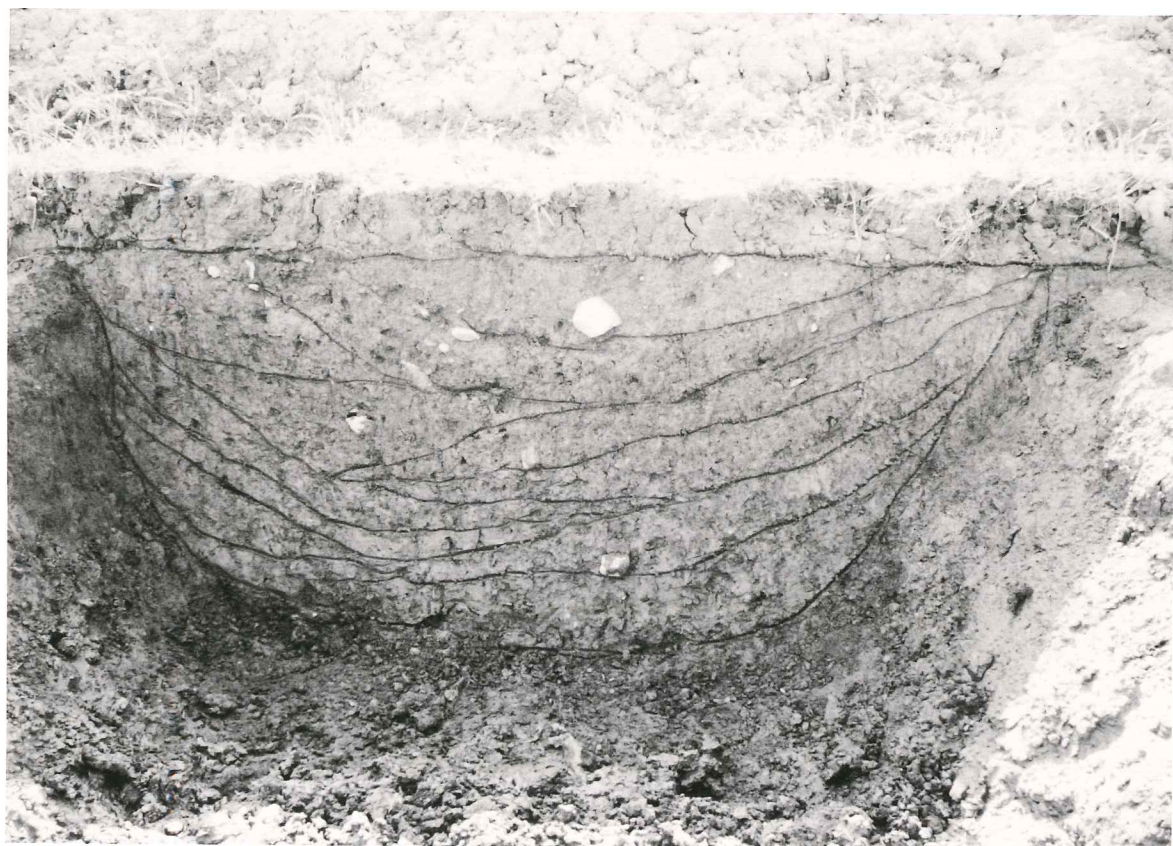
(A) S D 7 遺物集中地点 (北側)



(B) S D 7 遺物集中地点 (南側)



(A) SD 7、SD 8 重複関係セクション



(B) SD 4 上層と下層



4-1



4-2



4-3



4-4



4-5



5-8



5-2



5-3



8-30



5-4



5-1



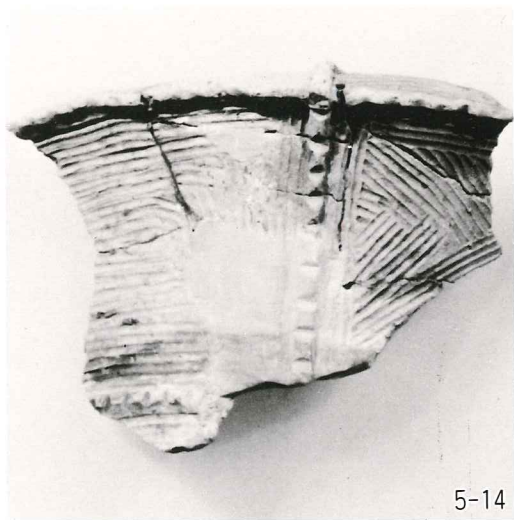
5-12



4-6



5-6



5-14



6-1



6-2



6-6



6-7



6-4



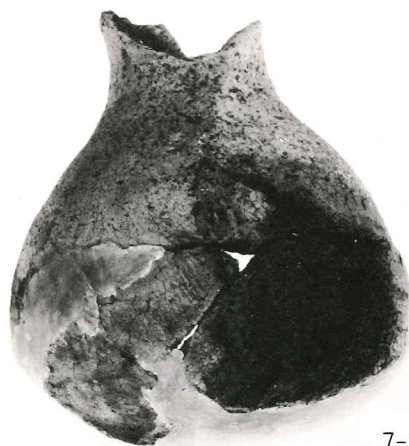
7-1



7-2



7-3



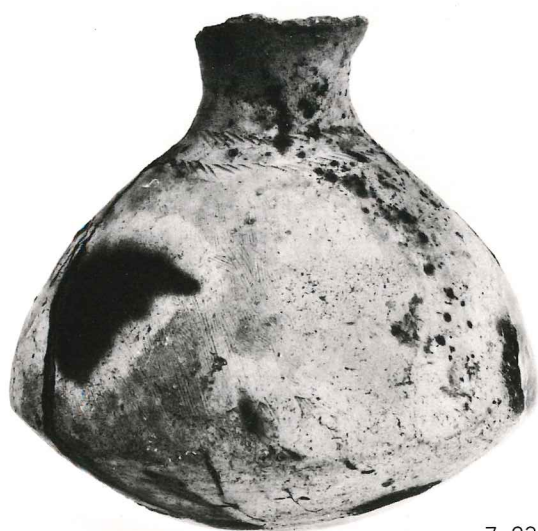
7-12



7-18



7-19



7-23



8-11



8-35



9-1



左から9-2、9-4、9-6、9-3の順



9-5



9-7

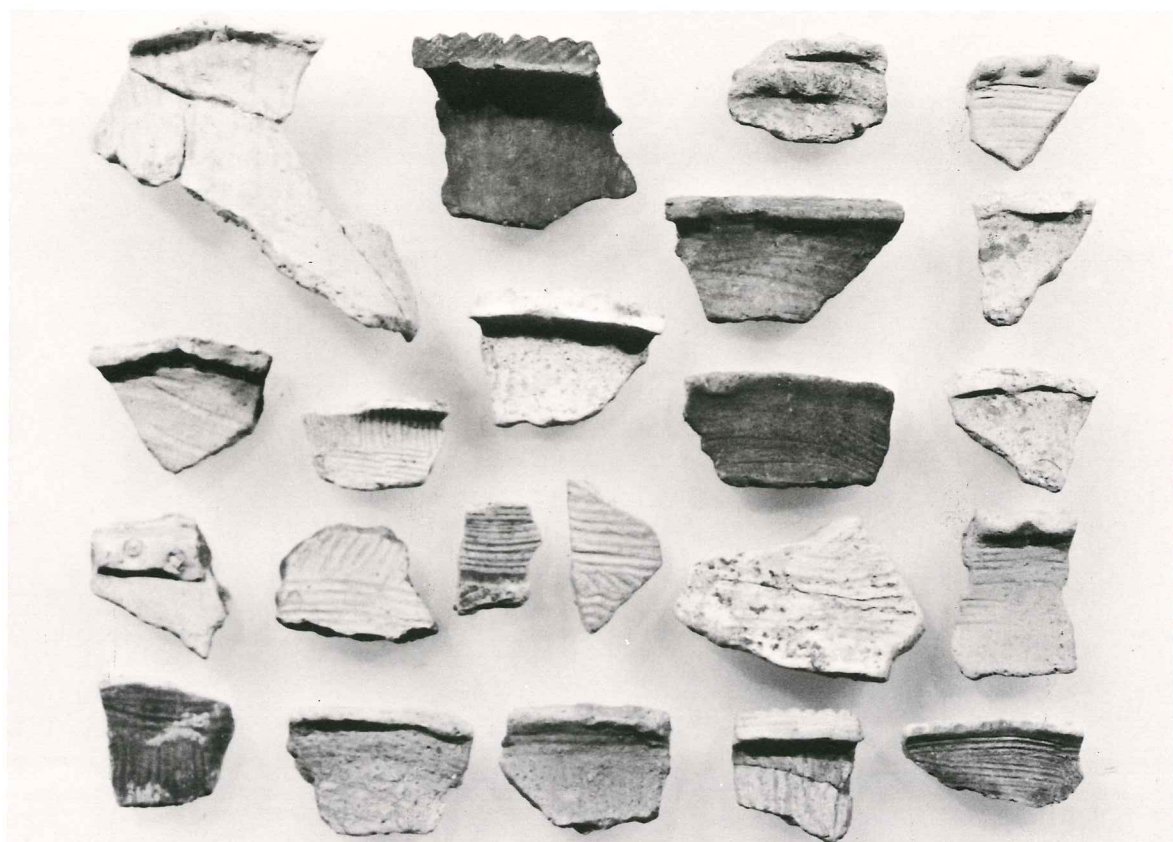


9-11





(A) 拓本No.1 ~No.17



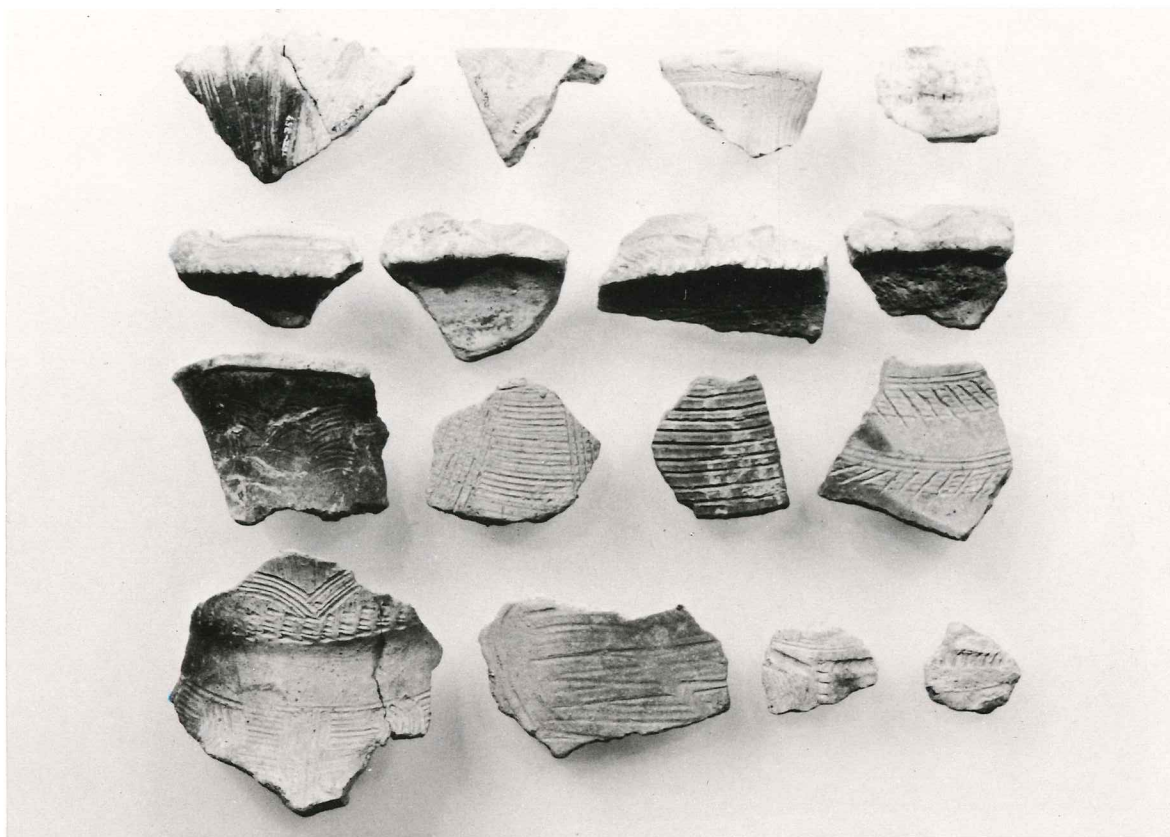
(B) 5-13、5-15とSD4 追加資料



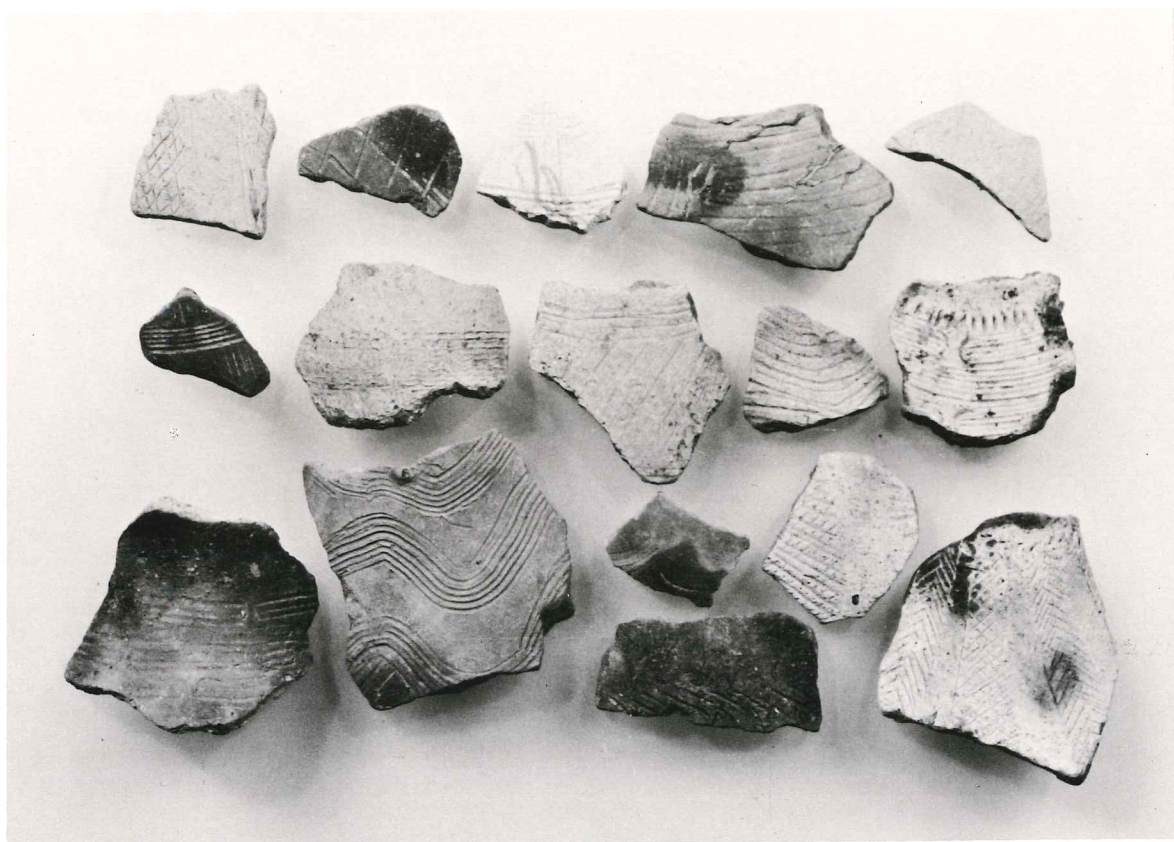
(A) S D 4 追加資料



(B) 拓本No.18~No.32



(A) 拓本No.33~No.48



(B) 拓本No.49~No.64



(A) 拓本No.65~No.83



(B) 拓本No.85~No.104



(A) 拓本No.105~No.135

鶴 松 遺 跡 II

1987年 2 月28日

編集・発行 静岡県袋井市教育委員会©

静岡県袋井市国本3070-1

TEL 05384 (3) 2111

印刷所 株式会社 開 明 堂

浜松市中沢町1番1号